椎名代理店

悟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
椎名代理店

【Ｎコード】
Ｎ９５８０Ｃ

【作者名】
悟

【あらすじ】
空想活劇第二弾です。フリージア王国ラフト＝シティ代理屋を営む二人の物語。

椎名代理店

「いらっしゃ……何だ、眼鏡か」
ノーティス通りに面した喫茶店『レスト』
店に入った瞬間にこの言葉が聞こえてきた。
「自分だって眼鏡かけてるじゃないか」
「何？」
小声で言ったのに聞こえたようだ。
「……店長来てない？」
「見て無いけど？」
「ありがと。じゃ」
店を出て行く。
ここじゃなかったか……。じゃ次に行きそうなのは……

フリージア王国『ラフト＝シティ』
ここにある『椎名代理店』
そこで働いているのが俺『小林千歳』と店長の『椎名夏子』
二人だけの『代理屋』
代理屋、依頼人に代わり名の通り代理を努めるのがこの仕事。
現在は俺が代理屋を雇いたい心境だ。
今、俺は店長を探して走り回っている。
行きそうな場所を探し回っているのだが、外れまくっている。
いい加減な性格の店長だが仕事は暇で無い程度に生活に困らない程度に回ってくる。
店長曰く「私のお陰」と意味の判らない事を言っていた。

走り回って着いた先は古本屋。
外から中を窺う。
店長らしき人は……

漫画コーナー付近にらしいのがいる。
「いらっしゃいませー」
店員の声がいくつも響く店内に入る。
……いた。
店長は俺に気付いた様子も無く立ち読みに夢中だ。
「ケータイを切らないで下さい。聞いてます？」
チラッと俺を見ただけですぐに目は漫画に戻る。
「何？」
「朝、事務所に行ったら誰もいないから探してたんですよ。ケータイも繋がらないし」
「それ位で……子供か？　お前は」
気に入ったのか、読んでいた漫画とその続きを数冊持ってレジへ、
「千歳、払っといて」
……ここでごねてもしょうがないので素直に払う。
店長が去った後で一言、店員に告げる。
「あの、領収書を」

店を出て真っ直ぐ事務所へ帰る。
ノーティス通りから路地一本入った所に建っているテナントビル二階にあるのが
『椎名代理店』
何の飾り気も無いドアを開く。
「じゃ、私は資料を読むから」
そう言ってソファに寝転がり、資料＝さっき買った漫画を読み始める。
「……どうぞ」
「ありがと」
テーブルにジュースを置く。
何にしてもこれで読み終わるまでは大人しくここにいる事は間違いない。

自分のデスクに戻って仕事。
といっても特にする事が無い事に気付いた。
ネットの世界をうろうろとしている。

それから数時間後、俺はネット世界から帰ってきたが、店長はまだ読んでいた。
俺はデスクに向ってこの前偶然解決した強盗事件の資料を読んでいる。
無論、暇つぶしではなく後学の為だ。
「すいませーん」
ノックと共に声が聞こえる。
「あ、はーい」
ドアの向こうには、依頼人らしき女性が立っている。

「こちらが店長の椎名で私が助手の小林です」
やる気がまったく見られない店長に変わり俺が話を進める。
店長は漫画を取り上げられて俺の隣で口を尖らせて拗ねている。
「『沢下あかり』さんでよろしいですか？」
「はい」
「免許にそう書いてあるじゃないか」
漫画を取り上げられた腹いせに細かいところにツッコミを入れてくる。
「で、どのようなご依頼でしょうか？」
完全にスルー。
「ふん……。私はやら無いからな」
ソファの上に三角座りでいじけている。
「ちょっと黙ってて下さい」
「あの」
店長の態度に不信感を募らせる沢下氏。

「あ、続けてください」
「まだ、何も喋って無いだろ」
「ホントにちょっと黙ってて下さい。……漫画捨てますよ？」
ズズズ……ジュースを啜る音で抵抗してくるが、予想の範囲内だ。
「『普浄』と言う野草を探して欲しいんです」
「んっ……『普浄』を探し出し入手でよろしいですか？」
普浄。とは野草の一種で病気に効くといわれている。
「薬買えばいいじゃん」
仕事だぞ？　分かってるよな店長！
「新薬開発に活かせないかと思いまして……」
「なるほど」
「そんな怪しい薬誰も……」
店長の口を塞ぐ。
「で、それの探索と入手。それが依頼ですか？」
「はい」
チラッと店長を見る。受けるか受けないかは店長の判断に任せる。
うだうだと文句を言いながらも今は他に依頼がないのが現状だ。
「……期間があれば。と言う事なら引き受ける」
「どれ程の期間内がよろしいですか？」
「年内なら」
この人も適当な性格なのか？　今年が始まって六ヶ月。あと半年あるんだぞ？
おそらくこの一言が決め手になったのだろう。
「この依頼引き受けます」

依頼人が帰った後、本屋で普浄の知識を仕入れる。
店員の目が痛いが気にせずにぶ厚く重い本を読む。
「なるほど……思ってたより薬草って使えるんですね」
て言うのが素直な感想。
「当然でしょ。昔は今みたいに薬が手に入らなかっただろうし」

言われて見ればそうだよな。
「でも、最初にこれで病気や怪我の治療された人は信じられなかったでしょうね」
「そうかも。誰もその効果を知らない訳だしね～」
本を棚に戻して、他の本を調べる。
「うーん、他のは……似たり寄ったり」
「そうですね」
「よし。帰るか」
週刊誌を立ち読みしてから事務所へと帰る。。

店に戻って詳しい情報がないかネットで検索。
「最初からコレでやれば良かったのに～」
漫画の続きを読みながら勝手な事をほざいている。
「店長が行くって言ったんじゃないですか」
……無視。
「で、どうやって探すんですか？」
「そんなの山に行って探すしかないでしょ」
「まぁ、道端や川原にはないでしょうけど」
立ち読みで仕入れた知識とネットでの共通した事は山に群生している。という事。
「場所と時季は分かる？」
「えっと……時季はちょうど今ですね。場所は……この辺だと……」
画面をスクロールして、
「麻蓬山……が一番近いかな？　えっと、ここですね。一番近いのは」
他の場所も載っているが麻蓬山が一番近い。
「近いって……車で三時間掛かるじゃん」
そんな事言われても……
「あ、近くに軍とかの演習場無かった？」
「えっと……」

麻蓬山近くの地図を開く。
「ありますね。……て言うか麻蓬山も演習場に入ってるかも」
「マジで」
いつの間にか店長の顔が肩越しにある。
「うーん」
口を尖らせて考えている。
「ま、しょうがないか。演習場に普浄があったら見つからないように取ろう」
「ちょ、ちょっと店長。そんな事して見つかったら」
「だから、見つからないように取るって言ったでしょ」
「え、いや、だから。見つかったらどうしようって言ってるんですよ？」
「見つからない様に取るの。だから見つかる事は無いの。分かった？」
「いや、だから……」
「細かい事は臨機応変に！　以上！」
こういう時は何を言っても無駄だということが、最近分かってきた。
「じゃ、車取ってくるから」
「今から行くんですか！？」
「善は急げ。知らないの？」
「それ位は知ってますけど。今から行けば着いたら夜ですよ」
「昼間よりは見つかる可能性は低いんじゃない？」
ふふん。と笑う店長。
その顔は見つかるほうが楽しみだ、と言わんばかりに輝いていた。

「じゃんけーん……ぽん」
店長がグーで俺がパー。
「じゃ、行きは私。帰りは千歳。それでいい？」
「了解」

一通りの準備を終えて、事務所に集合。
所長の愛車に乗り込み、一路麻蓬山へ。

ゆったりとしたシート。クーペなのに長時間乗っても疲れない。
等と最初に乗った時に自慢された事を思いだす。
カーラジオから聞こえる歌、ゴキゲンでハンドルを握っている。
夜の高速を快調に走り抜ける。

「着いたぞ」
店長の声で目的地に着いた事に気付いた。
「あ、はい」
車から降りる。いつの間にか寝ていた様だ。
「とりあえず、コレ」
渡される冊子。
「これの……二十ページに普浄の事載ってるから、形はコレで確認」
ぽん、と冊子を叩く。
「細かい事はその都度決めていこう」
「はい」
「じゃ、行こうか」

何が起こるか分からないので、無い事を祈るが一応戦闘の準備をしている。
「この状態で軍の演習場の連中に見つかったら何て言います？」
「うーん……薬草探してますって素直に」
「それで通じると思います？」
「お前には無理だろうけど私なら大丈夫じゃない？」
その自信はどっから来るのか？
「お前は野獣に襲われた時の為にって言えば？」
「それで通じると思います？」
……首を傾げる店長。

夜の山を歩く事……二時間。
懐中電灯の頼りない灯りと時折木々の間からの月明かりの下、登ったり降りたりを繰り返す。
「無いですね」
「……もう少し、向こうかな」
「危ないですよ。店長」
懐中電灯を持っているのは俺だ。
真っ暗な中を適当に歩いていく店長。俺の諌めの声も聞いているのかのかいないのか。
「……おい。電灯消してこっち来い」
そんなに遠くには行ってない筈なのに小声で呼ぶ店長。
「何……ぐ」
口を塞がれ、電灯を消して目だけで
「うるさい。黙れ」
と、威圧される。
「これ」
店長の指が何かに触れて、少し揺すっただけでカシャカシャと音が聞こえる。
「この先に行きたいんだけど」
俺の危険察知レーダーが警報を鳴らす。
口を塞がれているために、目だけで
「止めましょう」
と、俺の意思を伝える。
「これから先は単独行動。……見つかっても見つからなくても午前五時に駐車場に集合。ＯＫ？」
やっぱり俺の意思は伝わらない。何故だ？　店長の考えている事は目を見れば大体の事は分かるのに俺の考えは何故伝わらないのだろうか？
「じゃ、五時に」

そんな事を考えている俺を置いて店長はかすかな音を立てて金網を乗り越えて行く。

「まったく……」

辺りを窺いながらぼやいている俺。

金網の中に侵入してしまった店長を追いかけて俺も越えてしまった。うろうろとしていたら建物が見える場所にいた。

「見つかったらどうするんだ？」

ぼやきがきっかけで見つかっては余りにも間抜けなので余計に疲れる。

それならぼやかなきゃいいのだが、つい口に出てしまう。

「これが、軍の宿舎」

そうすると……随分入り込んでしまったな。

人の気配を感じ、植え込みに隠れる。

灯りは二つ。となると二人以上。

見つからない事を真剣に祈る。

緊張で喉が鳴る。その音でさえ聞こえないかと張り詰める。

見つかったら……悪い方へのシュミレートが進んで行く。

「ふー」

二人の警備兵が通り過ぎてからも五分位は隠れていた。

恐ろしく長く感じられた。

体中にびっしょりと汗を掻いている。

今夜は後何回、こんな思いをするのだろうか？

考えただけでもぞっとする。

建物から離れて、再び森を捜索。

「よくよく考えれば……こんな灯り一つで野草探そうというのはかなり……」

しまった。咄嗟に木陰に隠れたが気配は確実に俺を見ている。

静かに息を吐いて構える。

覚悟を決め、体を伏せて相手に向う。
俺の上を何かが通り過ぎる。
銃か？　いや、何か引っ張る様な音も聞こえた。
遠距離専用なら間合いを詰めれば、相手が軍人とは言え勝機はある。
相手の姿がおぼろげに見える。
……女か？　だが容赦はしない。
後一歩で俺の間合い。そこから全力で地面を蹴り、槍を突き出す。
金属音と共に右手に衝撃が走る。
牽制の突きが宙を突いた瞬間、相手が消えた。
何処に……
「いっ……」
探す間も考える間も無く、下からの衝撃。
ダン、と一歩下がって耐える。
対峙する相手は、女。
闇に慣れた目で見据える相手は、意思の強い視線で問い掛ける。
「誰ですか？」
場違い過ぎる質問に、
「小林……千歳」
と、馬鹿正直に本名を答える俺。
「小林……千歳？」
復唱されて、名前を言った自分のアホさ加減に気付いて顔が赤くなる。
「軍人？」
「違う」
「じゃあ、何で私の邪魔をするの？」
「邪魔って……俺にはアンタの都合なんか知らないし。俺達は普浄って……」
遠くから複数の足音が聞こえる。
「見つかった？」
「みたい」

「みたいって。他人事みたいに」
足音が近づく。
「囲まれてる」
足音だけでそこまで分かるのか？
目の前にいるこの女の素姓が気になるがそれどころではないな。

「そこでっ」
何をしている。そう言いたかったのだろうが、その前に女の攻撃がヒット。
後に倒れこむ兵士。
呆気に取られる俺と兵士達。
「あ、ちょっ」
「キミも捕まりたくないでしょ」
俺の手を引いて走り出す。
一瞬遅れで兵士達が追いかけてくる。

森の中を走る。方角も何も分からない。
確かなのは降りている事。
「ちょ……何処へ？」
かなりのスピードで駆け下りる。
木々の間からぼんやりと光りが見える。
「ソレ、使えるよね？」
「ソレって？」
「キミが手に持ってるソレ」
槍の事か。
「あぁ、まぁ……人並に」
「なら、構えて」
「何で？」
「捕まりたくないでしょ？」
森を抜け、手が離される。

……こういう事か。
武装した兵士八人が俺達を囲んでいる。
「大人しくこちらの」
「従う訳無いでしょ……起動しないであげる」
女の先制攻撃。
左手に装着しているシールドからワイヤーが伸び兵士にヒット。
伸び切ったワイヤーを巻き戻すタイミングで兵士が間合いを詰める。
「あまい」
振り下ろされた剣。スッと間合いを詰め右手そ相手に添える様に軌道を変える。そのまま足を振り上げて顎を蹴り抜く。
「邪魔しないで」
もう無理だろう。
残る六人が戦闘体勢に入っている。
「こちら、第八ゲート！　怪しい二人組みを発見！」
一人が応援を呼ぶ。
「キミだけでも逃げられる？」
「え？　逃げないの？」
「私はする事があるし」
「する事って……この状況じゃ何も出来ないだろ」
「どさくさに紛れてやるから」
「な、何を？」
俺を見る目が悪戯を思いついた子供の様に微笑む。
「暗殺」
冗談とも取れる言葉。
誰がターゲットなのか？　それはここで一番偉いヤツ。
名前は知らない面識も無いが俺の正義感と呼べる心が女を止める事を決めた。
「じゃ、幸運を」
兵士に向って行く女。遅れてそれに続く。

「侵入……」
立ち塞がる兵士達を薙ぎ倒す女。
この状況では俺も共犯……て事になるのか？
「ちょっと……待って」
「何でついて来るの？　さっさと逃げれば良かったのに」
「人を殺すと聞いて……逃げられるか」
俺が彼女を追いかけている理由。
「じゃ、私の邪魔するの？」
階段の途中で立ち止まり、振り返ったその顔は殺気が篭っていた。
「邪魔とかじゃなくて……」
「じゃ、何？」
声に苛立ちを感じる。
「何で……」
「殺すかって？　聞いてどうするの？　その理由を聞いてそれで納得出来る？」
……無理だろう。
例え親の仇でも。
「……邪魔するのなら」
女が構える。
ダン。コンクリートの踊り場を蹴る音。
「え」
視界から女が消える。
何処？
「がっ」
背中に衝撃を受ける。
階段に正面から突っ込む。
「この程度では済まさないよ」
見下ろされるその目に本気で殺されると思った。
正直、ここで一番偉いヤツが死のうがどうしようが俺の生活に影

響は無い。
「済まないって？」
呼吸のたびに体が痛む。
でも、そう簡単に割り切れないのが人の心ってモンだろ。
ゆっくりと立ち上がり、
「じゃ、どうする？」
女は答えず、左手のシールドを俺に向ける。
射出されたシールドを避けると、目の前に女がいた。
巻き戻されるシールドの軌道にいるとヤバい。
しかし俺の考えを先読みして、行動する女。
場慣れしてるな。くそ。
「くっ」
密着されたままの攻撃。長柄では防衛で手一杯だ。
足を払われる。咄嗟に避けるが体勢が崩れた。
「痛っ」
強引に体を捻り直撃を避ける。ギリギリで避けられたがシールドの尖端が俺の肩を掠める。
「まだ……やる？」
少し間合いを開けて余裕の声。
肩に暖かい感触。
その声に腹が立ったが、実力差はどう考えても向こうが上。
この差はどうしようも無い。それに無理に勝つ事は無い。向こうが諦めなきゃいけない状況にする事で俺の目的は達せられる。
……麻蓬山に来た目的とは大きく外れているけど。
「この程度で……勝ったなんて」
今度は俺から仕掛ける。
突きから斬り上げ。間合いを詰めて振り下ろして薙ぎ払う。
体の動きだけで避けられる。
右手を大きく引いて捻るとカキン、と小さく音がする。
左手に持った槍の後方部を振り抜く。

完全に意表を突いた。そう思ったが、
ガキィィン……
「っっ～」
金属音と女の痛そうな声。
シールドで防がれた。
短槍二振り。それが俺の戦闘術。
「珍しい。と言うかそんなの初めて見た」
軽やかに、舞う様に攻めてくる女。
彼女のシールドが輝いている。俺もレーザーを起動して中和する。
お互いの武器が触れる度に光りが飛び散る。
徐々にスピードが上がる。
右肩の痛みが増して行く。劣勢になり、壁際に追い詰められる。
「くそ」
「もう分かったでしょ？　邪魔しないで」
首にシールドが当てられる。
「殺さないであげるから……もう」
「もう？　何？」
やっと……来た。
俺と女の間に光りが駆け抜ける。
「あなた方が何者なのかは後でゆっくりと聞かせてもらいます」
凛々しく構えるその後姿は俺の視点から見ると……随分
「キミは？」
「私は『雪原純子』『騎士団』所属です」
騎士？　こんなちっちゃいのに！
「そう……なら」
ワイヤーが飛ぶ。
それを避ける。
と同時に俺と騎士が間合いを詰める。
俺が払いと振り降ろしで女の体勢を崩す。
その隙を狙い、騎士が

「やぁぁっ！」
レーザーこそ起動していないが躊躇いを感じさせない剣閃。
その剣をシールドで受け、弾く。
その勢いを保ちシールドでの裏拳。
俺も左手の槍で遠心力を使い、騎士の頭上から真っ向から受ける。
武器が触れる瞬間、僅かに軌道を変える。
手にシールドの微かな感触。
切っ先は女の顔に届くと思ったが、ギリギリ届かなかった。
お互いの攻撃が空を切った瞬間、
「つぁ！？」
女の右足が顔にクリーンヒット。
倒れる俺の視界で騎士の剣と女のシールドが何度か火花を散らしていた。

かなりの人数の足音が近づいてくる。
「む～。時間切れか」
女が悔しそうに呟く。
「ま、後はキミが逃げられるか、楽しみにしてるよ」
階段を駆け上がり、兵士をなぎ倒しガラスが割れる音が聞こえた。
「……キミは？」
倒れた俺に剣が向けられる。
……えっと……
「俺は」
「俺は？」
「何て言ったらいいのか」
頭の中は、どうやってこの状況から逃げるか？　その事で一杯でパニックだ。
闘う事は無理だ。余計な誤解を招いてしまう。
とにかく隙をついて逃げるしかない。
「そこまでだ！」

一、二……五人。
騎士の目もそっちに向いた。
チャンス！　かどうかは分からないが体は動いた。
「あ！　待て！」
とりあえず階段を駆け上がる。
こっちには誰もいない筈。なぜなら女が皆やっちゃったから。
後は……俺に飛び降りる勇気があるか無いか。それだけだ。

「ふ～」
どうにか振り切った……様に見える。
いつの間にか空が白み始めている。
時計を見る。
四時五十分。
場所は運良く待ち合わせの駐車場。
車にもたれかかり空を見上げる。
疲れた……。
ただそれだけだ。普浄は探して無い。そんな暇無かった。
兵士に見つからない様に、ここに来るので精一杯だった。
あとは店長が頼りだ。

「うわっ！」
「うわっ！」
肩を揺すられて飛び起きる。
見つかった！
「痛っ！」
「ビックリさせんな」
聞き覚えのある声。
「～～～」
心の底からの安堵の声にならない声。
「な、何？　その涙目は」

「良かった～」
あ、本気で泣きそう。
「で？」
「ん？」
「ん？　じゃなくて見つけた？」
……何の事だ？
……あ。
「それどころじゃなかったんですよ！」
「うるさい！」
一喝。
「見つからなかった。そういう事か！」
結論はそうなる。
ただ、黙って頷くしか出来ない。
「まったく、お前は何しにここに来たんだ？」
俺にもいろいろとありましてね、依頼の事を忘れてた訳じゃないんですよ。
店長がゴソゴソと持っているバッグを漁る。取り出したのは、
「見ろ。私がどれだけ真面目に這いずり回ったのかを！」
「とにかく！　早くここから離れましょう！」
店長のバッグから車の鍵を取り、運転席へ。
「おい、ちょっと」
「早く！　店長！」
助手席を開けて急がせる。
「な、何をそんなに」
普段ならこんな事はしないが、下手をすれば指名手配をされかねない状況だから俺も必死だ。
「説明は後で」
ホイルスピンで発進。
「おい！」
アクセルを踏み込み、駐車場から出る。

「馬鹿じゃないの？」
そんな言い方無いでしょう。店長。
「不可抗力というか……何と言うか」
「何とも言わない。そんなのは」
帰り道のサービスエリアでの仮眠と朝食の後、店長は普浄を発見入手。俺は騎士や軍、それに妙な女の事を話す。
それについて店長の一言が俺の心に突き刺さる。
「まったく……見つかったらヤバいとか言ってたくせに」
「返す言葉も無いです」
俺にも事情があったのだが、自分でも説明できない程に状況に流されていた事に気付いた。
「……ま、怪我してなくて良かった」
窓の外を見ながらぽつりと呟く。心配はしてくれている様だ。
「じゃ、さっさと帰ろうか。検問とか張られると面倒だし」
「はい」

翌日、依頼人の沢下さんと連絡を取り、確認を取って貰う。
「はい。間違いないです」
「では、依頼は完了。と言う事で」
「ありがとうございました」
依頼の品を引き渡し、報酬は後日支払う事を確認して今回の依頼は終了。

追跡

前回の報酬を受け取る。
意外に早く手に入れてくれた。と言う事で契約より多く報酬を頂いた。
なので、多く貰った分を山分けする事に。
「六・四で」
「はい」
ま、見つけたのは店長だし、俺は色々と危ない目にあったが結果だけ見れば何もしていない。
「じゃ、一、二……」
四割でもそれなりの臨時収入だ。
「よし。ご飯食べに行こうか！」
「奢りですか？」
「じゃんけーん……」

「お、二人で来るのは久しぶりですね」
いつもの喫茶店『レスト』に入る。
「衣里。いつもの」
席に着くより早く注文。
「了解。眼鏡は？」
お前も眼鏡だろ。
「同じ物」
「了解。席は……適当に座ってて」
開いてる席は一つしかないじゃないか？　何て適当な店員だ。
待つ事十分位で『いつもの』＝日替わりランチがやってくる。
忙しいであろう時間帯。それは良く分かっている筈だ。
それなのにゆっくりと食後のコーヒーを啜り、新聞を熟読している店長。

「店長。じゃ、俺はこれで」
いつまでも店を空けとく訳にはいかない。
「ん」
ピッと指で弾いた紙切れ。
「分かってますよ」
じゃんけんで負けた俺。なのでそれを持ってレジへ。
「じゃんけん……弱っ」
運悪くレジには衣里。
一瞬で看破された。
「うるさい。早くしてくれ」
「はいはい」
半笑いなのが気に入らないが、口で勝てるわけが無いので黙っている。

店に戻り、今回の依頼の顛末をまとめる。
一時間近く経つが店長は帰ってこない。
「ま、静かで良いな」
カタカタとキーボードを叩く音だけの室内。突然ドアが開く。
それに気付いて顔を向ける。開くドアの向こう居たのは、
「や、無事でなにより」
あの女。
「な、何しに」
ヤバい。武器になりそうなものを手探りで探す。
「そんなに恐がらなくても何もしないよ～」
微笑む女。その屈託の無い笑顔からは敵意は感じられない。
「じ、じゃあ……何の用が？」
「ちゃんと逃げる事が出来たのか気になった」
ポリポリと頬を掻くその姿に、キョトンとしてしまう。
あの夜感じた殺気は今思いだしても体が強張る。
「私の用はそれだけ。じゃあね」

軽やかに帰っていく女。

「ふー……」

時間にして二、三分の対面。

俺の判断で可愛い部類に入る女。

笑うと八重歯がきらりと見えるその顔は、あの夜の事さえ知らなければ……

と思わせる。

「何なんだよ」

「今誰か来てなかった？」

入れ違いで帰ってきた店長。

「……何してたの？」

「え？　別に何も」

「何？　その汗は」

店長に言われ、額に触れる。

「うわ……何？」

「いや……汗でしょ」

とりあえず顔を洗いに行く。

「ふーん。じゃ入れ違いになったか」

あの夜の出来事は当然店長に報告してある。

俺は危険だと言ったのに、残念そうに見えるのは何故だろう。

「もしかしたら、すれ違ったのかもしれませんね」

「しかし……何で千歳がここに居るって知ってたの？」

「……え」

言われてみれば……教えた事はない筈。

「アンタ自分で言ったの？」

「言ってないと……思います」

「となると、見かけたか……」

「み、見かけたか……？」
向こうの顔は俺も知ってるから見れば俺も気付くと思うけど。
「次のターゲットか」
「何で笑ってるんですか！？」
「楽しいそうじゃん。千歳君」
「楽しくないですよ！　狙われてるんですよ！？」
「ま、そう決まった訳じゃ無いし。一つの可能性として言っただけだし」
「何で俺が狙われるんですか？」
「何でって、そりゃアンタが『仕事』の邪魔したからじゃないの？」
……そりゃ……してないとは言わないけど。
「ど、どうしましょう？」
微笑む店長。
「笑ってないで何か……」
「プッ……あっはっはっはっはっは」
仰け反って笑う店長。
「何が可笑しいんですか？」
俺に取っては笑い事じゃない。
「はっはっは……こんなに笑わせてくれるとは……」
目元を拭うほど笑っている店長。
「相手は軍相手に暗殺しようとしてるんですよ？　俺なんかじゃ相手にも」
「馬鹿だね～。そんなヤツがアンタ狙うと思う？」
……言われてみれば。
「そ、そうですよね。そんな事する様なヤツに俺みたいな市民が狙われるなんてありえないですよね？」
「……そう言い切れない所が運命の妙味かな」
「て、店長～」
こ、この人は俺が困ってる様子を見て楽しんでるんだ。
それが分かっているのに……何故俺はこんなにも心配しているんだ？

「千歳。誰か来たぞ」
「店長が出てくださいよ」
「ヤダ」
ま、そう言うと思ってたけどね。
開いたドアの向こうには、
「あの、ここは代理屋ですよね？」
「はい。そうですが？　ご依頼ですか？」
頷く女性。
「では、こちらに……」
応接セットで新聞のクロスワードに取り組んでいた店長から新聞を取り上げる。
「あ」
泣きそうな顔の店長に、
「仕事の依頼があるんですが」
「それより……あとちょっと」
「とりあえず、話の後でいいですか？」
「あとちょっと……」
「あ、どうぞ。掛けてください」
「はい」
「では、お名前から」
「『後藤遥』　株式会社リフタに勤めています」
「ＯＬか～」
何故か微妙にテンションが上がった店長。
「はぁ」
店長の眼差しに戸惑いながらも話を続ける。
「最近、ていっても二ヶ月位前からなんですけど」
俯く後藤依頼人。
その姿は言う事に躊躇っている様にも見える。
「し、下着泥棒が私達の下着を盗んでいくんです」

「下着ドロだし下着を取るのは当然だ。警察に言ったらすぐに解決するんじゃない？」
「もう言いました」
「なら、それなりの対応はあったでしょ」
「確かにパトロールは多くなりましたけど」
「相手はその隙をついてきた……と」
「はい」
「パトロールの時間を読まれちゃ意味無いな」
「盗まれたと気付くのはいつですか？」
メモを取りながら尋ねる。
……ん？
何か……変な事言ったか？
店長の俺を見る目が憐れみを帯びている。
「そんなの……決まってるじゃない？　取り込む時以外無いでしょ？」
……
顔が赤くなる。
言われて見ればその通りだ。
何て馬鹿な事を聞いたんだ。
「アンタ……て……天然？」
笑うのを堪えている声が、自分のバカ発言を引き立てる。
「違いますよ」
「そう言われても説得力無いんだけど」
俺も返す言葉が見つかりません。
「じゃ、依頼はドロの追跡と逮捕でいい？」
店長がメモを取っているふりをしている俺に代わり依頼内容を確認。
「はい」
「分かりました。では……千歳、契約書」
デスクから契約書を持ってきて依頼内容の確認と契約についての

説明。

翌日、ハイツール通りから少し離れたアパート。後藤依頼人のリフタ女性専用アパート。つまり女子寮前。

「うわ～。千歳にはパラダイス？」

「何でですか」

店長の言葉に呆れつつも、若干テンションが上がる。

午前九時。ちらほら人を見かけるが通勤通学の喧騒も収まりつつある時間。

「何号室？」

「えーと。二〇一号室ですね」

「ほ～。最上階に住んでるのか」

「二階建てですけど」

「それでも最上階」

「ま、そう言えますけど」

イヤミにも聞こえますよ？　分かってますよね？　店長。

「おはようございます」

後藤依頼人の部屋で挨拶もそこそこに、

「ベランダ見せてもらいます」

「あ、はい。どうぞ」

ベランダに出て、俺達が来た道を見下ろす。

「いつもこの位しか人は通らないんですか？」

「千歳。やっぱりお前は天然だな。普段、彼女は仕事に行ってるだろう」

「あ」

……俺ってこんなに天然だったのか？

「ま。それは管理人に聞くとして。このアパートの住人全てが被害に遭ってる？」

「はい。会社に相談もしましたし、警察にも」

「で、状況は改善されない」
「警察のパトロールが始まった直後は収まってたんですけど」
「しばらく観察してて、パトロールの合間のタイミングでやってるのか」
「ま、そんなトコだろ」
ベランダから身を乗り出すようにして辺りを見回している店長。
「で、どうやって泥棒を捕まえます？」
「逮捕は代理屋じゃなくて警察の仕事。現行犯を取り押さえるのが手っ取り早いかと」
クルッと反転して、
「じゃ、さっさとパンツ洗って干して」
！！！！
「え、え！……え～！？」
一瞬の間をおいて驚く依頼人。店長と俺を交互に見るその顔は真っ赤だ。
「その間、千歳は見張り。この辺りをグルッと歩いて来い」
「……了解」
半笑いの店長。おそらく俺の顔も後藤依頼人に劣らずに赤いのだろう。

「ふー、まったく……」
そりゃ俺も現行犯しかないと思うけど、突然あんな事言わなくても。
からかってるんだよ。絶対に。依頼人を。
テクテクと歩いている。公園を通り過ぎ、コンビニの前でケータイが鳴る。
着信は……店長。メールだ。
「ノドカワイタ。オレンジジュースショモウ」
何でカタカナ？　そして気持ちの悪いタイミングの良さ。
思わず振り返る。

誰もいない。戻って電柱の後や路地を確認するがやっぱり誰もいない。
俺のケータイにＧＰＳはついてない。
残る可能性は……
パンパンと服を叩く。
俺の体が痛いだけで、特に変わった感触はない。

アパートまでの帰り道、俺なりに色々と依頼について考える。
まず最初から、
二ヶ月ほど前から泥棒が入る。
盗られるのは下着。
それに対応するために警察に通報。
その後、パトロールが多くなるがその隙をついての犯行。
では、ドロの思考は？
いつ狙うのか？　いつ行動するのか？
夜か？
……いや、夜なら人通りはまったく無いだろうが怪しすぎるだろう。
では、昼？
パトロールの隙をつくにしても毎日同じ時間にうろうろしてたらそれも怪しい。
「うーん」
考えれば色々と浮かんでくるが、すぐにそれに対する疑問も浮かんでくる。
「訳解らん」
アパート目前、すれ違う人が振り返る。
あ、別に、何でも。
声に出さないがそんな思いで軽く頭を下げて急いで帰る。

「ご苦労」

疑問の残る指示通りにオレンジジュースを買って帰る。
「どうですか？」
さっきの男。依頼が依頼だけに疑心暗鬼になってるのか？
「うん？　ちゃんとホワイトパンツ洗ってた」
聞かなきゃ良かった。と思った。
チラッと後藤依頼人を見ると、顔が真っ赤だった。
何ともいたたまれない空気の部屋から逃げ出そうと何気なくベランダに出る。
そこには何故か男が一人。
その顔はさっきすれ違った顔だった。
間違いなく下着ドロ。それは間違いない。手には下着。これ以上無い証拠。
どんな言い訳をしようと言い逃れなど出来ない確固たる証拠。
それなのに目を見たまま動けなかった。
「捕まえろ！！　千歳！！」
ベランダで固まる俺に事態を察した店長の声に我に返る。
「ま」
捕まえようとするが、ベランダから飛び降りる男。
「追え！！」
室内からの声に俺も飛び降りた。

衝撃に痺れる足。それが体に伝わる。
「痛っ～～」
転がって和らげようとするがそう簡単には抜けてくれない。
見ればドロも同じだった。

痛みと痺れでまともに動かない足を引きずりながら、ドロを追いかける。
「待……て」
少し動く度につんのめる。

「が、頑張って！！」
こ、この声は……後藤依頼人か……？
倒れたままベランダを見る。
俺を見て、顔を赤らめながら声援を送ってくいる後藤依頼人。
店長は見えない。おそらく座って笑っているのだろう。
「よしっ」
まだ痺れているが……期待している視線に答えたい気持ちが俺を突き動かす。

アパートの前からヨロヨロと歩き出し、いくつかの角を曲がる頃には痺れも取れていた。
「くそ……意外に」
速い。結構走ってるけど速度が落ちない。
元ランナーか？　現役？
「……どっちでもええわ」
……『こっち』に来てから使わなかった故郷の言葉で意識を現実に戻す。

「いつまで……続く……このマラソン」
すっかり日も昇り、それなりに日差しもある中……俺はひたすら走っていた。
乱れないドロのペース。
俺は後藤依頼人の声援と捕まえた時の感謝される顔を想像してエネルギーにしている。

「ハイツール通り……？」
昼間でもそれなりに人通りがあるハイツール通り。
かなりの時間走っている筈だ。
ハイツール通りまで直線で五分位だった。
どれだけあの区域を走り回っていたのか……

何か腹立って来た！

ハイツール通りを真っ直ぐに走る。
すれ違う人が皆振り返る。
何でペースが落ちないんだ？
その事が非常に気になる。
もしかして、ホントにランナー？
え？　でも、ランナーが捕まえる側だってニュースとかで知ってるけど追いかけられる側ってのは初めてかも？
だとしたら俺が初めて……
妄想が止まらない。その内に俺は妄想の中で英雄になっているだろう。
……アカン……だんだん自分でも止められなくなってきた……

その時は突然訪れた。
曲がった先はレンタルビデオ店の駐車場。
出てきた自転車を避けようとして、ドロがコケた。
「ハァ……ハァ。まったく」
起き上がろうとするドロの上に座りこむ。
「手間……掛けさせるな」
喉が痛い。肺に酸素が入る度に意識が遠くなる。呼吸がツライ。
ケータイを取り出す事がこんなにツライのか……
もう少し、回復してから……店長に連絡を取ろう。
俺がこうして上に座っている以上ドロも何も出来ないし、俺以上に苦しいだろう。
チョンチョン、と足を叩いてくるドロ。
喋るのもツライので視線だけ向ける。
ぎこちなく動かすその手でポケットを探り、取り出したのは、
一枚の下着。
普段なら顔が赤くなると思うが、そんな余裕も無い。

「……」
口元を弛めるドロ。
どうやら、これで逃がしてくれ、と交渉している様だ。
「は……」
体力の限界で精一杯笑う。
ゴン！
ドロの後頭部に一撃。
これが俺の返事。

駐車場の入り口付近で倒れた男の上に座りこむ俺。
この状況に疑問を持たない人はどれ程いるのだろうか？
俺の目の前でケータイでどこかに連絡する人が多数いた。
それは当然警察で到着した警官に事情を話していると、
「よ」
アイスを持った店長と後藤依頼人が到着。
「捕まえた？」
指差した先にはパトカーの中にいるドロの姿が。
「あ……ありがとうございます！」
ほぼ直角に下げる後藤依頼人の姿で野次馬から拍手が起こった。
「あ……ども」
何か非常に恥ずかしくなってきた。

翌日、筋肉痛の痛みに耐えて出勤。
大量の漫画に囲まれた店長が
「ま、今回はお疲れ」
気だるそうに労ってくれた。

山頂の華

「新聞に載ったね～」
レストに来たら、開口一番。衣里が笑っていた。
「……案内しろよ」
「テレるな。眼鏡」
何がそんなに嬉しいのか。
ニヤついている衣里の笑顔に裏があると思うのは何故だろう？
「ま、空いてるから適当に座んなよ」
そう言ってカウンターに戻って行く衣里。
……何て適当な扱いなんだ。一応客だぞ？　俺は！
「あ。どうも」
窓際に座りコーヒーを注文した後に、喫茶店の店長『新沢佼成』さん。じきじきに持ってきてくれた。
「よ。今、暇か？」
「暇と言えば暇ですけど」
目の前に座る。
「ちょっと頼みたい事があるんだが」
「はぁ」
啜りながら聞いている。
「『龍頭山』知ってるだろ？」
「ここから見えますよね」
ビルの谷間からうっすらと見える山が龍頭山。
「登った事あるか？」
「無いですね」
「で、頼みたい事なんだが」
「はあ」
「ウチの娘があの山に登りたいと言ってるんだ」
「む、娘？」

「そう。中学生」
「いたんですか？　娘さん。中学生ですか？　……と言うか結婚してたんですか？」
「あれ？　言ってなかったか？」
「初耳ですよ」
「ま、それはいいんだが。ウチの娘が登りたいと言ってるんで付き合ってくれないか」
「登山……ですか」
「交通費と手数料は払うから。行ってくれないか」
「や。そんないいですよ。暇だし」
「ま、とりあえず夏子にも言っといてくれ」
夏子とは店長の下の名前。
「はい。分かりました」

「登山か～」
レストでの話を店長にする。
ソファに寝転がりながらアニメを見ていた店長。
目の前のテーブルにはスナック菓子とジュースが置かれていた。
「しかし娘さんがいたのか～」
「店長は会った事ありますか？」
「う～ん。多分無いと思う。って言うか顔知らないし、もしかしたら店ですれ違う程度の事はあったかも」
その可能性はあるな。
「あ。それと交通費と手数料は払うって言ってました」
「あはは。そんなのいいのに」
「行きます？」
「ま、いつも世話になってるし」
「じゃ、行くって言っときます」
「よろしく～」

「よ」
「こんにちわ～」
夕方、レスト店長がウチに来た。その後には女の子が一人。
「こっちこっち」
テレビを消して二人を呼ぶ。
「ウチの娘『由宇』」
「ご挨拶するのは初めてですね。始めまして『新沢由宇』と言います。ウチのお店では何度かすれ違ってますけど」
ペコリ、とお辞儀する姿が可愛い。
開口一番。ウチの店長が、
「うわ～。礼儀正し～。ホントに娘？」
レストの店長と娘さんを見比べる。
少しは見習ってくださいよ。店長。
挨拶しない店長に代わり、俺が挨拶。
「いつ行く？　今からでも」
「店長。今から行ったら夜中ですよ」
「あ。そうか」
この人テンション上がってないか？
「こっちとしては夜の方が都合良いんだ。な」
「……何で？」
きょとん。とした店長の顔を初めて見た様な気がする。
「『月に歌う花』って知ってます？」
娘さんの遠慮がちな声。
「月に歌う花……？」
……聞いた事あるような。
「あ～。今の時期咲いてるよね」
「そうです」
「知ってるんですか？　店長」
「知ってるよ。地元の観光スポットじゃない」
「そうなんですか？」

「お前……もうちょっと地元の事に興味持てよ」
「店長に言われたくないですね」
「で、いつ位がいい？　都合はそっちに合わせるから」
「うーん、平日はガッコがあるから……」
ガッコ？　あぁ、学校の事。何で『う』を省くかな。
天井を見上げるウチの店長。
「じゃ、今度の日曜。十二時にここでＯＫ？」
「あ、はい。私はそれで」
「じゃ、よろしく頼むよ」

「こんにちわー」
「こんにちわー」
開くドアと元気良く聞こえた二つの声。
「こんにちわ」
ん？　声が二つ？
「友達に話したら見たいって言うから……ダメでしたか？」
「いいよ～」
「由宇の友達の『福井梓』です。今日はよろしくお願いします」
「お。よろしく。じゃ、行こうか」
店長が見ていたテレビを消し、くるくると車のキーを弄びながら颯爽と歩いて行く。

「代理屋って儲かるんですか？」
「んっふっふっふ」
女子中学生の素朴な質問？　に不気味な笑いで答える店長。
「儲かってないとこんないい車に乗れないでしょ」
「んっふっふっふ」
車が自慢の店長が嬉しそうに不気味に笑う。
「でも、カッコイイですよね。代理屋って」
とは、レスト店長の娘。

「私もなりたい。どうやったらなれるんですか？」
答える気の無い店長に見切りをつけたのか。俺に聞いてくる。
「千歳さんはどうして代理屋になったんですか？」
「どうって。俺はここで働いてるから」
「え？　それだけ？」
「だと思うよ。ライセンスとかもいらないし」
「じゃ、私も代理屋で働いたら代理屋って事？」
「そうなるね」
「いるとすれば、武器携帯かな」
「あ～。何となくバイオレンスの香が漂ってきましたね～」
「お二人は武器とか持ってるんですか？」
「んっふっふっふっふ」
「何なんですか？　その笑いは？」
遂にツッコんでしまった。
「どうなんですか？」
答える気が無い店長に変わって俺に聞いてくる。
「俺は……短槍二振り」
「？」
きょとん。とする二人。
「マニアックでしょ？」
前を見つめたまま笑う店長。
「何ですか？　その短槍二振りって」
「簡単に言うと短めの槍二本」
「剣の二刀流と同じですか？」
「ま、そうかな」
「でも、コイツの刃のトコはレーザーが起動しないからただの棒だよ。簡単に言うと鉄パイプ」
「違いますよ。柄でレーザー中和出来ますよ」
「あ、槍ってそうなんですか？」
「刃の部分だけで受けるのは不可能に近いから」

「コイツのは違法改造」
「犯罪じゃ……」
「違いますよ！　違うからね？　店長！　本気にするじゃないですか！！」
「あっはっはっはっは」
「笑ってる場合じゃないですよ！」
途中、休憩を挟んでからもこんな会話が車内で続いていた。

「到着～」
午後二時。龍頭山の駐車場に到着。
「結構いますね」
「んっふっふっふ。観光名所だし」
「うわ～。何か……」
「早く行きましょうよ！」
テンションが上がってきた三人。

「やっっ……止めてよ」
「嫌ですよ。疲れるから」
中腹の休憩所で登山の定番行動取ろうとする店長を止める事はしなかった。
「何か腹立つ。千歳の癖に生意気な」
「……よく聞く台詞ですね」
「千歳のオゴリでジュースが飲みたい。買ってきて」
「嫌ですよ」
「可憐な少女、三人が喉渇いたって言ってるの」
「自販機そこですよ」
店長から二メートルほどの距離に並んでいる自販機達。
「カッテコイ」
「発音がおかしいですよ」
「あ。私行きます」

そうなったら俺の自尊心が動き出す。
「いや。娘さんが行く事無いですよ。俺が行くから」
「お前……娘さんって。ハハ、名前覚えてないの？」
「いや……名前で呼ぶのは。依頼人だし」
そこはちゃんとしないと。仕事だし。
「ま、こんな生真面目なヤツはほっといて」
何を飲もうか悩んでいる店長。

「おー！」
展望台に到着。
日も沈みかけ、赤く染まった展望台。
駐車場に止まっている車の台数を実感する程の人の数。
「うわ～。キレー」
「夕日に染まる街並み」
何を感じたのか真っ直ぐに街を見つめたままの店長。
「その赤い世界の中でクーイデンはレトヴェルに告白した」
「誰ですか？　クーイデンとレトヴェルって」
「知らないんですか？」
え？　有名な人？
考えても顔すら浮かんでこない。
「二人は知ってるの？」
「毎週読んでますよ」
「私も」
「……あぁ、漫画ですか」
「何？　その呆れた顔は？」
「千歳さん。漫画だからと言って馬鹿にしちゃ駄目ですよ」
「由宇ちゃん。とくと聞かせてやって」
夕日に染まる世界の中、俺は三人から懇々と『灼熱の皇子』と言う漫画について語られた。

「ん？　あそこにあるのは」
展望台からもう少し高い位置に見えた建物。
「あれは……『龍髭寺』ですかね」
確かそんな名前の寺があったような。
「行って見ましょうか？」
声色からそれは決定の様に聞こえた。
「夏子さん？」
「え？　何？」
見上げたまま固まっていた店長。
どうやら行きたくは無いようだ。
「そろそろ、時間的に厳しいから」
「あ、そうですか？」
確かに夕日に染まっていた世界も、暗くなり始めていた。
「雰囲気出てきたし、行こうか」
確かに展望台にいた人達も移動している。
「あ～。何か緊張して来た」
二人ではしゃいでいる由宇さんと梓さん。
「良かったね。あそこに登らなくて」
「それはお互い様ですね」
頷く店長。
俺も体力が無い訳じゃないが、必要以上に消耗はしたくない。
と言うのは言い訳だな。

ぼんやりとライトアップされた遊歩道をゆっくりと進む足並み。
「あ、見えた」
「え。どこどこ？」
俺の視界にチラッと入ってきた『月に歌う花』
由宇さんが背伸びして見ようとする。
「危ないですよ」
「うーん。……後ちょ……っとで」

「千歳。後どれ位？」
声が若干恐い店長。

近づくにつれ、この状況に魅入ってしまう。
暗くなった空にぼんやりと光る白い花。
風が通るたびに聞こえる儚く涼やかに聞こえる花の歌声。
歩いていると何かの物語の中に入り込んだ感覚になる。
幻想。
その言葉しか浮かばない。
言葉が無い。疲れも忘れてしまう。
雑踏も時間も関係ない。今、目に映る世界は白く淡く輝く花と音色だけ。

帰りの車内。
行きとは違い誰も喋らない。
ハンドルを握る俺の横で前を見つめる店長。
「千歳〜。腹減った、どっか寄って行こう」
「何処行きます？」
「この気分を台無しにしないような所」
「曖昧すぎますよ」
「この条件に合う所をチョイス」
「じゃ、俺が決めますよ」
隣を見たら、不意に目が合い、
「期待してる」
……妙にドキドキしてしまった。
う〜む。あの状況の後だからか……？

「ふぅ……」
やっと着いた……
私の宝と邪魔やけど無いと困るモノ物が入った重たいボストンバッグをドサッと置く。
う～ん、と体を伸ばすとポキポキと骨が鳴る。
「さて……」
……アイツは何処に
ケータイを取り出し、重大な事に気付いた。
「あ！　メモリ一つ！？　ウソ！？　マジで！？」
とりあえず伝えたい事をまとめる。
「……よし」
まとまった言葉を胸に電話を掛ける。

「よ。眼鏡。暇潰し？」
「うるさい。眼鏡って言うな」
レストに入ると、いつも通りの会話。
「空いてるトコに座ってて」
俺だけがこんな扱いなのか？　常連だからか？
……考えても分かるわけは無かった。
コーヒーを飲みながらぼんやりとしている。
「暇そうだね」
目の前に衣里が座っている。
「そうでも無いけど。何でコーヒーを持ってきた？」
「ん？　私の」
「仕事しろよ」
「今暇だし」
漫画を読み始める衣里。

チラッと店長を見るが同じ様に新聞を読んでいた。
いい感じに緊張感が抜けいてる良い店だ。
　漫画を読んでクスクス笑っている衣里。
新聞のクロスワードを真剣に考えているレストの店長。
ぼんやりと通りを眺めている俺。
「お」
「ケータイ切っとけよ」
　ジロッ睨む衣里。
「ケータイダメだったか？」
　睨まれて外に出る俺。
出る直前にもレスト店長にも睨まれていた。

　着信は……画面には懐かしい名前。
「珍し。……もしもし」
「あ、あんな今……」
　切れた……。
「何だったんだ？」
　こっちから掛けて見るが繋がらない。

　マジで限界やったんか……
どうしよ～？　ここまでの電車賃でもう金は無いぞ？
「うわ～どうしよ……」
　ぺたり、とバッグに座りこんで考える。
「お」
　目に見えたのはこの街の地図。
「あれで……」
　一縷の望みを地図に賭ける。
「誰から？」

店に戻り、衣里が漫画から目を放さずに聞いてくる。
「ん、姉ちゃん」
ガバッと顔を上げる衣里とレストの店長。
「マジで！？　お姉さんいたの？」
「ウソだとしたらしょーもないだろ」
「今何処にいるんだ？　迎えに行ったら？」
「行きたいんだけど。何処から掛けてきたのか……」
「駅じゃないのか？　こっちに来たからお前に掛けてきたんじゃないのか」
なるほど。
「こっちから掛けたら？」
「掛けたけど繋がらない」
「何で？」
「こっちが聞きたいよ」
ケータイの画面に映っている姉ちゃんの番号を見つめる。何してんだよ。まったく。

希望は脆くも崩れ去った。
書かれているのは観光名所だけ。
考えて見ればあたり前の事やんな。
「くそ～」
浅はかな自分が腹立たしい。
……待てよ。見間違いかもしれん。よし。とりあえず眼鏡を拭こ。
……待てよ。確か。
……何とか通りがどうとか言ってた様な。
えーっと……ノ……ノ……ノ。
頭の隅っこにある言葉に近い名前を探す。
「ここっ！！！」
ノーティス通り。
確かこんな名前だった筈。

ここから行くには……指で地図上を歩く。それを頭で覚える。
「……よし！」
何度も繰り返し完全に覚えた。
「行くか」
朝の駅前。両手に重いバッグを抱えて歩いて行く一人の少女。その胸には希望を抱えていた。
……小説ならこんな感じかな。
「……」
現実はニタニタと笑う私を避けていくサラリーマンの冷ややかな視線だった。

「へ～。アンタって『関西』出身だったの？」
「知らなかったな。言葉とかこっちの言葉だから」
「まぁ、特別言う事でも無いかなって」
「ね、ね」
衣里のキラキラした目。
この目は何かを企んでいる目だ。直感でそう感じた。
「ちゃうちゃうちゃうんちゃう？　って言って」
悪意が無いのがムカつく！
「じゃ、姉ちゃん迎えに行ってきます」
「あっ！　ちょっと！」
そんな衣里を無視してレストを出る。

またしても希望は脆くも崩れ去った。
「ここ……どこ？」
おかしいな。あんだけ確認したのに。
いつの間にかコンクリートジャングルに迷い込んでいた。
いや、地元にもコレ位のビルはある。恐がる事はない。
自分を奮い立たせる。
「よし」

何が「よし」なのか自分でも分からんが、グッと手を握る。
といあえず駅に来たがウチの姉ちゃんは……見当たらない。
「何処に行ったんだ」
少し駅周辺をうろついて見るがやっぱり見当たらない。

「あれ？」
着いた先は明らかに児童公園。
何処で間違えた？
道を聞こうにも誰も通らない。
そう考えてもう一つ気付いた。
「あいつの家……何処や？」
ノーティス通りは駅の観光案内に載るほどの大きな通り。
いくらなんでもそんなトコには住んで無いやろ～な～。
しかし、それは身内を過小評価しているとも考えられんか？
いやいや万が一と言う事もありえる。
それよりここは何処？
え？　私もしかして……嘘。そんな事無いやろ……え、でも。この状況は間違い無いような。
……迷子？

「何処に行ったんだ？」
駅前からノーティス通りを歩いて行く。
随分前にノーティス通りから路地に入った所にある代理屋で働いている事を話した事を思いだした。
無論『椎名代理店』の事だ。
「しかし……何処に行ったんだ」
姉ちゃんの行きそうな所に行ってみるか。

「おや？」

ここは何処？
「うーん。どうしよ」
誰かにケータイ借りるか？
でも、番号を思い出せなんしな～。
「充電器借りるにしても」
持ち歩いて無いやろな～。
「その前に」
人の通る場所に行かんとな～。

「姉ちゃんの好きそうな場所なのに」
いない。
俺はあまり来た事は無いがゲームショップに到着。
店内も探してみるがいなかった。
「……腹減ったな」
時間は十二時手前。
食い逃げとかは止めてくれよ。

「腹減った」
時間は、手でお腹を擦る。この感じは十二時……の筈。
しかし、手持ちが無い。
さっき見た児童公園よりはゆったりとした公園のベンチにて空腹を耐える私。
千歳！　私はここにいる！！
テレパシーを送ってみる。
届く事を神に祈る。

姉ちゃんを探して歩き続ける。
何処に行ったのか？　つーかケータイ使えないなら駅でじっとしてればいいのに。
向こう見ずな行動力は相変わらずだな。

しかし、一体何の用で来たんだ？
何か合ったのか？
……ここで考えても分かる訳無いよな。

残念ながらテレパシーが届かなかった様だ。
「どうしたものか」
ベンチに座り、次なるを手を考える。
時間は午後三時。
「あ～。腹減った」
思考回路の占有率はどうやって連絡を入れるかよりも、空腹を満たす事を優先していた。

「あれ、眼鏡？　お姉さんは」
「まだ見つかってない」
「……え？　あれから」
衣里が時計を見る。
午後四時。姉ちゃんからの電話が午前九時前。
「えっと……」
過ぎた時間を指折り数える衣里。
「七時間か。お金もそんなに持ってないんでしょ」
「連絡して来ないって事はそうかも」
空腹で倒れてたりしないだろうな。
「私も手伝おうか？」
「時間があるのなら頼む」
「夕飯オゴリで」
にこやかに微笑む衣里。
しかし、人手が欲しいのも事実。
「了解。それで頼む」
「じゃ、夏子さんも呼ぼう」
「え」

「え。じゃないでしょ。言ってないの？」
「言ってない。と言うか考えもしなかったし」
「ダメね～。あ。もしもし。今、千歳のお姉さんを探してるんですよ。……はい、千歳の。それで、連絡がつかなくって……はい、今探してるんですよ。……で、これから私も手伝う事に……そうなんですよ、頼りないですから。で、夏子さんも……そんな事言わないで下さいよ」
　漫画でも読んでいるのだろう。嫌がっている声が聞こえてきそうだ。
「見つかったら千歳が夕飯奢ってくれるって言うから。千歳」
「何？」
「夏子さんも手伝ってくれるって」
「頼むって言っといて」
「千歳がお願いしますって。……はい、はい。そう言っときます。じゃ、また後で」
　衣里がケータイを切ると、
「夏子さんが店に来いって」
「店？　どっち？」
　『椎名代理店』と『レスト』
店と言えばこの二つが候補になる。
この場合は代理店の方だろう。
「はい。それじゃ、後で」
　電話を切る衣里。
「しかし、あっさりと手伝ってくれた事に不安を感じるのは何でだ」
「あはは、お腹でも空いてたんじゃない」
「何にしても手伝ってくれるのならいいや」
　二人でノーティス通りを歩いて行く。

　代理店に着いた。中には、
「よ」

店長と、
「はは、何でここにいるの？」
ラーメンを食べながら振り返って俺を見ているその顔は、
「……千歳。久しぶり」
口に入っている麺を飲み込み、そう言ってまたラーメンを食べ始める。
「あ。千早が千歳の姉ちゃんなの？」
コクコクと頷きながらもラーメンを食っている。
「じゃ、これ」
手渡された伝票。
「よろしく」
「あ、私のは」
「じゃ、も一回出前を取るか」
店長が電話を掛けようとすると、
「あ、私チャーハンと野菜炒め」
「まだ食うのかよ」

「で、何しに来たの？」
「ん？」
満腹感に包まれて目を閉じ掛けている我が姉。
「おい。聞いてるか？」
「うん聞いてる。何しに来たかって？」
「そう」
頭を掻いて、
「ん～。私もこっちに住もうかなて」
「ふーん。そっちはいいの？」
「ちゃんと師匠達に言ってきた」
「部屋は決まったの？」
俺を指差している。
「俺の部屋？」

親指と人差し指でマルを作る。
「ま、いいけど」
「あれ？　師匠ってなんの？　親じゃないの？」
お茶を啜りながら『師匠』に引っかかった店長。
「言うてないの？」
「何、何？」
衣里も興味を持ってきた。
「言ってませんでしたか？　親死んだって」
……あれ？　出来るだけ明るく言ったつもりだったんだけど。
店長と衣里の動きが止まる。
「アホ。もうちょっと空気読め、なんで死んだやねん。いないって言うやろフツー」
意味的には変わらないだろ。どっちも。
「明るく言ったつもりだったんだけど」
俺達姉弟と店長達の間の温度差が違い過ぎる。
「まぁ……その」
店長が口ごもる。
「と、とりあえず今日は帰りますんで、また明日！」
姉ちゃんが満面の笑みで雰囲気を和らげようとする。が、
「……あぁ。明日」
不発に終わった。

「お前の所為やぞ！」
「俺の所為か！」
「他に誰がいる！　私が楽しく飯を食ってたのに！」
何でキレてんの？　迷子になってたくせに！
「ホンマに……お前は～」
訳分からんが、とりあえず、
「ゴメン」
「何でも謝ったら許されると思うなよ！」

「じゃあどうしたらいいんだよ！」
「自分で考えろ！」
うわ～。何言っても無駄だよ。
部屋に着くまで、懇々と『場の空気の読み方』を説明されたがよく分からなかった。

「意外に広いな～」
部屋に着いてから大家に連絡して姉が同居する事を連絡。
あっさりとＯＫしてくれた大家さんに感謝を伝えて、電話越しで姉を紹介した。
その後さっさと風呂に入る姉。
「は～。気持ち良かった～」
まったく……この姉は～。
「おい。手に持っているのは何だ」
「ん？　パジャマ」
「何で手に持っている？」
「風呂上りで暑いから」
「パジャマは着る物だと思うんだけど」
と言うより常識だ。
「喉渇いたな～」
「無視すんな」
「あっつ～」
「……」
嫁入り前なのに…姉の将来に一抹の不安を感じる。
「ん？　お前も飲むか？」
「……うん」
コップを二つ持ってくる。
二つのコップにお茶を注いで、当然の様に、
「あっ！」
テレビのチャンネルが変えられる。

「ちょ……ニュース見てたのに」
「明日の朝見ろ。もうちょっと詳しくやってるから」
「今……見たいんや！」
「お。関西弁に戻ったな～」
「……こっちじゃ珍しがられるから使わないんだ」
「故郷の誇りを忘れるな」
「そう思ってるのは姉ちゃんだけだろ。それに言葉一つで誇りも無いだろ」
「言葉を舐めんなよ？　意外に大事な事やぞ」
「意外って何だよ」
「それは……お前……」
コントローラーを握り考える姉ちゃん。
「お前がニュースを見てたのはあのアナウンサーが目的か？」
全く違う切り口から攻めてきた。
「か、関係ないやろ！！」
思いがけない攻撃に声が上ずった。
「何慌ててるのかな～。千歳君」
それを見逃さない姉ちゃん。
「べ、別に何も慌てて……」
「何て名前やったかな～。確か……『細見咲』やったか？」
一瞬で顔が熱くなるのが分かる。
「ふふーん。分かりやすいな～」
「何が？」
「べっつに～。早よ風呂行け」
この場に居てもからかわれるだけなので風呂場へと戦略的撤退。
くそ……何なんだ。この恥ずかしさは……。子供じゃあるまいし……
しかしこれで向こうにあらゆる事の主導権が行ってしまった様な気がする。
風呂から上がり、ゲームに夢中になっている姉ちゃんを他所にベッドに潜り込む。

「……」

妙な気恥ずかしさとゲーム音に抱かれて眠りに着く……

事が出来ずに朝になった……

店長と

今日一日の仕事が終わり、帰り道をブラブラと歩いている。
行き交う人波は忙しなく楽しげだ。
帰ってから姉ちゃんとのチャンネル争いにどうやって闘うかと考えていると、、
「助けて！」
と、前から一人の女性が走ってくる。
「え」
グッと俺の腕を掴んで回りこむ。
肩越しに女性を見ると、切羽詰った顔で、
「助けて！」
「え」
事態が飲み込めないでいると、
「何処に」
黒服を来た、『ソレっぽい』男達がやってくる。
「お願い」
声が震えている。
その内の一人が俺に気付く。
「あ、ちょ……」
「逃げよう！！」
女性が俺を引っ張って行く。
「え」
グイグイと引っ張られて走って行く。
「え？　何！？」
引っ張られて夜のノーティス通りを走っていく。
その後方に黒服を着た男達。

皆が俺達を見ている。
「しつこい」
振り返り追いかけて来る男達に一言。
そりゃ、何か用があるから追いかけて来る訳で、それ重要なほどしつこいだろう。
しかしいつまでも走り続ける事は出来ない。
女性も顔に汗が流れている。かなり疲れている。
通りに立ってある、レストランの『のぼり』を取り、向き直る。
「おい」
走ってくる男に、
「フッ！」
鳩尾に一突き。
倒れる男。
突き出した手を引き、回転。
後から着た男に横薙ぎ一閃。
ポキッと折れるのぼりを捨て、三人目は間合いを詰め、
ドン。
また鳩尾に肘打ち。
倒れる三人をそのままに、
「さぁ」
女性の手を取って夜の街を駆けて行く。

「ここまで来れば」
ノーティス通りを走り続け、市民公園まで辿り着いた。
「疲れたー」
女性がベンチに座り足を伸ばす。
「ホントに……」
月明かりの中ベンチに座る俺達。
「で、何？」
向き直って問いただす。

正面から見ると、くっきりとした目鼻立ちの美人。顔が赤くなる。
「何って…何が？」
この場合、一つしか無いと思うのだが。
「あの男達」
「……」
沈黙。
そして、泣きそう。
「あ、えっと。その……」
どうしたらいい？どうしたら……？えっと……。
何も思いつかない！
「……」
目から液体が流れる女性。
！！！！
……落ち着け！落ち着けよ！この場合は……えっと……その……
パニックになった俺を見て、
「……」
口元だけ笑っている。
「……はは」
つられて笑う。泣かれるよりいい。
「あの…友達呼んでも……」
「あ、はい。どうぞ……」
渡りに船ってこういう時に使うのか……。

それで来た友達は、
「イリタマ～」
駆けよる女性。
「大丈夫？　ハクサイ？」
……イリタマ？　ハクサイ？
公園のライトで見えた顔は、
「何でアンタがいるの？」

……衣里だった。
「それは俺が聞きたい」
「何でアンタがいるのを私が説明できるのよ」
もっともな論理だ。後から来た衣里が説明できたら全てはコイツが仕組んだ事だって事だな。
「あれ？　知り合い？」
と、俺と衣里を交互に見る女性。
「バイト先が一緒」
「あ。そうなんだ。偶然って凄いね」
「で、何でコイツと一緒にいるの？」
「助けてもらった」
「誰に？」
指差す先にいるのは俺。
「誰に追われてたの？」
声に緊張が走る。
それは俺も聞きたい。あんな人目のつく所で誘拐する位だからそれなりに危険な香りがする。
「私のボディガード」
……？
「……え」
「『イリタマ』と遊ぼうと思って家出たら追いかけてきて」
「イリタマ？」
おそらくニックネームの様なものだと思う。
「アンタね。ちゃんと言ってから来なさいよ」
「言うより先に体が動いてさ」
テヘヘ。と頭を掻く。
「あの……イリタマ……って？」
指差す先にいるのは衣里。
「……イリタマ？」
「そ」

「……」
よく分からん。
「えっと」
地面に衣里と書いて、
「『いり』って読めるでしょ」
「まぁ……」
俺も最初、ネームプレートを見た時そう呼んだし。
「で、『いり』と言えば『いりたまご』略してイリタマ」
「……はぁ」
衣里を見る。
「何？　文句あるの」
「いや……別に」
本人がそれでいいなら。
「で、こっちが『ハクサイ』」
指差す先にはにっこり微笑む女性。
「……はぁ」
そっちで通じる略称で紹介されても、俺は名前を知らないから。
「あ」
「何？」
「まだ、名前言って無かった。『白石　春菜』と言います」
地面に名前を書いてハクサイの理由が分かった。
そして俺の名前を言った瞬間に言われる言葉も。
「小林千歳です」
「小林千歳か～」
「『アメ』は無しね」
機先を制する衣里。
「……分かってるよ～」
一瞬、間が開く。それから上を見上げて考える。
「コバッチは何か習ってたの？」
……コバッチ……コバッチかぁ……。

まぁ、アメよりはマシ……か？
「何？　どうしたの」
「え。だってウチのボディガードを一瞬でノシちゃったから。何処の流派？」
「星詠槍術二段です」
「マジで？」
「え、知ってるの？イリタマ」
俺は言った覚えはない。
「え、知らない」
「じゃ、何で驚いたんだ？　お前は」
「驚いたのは二段の方。段位まで取ってたとは」
「じゃ、当然、持ってますよね。槍」
「まぁ……一応」
「何処の？」
「……何処のって？」
「え。メーカー」
「……何の？」
「槍の」
「確か……リ・エイトだけど…」
「うわ～」
首を振り残念がる白石さん。
「……えっと……あの」
「有り得ない、有り得ない……」
呪文の様に呟く彼女には俺の声は届いていない。
事情を知っていそうなもう一人に説明を求める。
「ハクサイは白石の社長令嬢なの」
「……？　何？」
令嬢……って言ったのか？
「『白石光学研究所』の令嬢がハクサイなの」
「……マジで？」

「マジ」
頷く衣里。
「あの？」
「そう。あの」
白石光学研究所。と言えば武器開発の大手メーカー。
シェアでは『リ・エイト』に後一歩の所まで来てるとか、新聞に書いてあった。
「ま、今日は送ってくよ」
意外な繋がりに驚く俺を無視して、彼女を立たせる。
「え～。せっかく逃げてきたのに」
いつの間にか呪文を唱え終えていた白石さん。
「バカ。アンタのボディガードがのされちゃったんだから。面倒な事にある前にアンタからちゃんと説明しなさいよ」
「む～」
「唸ってないで。ほら」
「……しょうがないか。じゃ、コバッチまた明日」
ひらひらと手を振って公園を出て行く。
俺も手を振り返す。

目の前には沢山の槍が載っているパンフが並んでいる。
「……聞いてます？」
「あ、はい」
テーブルに並べられたパンフ。槍以外のパンフもある。
「コバッチは限定とか興味がありますか？」
「そんなには……」
「ま、ついでなんで説明すると……」
違うパンフを取り出し、説明が始まる。
俺の意見は無視らしい。
「従来の製品より装飾にこだわりつつも武器としての強度と扱いやすさを追求したのがこのシリーズなんですよ」

「……はぁ」
おかしいな。限定には拘らないと言ったと思うんだけど。
「で、これなんかどうですか」
指差したのは『ＳＰＥＡＲ＝２００７翔嵐モデル』
「これのゴールドモデルが人気なんですよ」
値段は、
「十五万……」
「ハハハ。高」
隣でミックスジュースを啜っているウチの店長。
パラパラとパンフを見ている。
その目に買うという気がまったく無い様に見えた。
が、目の前の白石さんは、
「店長さんはチャクラムでしたよね」
ストローをくわえながら頷く。
「これなんかどうですか？　値段もお手頃ですよ」
「お、お手頃か……？」
俺も見るが……高すぎる。
声で勧めても駄目と判断。
この判断の早さは凄い。
「じゃ、こっちはどうですか？　今年の新型の特徴として従来の製品より軽量化にしつつもエネルギー効率を高めてるから稼働時間が五分から十分伸びてるんですよ」
「へぇ」
思わず嬉しそうな声を出してしまった店長。
目の前にいる営業はそれを聞き逃さなかった。
ここぞとばかりに攻めてくる。
のらりくらいと誤魔化しているが、向こうの方が勢いがある。
「じゃ、ちょっと行きましょうか？」
「え。何処に」
「本社のテストルームに」

「何で？」
「実際に手に持って見ないと分からない事もあるじゃないですか？」
「まぁ、そりゃあ」
「だから、来てもらって手に取って貰ってそれで判断してもらうのが一番良いんですよ」

断る間も無く連れてこられた『白石光学研究所』
「どうするよ？」
「どうするって」
聞こえない様に店長と話す。
「こちらへどうぞー」
嬉しそうな白石さんの声に白石本社のゲートをくぐっていく。

「えっと、ここからが新型ですね」
ガラスケースに入った製品を三人で見る。
「ショートスピアは形にそれほど種類は無いな」
俺から見ればまったく違う槍なのだが店長から見れば、同じに見える様だ。
「細かい所での装飾とかビーム稼働時間、出力。刃の大きさと形状に個性が現れますね」
「ショートスピアはここですね」
「千歳は二刀流だから二振りいるんだろ」
「二振りですか？　同じ物で揃えますか？　それとも違う物にしますか？」
「俺はどっちでも」

「結構形状に種類があるんですね」
今度はチャクラムを見る。
丸いのから三日月が交差したような形。様々な形状と色が揃っている。

「流石だ～。これ程揃っているのは初めて見た」
嬉しそうに眺めている。
「店長さんはどちらのメーカーのチャクラムを使っているんですか？」
「私？　私は『ラクロアイ』一筋」
「ラクロアイ……ですか」
俺は知らないメーカーだ。
「確かにチャクラムでは悔しいですが、ラクロアイに一歩遅れをとってますね」
白石さんは本気で悔しそうだ。
「でしょ？」
店長は嬉しそうだ。
「しかし、ウチの新作ではラクロアイにもひけは取らないと思ってます」
声に自信が満ちている。
「あ……そう」
反対にたじろぐ店長。
「これはどうですか？　ビームの出力五十％で稼働時間は七分というチャクラムでは優等生な商品です」
「七分！」
「そんなに長いんですか？　七分は」
「見て分かるだろ。選ぶ基準としては飛行距離か稼働時間で選ぶんだよ」
「そうですね、スタイルで大きく変わりますよね」
「でも、チャクラムって投擲でしょ？」
「そう考えてるとお前は私には勝てんぞ」
横目で俺を見て、ニヤッと笑う。
「え？　チャクラムの闘い方って他にあります？」
「ある程度の体術が出来れば接近戦が出来る」
「じゃ、模擬戦やって見ますか？」

ハッとして白石さんを見る。
「じゃ、ちょっと用意してきますんで舞ってて下さい」
「あっ、ちょ」
聞こえていた筈だが走っていく白石さん。
「しまった」
「どうします？」
「……逃げても意味無いだろうな」
「そうですね。衣里に直接連絡が行くと思いますから」
「はぁ～。しょうがないか。お前が騎士相手に互角だって言うなら暇潰しになるか」
手を組んで上に伸ばして体を解している店長。
妙にやる気になって無いか？
「千歳。私に勝ったらボーナスでどう？」
その言葉に俺も本気になる。
「いいんですか？」
「いいよ」
「俺が負けたら」
「店の掃除と私の車のワックスがけと私の部屋の掃除」
「マジですか？」
首を縦にを振る店長。
中々の重労働だが、ボーナスと比較すると……
考えるまでの無い。
「分かりました。それでお願いします」
「よし」
店長がグーを握る。それを上から軽く叩く。
「忘れるなよ？」
「店長の方こそ」
そう言えば店長が武器持ってるの見るのは初めての様な。
白石さんに連れられてトレーニングルームに到着。

ストレッチも終わり、手渡された武器の感触を確かめている。
「用意はいいか？」
「はい」
構える。
借りた槍は、若干長さが違うショートスピア。
およそ、俺の歩幅で五歩離れた所にいる店長は両手にチャクラムを構えている。
チャクラムは投擲武器。
勝機を見出すには間合いを詰めないと。
「では僭越ながら私が審判を努めさせていただきます。……始め」
白石さんの合図で始まる模擬戦。

「遅い」
「え」
一瞬で間合いを詰められた。
速い。右手の攻撃を避けるが、左手で追い詰めてくる。
左右からの連続攻撃。何とか対応出来るが……
攻勢に出ないと、このままじゃジリ貧になる。
店長のパンチを弾いて、突き出す。
後に仰け反ったまま、足を振り上げられる。
顎先を掠める。
……あ、危な～。
一回転して着地、更に後に飛んで間合いを取って構える店長。
今度はこっちから行ってやる。
「フッ」
踏み込んで右突きは左に、左薙ぎ払いはしゃがんで避けられた。
しゃがんだまま後に一歩下がり、下から手を突き上げてくる。
右足を機転に回って避ける。その勢いを使ってカウンター。
金属音が響く。
俺の右手で店長の左手を、左手で右手を止める。

接触点をずらし、踏み込んでくる。
っっ……さっきより少し速い様な気がする。
何とか、ギリギリで避け続ける。
空を切る音を聞くというより、体で感じる。
このままじゃ……追い詰められる。
店長の呼吸を読む。
……吸って、吐いた。ここで。
突き出す。
カウンター気味に出したが、俺と同じ様に回転した勢いで裏拳。
その間に間合いを取る。
「ふぅ」
どう攻める？
距離を開けて店長を見る。
くるくるとチャクラムを回している。
タイミングを計っているのか、余裕なのか。
表情からは読み取れない。
……仕掛けてみるか。
腰を落として、真っ直ぐに店長に向う。
右手のチャクラムが指から離れる。
軌道を判断し、ギリギリで左に避ける。
店長まで、後三歩。
一歩、二歩踏み込んで行く。
右手を突き出し、そのまま右に払う。
これで左手のチャクラムを封じた。
素手で受ける事は無い。
これで……俺の勝ち。
店長は俺に一歩踏み込んでくる。
しゃがんで回り左手を外される。
空を切り裂きチャクラムが戻ってくる。
「え」

右手から右手に？　広いとはいえ室内で一体どんな回転掛ければ……？
軌道に着いて考えてる場合じゃない。店長の動きに対応しないと、
「ふっ」
考えていた時間の分だけ遅れた。
チャクラムを右手に握り、首筋に当てられる。
「私の勝ち」

汗びっしょりで嬉しそうに笑う店長。
「はは」
笑うしかない。
「ふ～。汗掻いた。白石さん、タオルある？」
壁際に体育座りをしている白石さんに声を掛ける。
「……白石さん？」
声を掛けても反応が無い。
「おーい」
目の前で手を振って、
「あ、あ！　はい、何でしょうか！」
「うわっ！」
突然の大声に耳を塞ぐ店長。
「あ、すいません！　……何でしたっけ？」
「汗掻いたんでタオルありますか？」
「あ、はい！　すぐに用意します！」
バタバタと出て行く白石さん。
「ははは。流石衣里の友達だ～」
何が流石なのかは分からないが何となく言いたい事は分かる。
武器に関しては丁重にお断りした。

意外な依頼人

「おはようございます」
「おはよ～」
当然の様について来た姉ちゃん。
「おはよ。じゃ、早速」
テレビのチャンネルがビデオに変わる。
「今日は何にしようかな？」
最近はゲームの勝者が昼飯を決める事になっていた。
「あ、千歳。何時にしようか？」
「何時って……あぁ」
思いだした。白石本社で模擬戦やった時の事。
「何？　千歳何かした？」
「私に模擬戦で負けたから私の車のワックスがけと私の部屋と店の掃除」
「あっはっはっは！　千歳、姉ちゃんがカタキを取ってやる」
二人がコントローラーを握り締める。
画面には『ＦＥＡＲＬＥＳＳ　ＦＩＧＨＴＥＲ』
始まった瞬間、忙しなく動く指がコントローラーをカチャカチャと叩いている。

「くそ～。姉弟で負けた。すまん、千歳」
深々と頭を下げる姉ちゃん。
外に出ると朝なのに太陽が元気良く俺を照らす。
空を睨みつけるが何も変わらない。
いや、微妙に暑くなったか？
「は～」
体中の酸素を吐き出しそうなほどのため息。
「くそ～。ボーナスに反応しなきゃ……こんな事には」

今更言っても後の祭り。
今ほどこの言葉が合う状況も無いだろうな。
続いて部屋と店の掃除が終わり、時間は昼前。
「いや。そんなに悔しがらなくても」
ここまで頭を下げるとは……本気で悔しいらしい。
「『ルジェート』のヒレカツサンドと『イリル』のプリンとレストのコーヒー。千歳買って来い」
「まだ、早いですよ」
「じゃ、時間になったら一番で行って来い」
確か……頭の中で地図を広げる。
「……三角形じゃないですか。しかも全部離れてるし」
「うるさい。これは決定事項なんだ」
どうやら本気で行かなきゃいけない様だ。
「すまん！　千歳！」
「ま、行けと言うなら行きますけど」
ごねても意味がない事は俺がよく分かっている。
「千歳」
頭を下げていた姉ちゃんが、顔を上げて、
「私も同じ物を」
満面の笑みだった。

「ありがとーございましたー」
微妙に疲れを見せているルジェートの店員の声。
ま、一気にこれだけの数を売ればそうなるよな。
俺の後にも長蛇の列。
羨ましい様な、そうでも無い様な。俺の心も微妙に感じているこの忙しさ。

「いらっしゃ……」
馴染みの店、レストに到着。

いつもの様にいつもの店員と出会う。
「……とりあえず、ウチの店長は？」
「まだ来て無いけど……見て気付かない？」
「何？　……あっ！」
眼鏡が無い！
「ど、どうした？　お、落とした？」
「おい。漫才じゃないんだから」
「じ、じゃ」
他の理由は……
「ぬ、盗まれた？」
「おい。眼鏡を盗む泥棒がいるか？」
「じ、じゃ」
他にどんな理由が……
「おい、アホ。そんなに真剣に考えるな。コンタクトを知らないのか？」
「コ、コンタクト？」
えっと……
「おい。ホントにアホだったのか？　コ、ン、タ、ク、ト、レ、ン、ズ」
一文字ずつ区切って言われて理解した。
「か、変えたの」
「そ。どう？」
ニコッと笑う衣里。
「どうって何が？」
「え。だから似合うかって事」
「え。コンタクト見えないし」
マジマジと衣里の目を見るが……よく分からない。
「……！　近づくな！　気持ち悪い！」
「き、気持ち悪いって何や！」
「突然顔を近づけるから」

「お前が似合うかって聞いたから見ただけやろーがっ！」
店の入り口で始まった口論。
「おい。下らない事でケンカするな」
レストの店長がカウンターから止めに入る。
その声で他のお客が笑っている事に気付いた。
「お前の所為で恥掻いた」
衣里に足を踏まれた。
お、俺の所為か……？
「あの。邪魔なんだけど」
「あ、すいません」
入ってきたのはタイミング良くウチの店長と姉ちゃん。
「さて、食うか。コーヒー三つ」
さっさといつもの席に着く店長達。
「お前等、他所の店のモノを食うのか？」
カウンターから睨まれるが、
「ま、たまには」
気にしない二人。
……流石と言うべきなのか。

「ん？」
入ってきた一人の客。
きょろきょろと誰かを探している様な素振り。
その仕草が妙に目に付いた。
……あれ？　確か。
「や、久しぶり」
俺と目が合った。その顔は間違いなく『あの時の女』
迷わずにこっちに来る。
「ここ、いい？」
「あ、どうぞ」
姉ちゃんが漫画を読みながら答える。

「久しぶり」
……何の用だ？
「そんなに警戒しなくてもいいよ」
クスクスと笑う女。
「千歳。何か喋ったらどうや？　姉ちゃんの事は気にせんでええよ」
おい。勝手に喋るな。
「千歳って言うんだ。私は『叶しのぶ』よろしく」
笑顔に騙されそうになるが……この女は危険なんだ。と自分に言い聞かせる。
「な、何の用があって」
「お。いつかの暗殺者か」
漫画を取りに行っていた店長が帰ってきた。
妙に嬉しそうな声なのは何故？
「暗殺者？」
ガバッと顔を上げる姉ちゃん。
「うわ～。初めて見た～」
羨望の眼差しってこれか？　と思うほどの眼差し。
「貴女は？」
「私は千歳の雇い主」
「私は姉」
二人が名乗る。
「じゃ、椎名夏子さん？」
「そうだけど？」
「ふーん」
マジマジと店長を見る。
「……何？」
頭の先から爪先まで何度も往復する視線にちょっと引き気味。
「ま、いいか。ちょっと頼みたい事があるんだけど」
「で、何で私まで」

店長の車の後部座席でレストから持ってきた漫画を読み続ける姉ちゃん。
「ちゃんとお金払うから」
ハンドルを握りる店長。
「部屋にいてもゲームしかしてないじゃないか」
朝、俺が仕事に行ってから帰ってきた時まで同じ場所でずっとロープレのレベル上げをやっていた姉ちゃん。
「うるさい。私なりにちゃんとする事はあるんやぞ」
女からの依頼を報酬に釣られて引き受けた店長。
依頼内容は『ショリス＝ディリストラム暗殺阻止』
「騎士団の人ですよね？　護衛ならついてるんじゃないですか？」
「それでどうにもならないから言ってきたんじゃない？」
「それ以前にアノ子。暗殺者やろ？　言うてきた目的は何？」
「さぁ。そればっかりは何とも言えないな～」
「それと、相手の事」
「相手？」
「暗殺を止めるって事は相手は当然暗殺者でしょ？」
ま、そうなるな。
「何で情報流したのかな？」
「うーん……商売敵？」
前を見つめているのに見えてくる風景はあの夜。
助けてもらってから闘った事。
迷いの無い視線。躊躇わない切っ先。
冷たいコンクリートの中で輝いていた彼女の姿。
「ま、何にしても」
グン、と加速する。それで意識が現実に戻った。
「終わって見れば分かるよ」
景色が後に流れていく。
目的地まで後……一時間。
徐々に心拍数が上がっていく。

深く、静かに息を吐く。
ハンドルを握る店長は鼻歌を歌い、姉ちゃんは漫画を読んでニヤついている。
緊張しているのは俺だけ……？

「さて、どうやって近づく？」
ディリストラム氏が滞在している『ヴァンラル＝シティ』に到着。着いたはいいが作戦を何も考えていなかったので、ファミレスで会議。
「うーん。下手にうろうろしてると職質されるしな～」
「そうなると、面倒ですね」
「武器を持ってるし、その目的を聞かれても答えようが無いし、答えても信じてくれないからなー」
「で、どうする？　直前に割って入る？」
「それが一番良いかも」
「でも、それだと相手の行動を完全に読まないとダメですよね」
「うー」
ブクブクとジュースを泡立てる行儀が悪い店長。
「視察で来てるからある程度の行動は読めるから、後は場所か」
店長に行儀について話している間に考えている姉ちゃん。
「場所を選ぶには自分の武器に左右されるから」
トントン、とテーブルを叩いて、
「千歳、あの子に連絡取れ」
「え。何の為に」
「情報が欲しい。どんな武器を使う相手なのかが知りたい」
何時になく真剣な姉ちゃん。
「え。あ、はい」
勢いに押されて教えて貰ったケータイ番号に掛けてみる。
「あ、もしもし。叶さんですか。えっと」
横にいる姉ちゃんにケータイを奪い取られる。

「貸せ。あのちょっと聞きたいんやけど」
俺達の周りにお客はいないが、内容が内容だけにもう少し声を抑えて欲しい。

車の中での会議の続き。違うのは内容がヤバすぎる事だ。
「何か分かったの？」
「大体は。はっきりした事はこれから確認する」
「どうやって？」
「向こうも詳しい事は分かってないみたいやから。より確実に行う為には後はこっちが調べんと」
「分かってる事って何？」
「動いている暗殺者は二人。今日からディリストラム氏が帰国するまでの間に事が起こる」
「それだけ？」
頷く姉ちゃん。
「二対三？　数ならこっちが上か」
「アホ。実戦経験は向こうやし、殺す事に対して躊躇わないのも向こうやろ。有利なんが一人ではハンデにもならんぞ」
「相手の武器は？」
「ライフルと剣らしいって」
「らしい……ですか？」
「二人なのは間違いなくて、ライフルは確実でもう一人は多分剣やろうって言うてた」
「どこかの組織に入ってるの？」
「それは教えてくれんかった。つーか聞いても分からんし」
「ライフルは狙撃だからある程度は地の利が必要だし、外れたら剣が出て来るか」
「私はその逆だと思う」
後に座っている姉ちゃんがシートをトントン叩いている。
「逆？」

「うん。剣で行ってから狙撃やと思う」
「それだと警戒さるだろ」
暗殺なら一度で決めた方がやりやすいと思う。
「確実に決めるなら一度目のチャンスで決めるんじゃない？」
「最初に接近するのは多分おとり。それで決まればそれでよし。決められなかった時にライフルが決めるっていうやり方やと思う」
「その心は？」
緊張感が足りない店長。
「あの子がライフルの方は知ってるみたいやったから」
あの子とは今回の依頼人の叶さん。
「狙撃の腕は確からしいよ。そんな奴に確実に狙わせるには一瞬でも隙を作る事」
首を捻る雇い主と従業員。
「ディリストラム氏が剣士に襲われる。その時回りの目は剣士に行く」
ライフルを構える真似をして俺を見る姉ちゃん。
「当然剣士……かそれはまだ分からんけど襲われたら逃げるのは確実やろ。逃げる先は車のあるトコ。その瞬間に」
構えた腕が上に跳ねる。
「それだとどこから狙う？」
「視察の場所先回りしてもライフルの射程だから一発で当てないと意味無いよ」
「どのみちチャンスは一度。ある程度決めとかないと対応できんよ」
「候補は？」
「ライフルで狙撃するにはちょっと不向きな場所、木とかが生えてるのとと絶好の場所、駐車場とかが近いという条件に合う所」
「ふー」
姉ちゃんが選定した場所『ヴァンラル中央広場』でその時を待つ。
「緊張するか？」

「するなって言う方が無理でしょう」
「ま、そうだな」
何時もどおりの店長。
「千早の方は一人で大丈夫か？」
「心配無いですよ。無理な事はしない人ですから」
「それならいいけど」
店長と二人、ベンチに座っている。
穏やかな午後。まばらに行き交う人達。
「来たか」
大勢の人の声。遠目でも分かるその物々しい雰囲気。
「お気楽だね～。狙われてるってのに」
「ま、知ってたら来ないでしょうから」
回りの護衛は俺達に気付いているが、それ程の注意は向けてはいない。
そっと武器を握る。

俺達の立てた作戦は先手必勝。相手が動く前に騒ぎを起こして相手を封じる事。

ヴァンラル中央広場。大きな街ならありそうな緑の多い公園。
そこでの演説する為に護衛に囲まれたディリストラム氏がやって来た。
多くの市民や軍や騎士団関係者が近寄って行く。
「この状況じゃ……全員がそう見えますよね」
しかし、この状況じゃ暗殺者も近づけないだろう。
「店長」
どうしますか？　と、聞こうと振り向いた瞬間。
店長のチャクラムが飛び放たれた。
「え」
一瞬の間の後、金属音が響く。

響く悲鳴と怒号。
「行くぞ、千歳！」
「え？　あ、はい」
事態を把握していないが店長について行く。

逃げ出している市民の波に逆らい演説台に向う。
「貴様っ！」
人波を越えた瞬間に剣が振り下ろされた。
腕に衝撃が走る。
「邪魔！」
後から来た店長の一蹴りで多分……護衛だと思うがノサれてしまった。
店長がもう一つのチャクラムを投げる。
弧を描いて向う先にいるのは、護衛の騎士を押さえ込んでいる剣士。
タイミング的には相手とちょうどだったらしい。
それが良かったのか、悪かったのかは後で分かる。
今はあの剣士を止めないと。
ん？　あの騎士って確か……
チラッと見えたその体格。
あの小さいのは……間違いないよな。
「こっちにもいるぞ！」
叫ぶ店長。
店長はチャクラムを拾っているので、当然俺の後にいる。
声に気付いた剣士の攻撃を受けるのは俺。
「そう」
振り返りつつ打ち込んでくる一撃を捌いて、
「このっ」
反撃を……避けられる。
剣士が避けた瞬間に、
「おら！」

店長が飛び込んでくる。
「チッ」
舌打ちと共に横に逃げる剣士。その隙に小さい騎士との間に俺が割って入る。
「何者」
店長が着地した瞬間を狙う剣士。
それを俺がカバーする。
左右の連突きから、間合いを詰める。
両手の短槍で剣を抑えて、
「はぁっ！」
そこを支点に後転して左足の踵で不意を突く。
尻餅をついて倒れこんだ俺。振り抜いた踵に衝撃が残る。
「痛っ～」
痛みを堪えながら立ち上がり構えた瞬間に切り込まれる。
光りと火花が飛び散る。
「今のうちにディリストラム氏を！　車をこっちに回させて！」
そう叫んで店長が剣士に立ち向かう。
「あ、貴女達は？」
「いいから！」
店長の声に押されてチビッ子騎士が走っていく。
攻守逆転して店長が攻める。
チャクラムだけじゃなく、蹴りを加えて追い込んで行く。
その姿に見惚れている。
……場合じゃない！
痛みが若干和らできた。
店長が右に出ると俺が左。
上なら下。
下がったら前に出る。
この前の模擬戦のおかげか店長の動きが見えてくる。
しかし、攻め切れない。

敵ながら相手の技量に感服する。
二対一のハンデが徐々に無くなり、剣士が剣閃が増えてきている。
店長が不意をつき、顎を蹴り抜く。
そのまま回転して俺の頭上を越えて行く。
右手突きで追い打ち。仰け反りながらも見切っている。
強引に捻って避けるが、左突きで右肩を打ち抜く！

階段を登り詰めて、屋上に続く扉を開ける。
真っ白な世界に目が慣れてくると、一人の男の姿が見えてくる。
「やぁ。始めまして」
男は驚いた様子も無く私を見ている。
手にはライフル。恐らく弾は入っているだろう。
銃の事はサッパリ分からん。何発入ってるんかな？
ま、この男を捕まえたら分かるか。
剣を構える。
「何？　やる？」
恐らく、闘う？　と言う事だろう。
「でないとここまで来んやろっ！」
ダン、地を蹴り間合いを詰める。
ライフルなら距離を詰めないと……速さは秒間何百メートルらしいからな。
流石に避けられん。
「起動しないのは……余裕か」
振り降ろす剣をライフルで受け止める。
「笑ってるのも余裕かっ！」
目の前でこの笑顔はムカつく！
剣を振りかぶって力一杯振り下ろし、斜めに振り上げて回転して遠心力を乗せて薙ぎ払う。
風を切る音と着地する音が同時に聞こえる。
「中々の腕前だな」

片手でライフルを構え、撃つ。
この距離じゃ撃つと同時に着弾する感じ。
腕に鈍い衝撃。それに耐え切れずに剣を離してしまう。
「まだ？」
「当然」
痺れる右手で剣を拾い、左手に持ちかえる。
力は入れづらいが、今の右手よりはマシ。
「さっきより遅いよ」
それは私も感じてる。
力加減が難しいな……くそ。
剣戟が響くと私の剣が弾かれる。
「俺にもやる事があるから」
目の前に銃口が突きつけられる。
引き金を引くより速く体を沈める。
真上で光りが弾ける。
足元を見つめたまま、痺れが取れた右腕で剣を振り上げる。
避けられるが、攻め続ける。
相手が一歩下がれば一歩前に出る。
「直線的に攻めるかと思えば曲線。体の使い方はとても素人とは思えないな」
声にはまだ余裕がある。
とてもムカつく事だが相手との力量には差があるな。
これを認めた上での攻め方を攻めながら考えないと。
「そして、常に先を考える事も忘れない」
読まれた。しかし、
「本当に素人か？　君は」
私は冷静に的確に攻めるが……半笑いで全て避けられる。
「はぁ……はぁ」
避けられるのはええ。攻撃の内、半分は隙を作る為の攻撃やったし。

本命の攻撃をここまで避けられるのもかなり悔しいがそれは私の力量の所為。
しかし、この半笑いだけは許せんっ！
「ん……失敗か」
スコープでヴァンラル中央広場を見ている。
何！？　その余裕！
……失敗？　あの二人が上手くやったか。
「ま、いいか」
振り返ったその顔には……ムカつく半笑い。
もうちょっとこう……無いか？　等と考えてしまう。
「君が何処の組織かは知らないけど、悔しいが今回は君達の勝ちになるか」
ちっとも悔しそうじゃないのがムカつく。
そのまま唯一の出入り口に向う。
すれ違う直前、
「次は……殺す」
と、言われるかと思ったが言われなかった。

打ち抜かれた右肩を抑えたまま、
「くそ」
反転して逃げて行く剣士。
「逃がすかっ！　うわっ！」
追いかけるが剣士が振り返って剣を投げる。投げつけられた剣を避けた為に剣士を見失う。
「剣士が剣を投げるのは負けを認めた証拠だな」
都合が良い様に考えられる頭脳が羨ましい。
「……店長」
「ん？」
肘で辺りの状況を確認する様に伝える。
辺りには物騒な雰囲気の黒服を着た人達と警官達。

「大人しくしろよ。千歳」
「名前出さないで下さいよ」
両手を上げて害意がない事を証明する。

「まったく。あれが公僕の態度か！？」
ヴァンラルの警察署での長い長い取調べ。
とりあえず立ち聞きで押し通す事にしたのがまずかったと思う。
それで話がこじれた。
途中で警察の対応ががらりと変わったのは恐らく騎士団の制服を着た彼女のおかげなのは間違いない。
「あの……もう少し小声で」
そう、店長が悪態を吐いているのはヴァンラル警察署前。
立番の警官は苦笑い。
「あの態度は……くぅ～……思い出しただけでも腹が立つ！！」
「とりあえず……姉ちゃんトコに行きましょうよ」
ここでこれ以上騒がれると別件で逮捕になりそうなので、店長の腕を引っ張ってタクシーに乗せてしまう。
「おいっ！　市民を……！！」
口を抑えて黙らせる。
「えっと……とりあえずヴァンラル中央広場の東口に」
運転手さんに伝える。
ふぅ……後を向いてまだ叫んでいる店長。

車中で見えなくなった警察に対する怒りをぶちまけていた店長は何処かスッキリとした表情でタクシーを降りる。
ヴァンラル中央広場の東口。
キープアウトのテープを背にした警官がずらっと並んでいるし、報道陣があちこちで同じ様な事を喋っている。
「よ」
喧騒から少し離れた縁石に座り込んでいた姉ちゃんを発見。

三人並んで座る。
「ま、とりあえずお疲れ」
「姉ちゃんの方はどうだった」
「私の方は……どうにか」
一瞬の間が気になるが、こっちを見ないという事は触れて欲しくないんだろう。
それ位は長い付き合いだから分かる。
誰も喋らず、目の前で慌しく動いている報道陣を眺めている。
その中を真っ直ぐこっちに向ってくる一人の女性。
「や。無事で良かった」
目の前に立つ女性は今回の依頼人。
「色々と聞きたい事があるけど」
「答えられる範囲なら」
「あの二人は何者？」
「私達と対立してる組織のメンバー」
「なら、私達はアンタ達に巻き込まれたって事？」
「そうなる……かな」
暗殺を生業としている組織の抗争に巻き込まれたのか？　俺達は！
「ホントなら私達が動ければ良かったんだけど、メンバーが足りなくて」
「それで私達を使おうって」
「彼の事は知ってたし」
「……ふーん」
睨む店長。
その視線に気付いたのか気付いてないのか。時計を確認する依頼人。
「報酬の受け渡しは今度連絡します。後、帰る時に後に気をつけて下さいね」
にこやかな笑顔。……最後の言葉が無ければ。
「では。近いうちに」
手を上げて去って行く彼女。

「じゃ、帰ろっか」
店長の合図で立ち上がる。
「こんな早く私達の事が分かる訳無いやん」
依頼人の警告を笑い飛ばして車に乗り込む。
とは言いつつも尾行に注意しつつ物騒な喧騒から離れて行く。

喫茶レスト

物騒な一件から一週間が経った。
一応出来る範囲で注意していたが尾行も物騒な事も無く、平和な日が過ぎていったある日の事。
「……何してるんですか？」
デスクの影に隠れている店長。コソコソとこっちを見ている。
「千歳か。……ちょっとソレ開けてみて」
ソレ。とは応接セットに置かれている小包の事。
「……何ですか。コレ」
「知らない。さ、開けて」
言いたい事を言うとデスクの影に隠れてる店長。
「え、ちょっ。……本当に何ですか？　コレ」
「だから知らないって。早く開けて」
デスクがガタガタと音を立てて後に下がっていく。
「あの、その体勢は？」
「念のため」
「万が一を考えて警察を呼びましょうか」
「ダメ。何も無かったらバカみたいじゃない」
「何かあったら俺はどうなるんですか？」
「千歳。何座？」
予想していない質問。思わずキョトンとしてしまう。
「星座、ですか。かに座ですけど」
「良かった～。大丈夫。今日の運勢はかに座が一番だってテレビで言ってた」
「店長は何座ですか？」
「私はおとめ座」
「何位ですか？」
「残念ながら最下位。私が一位なら私が開けるんだけど。残念だ」

声が残念そうじゃない。
「さ、意を決して」
「意を決するんですか」
ガタガタと動く音が答えか。
「じゃ、開けますよ」
「無事を祈る」
店長の声が微かに聞こえる。
がさがさと包装を開けて見る。
「店長。ゲームですけど」
入っていたのはゲームソフト。
「ホントに？」
嘘ならすでに俺は吹っ飛んでいるだろう。
「あ。そういえば通販したのを忘れてた。そんな事だと思ったんだよ。なぁ」
あまりにもベタな展開に苦笑いしか出来ない。
「さてと。コーヒーでも飲みに行くか」
ソフトをそのままにレストに向う。

「いらっしゃいませー」
ん？　声が衣里じゃない。
「二名様ですかー」
「「あ」」
店長とハモって同時に指差す。
指差したその顔は……
「しのぶ。席に案内」
「はい。こちらへどうぞー」
指示したのは衣里。
席に案内しているのは、暗殺者。
案内されたのは窓際の席。
「あ、今日から入った『叶しのぶ』。千歳、変なちょっかい出すな

よ」
「よろしくお願いします」
ペコッとお辞儀する叶さん。
「あ、まぁ……こちらこそ？」
疑問形な店長。
「じゃ、しのぶ。オーダー聞いて……」
衣里の新人教育が始まる。

「どう思います？」
チラチラと新人のウェイトレス、叶さんを見る。
「さぁ？　何か目的があるのは間違いないだろうけど」
何も思いつかなかったのか、
「口封じだと思う？」
物騒な事を言い出す。
「それなら俺達が真っ先に狙われるじゃないですか」
「あ。そうか」
多分、もうどうでもよくなったのだろう。
漫画を取りに席を立つ。
戻ってきた店長は何も喋らず漫画を読み始めた。
漫画を読み始めると静かでいい。
ぼんやりと外を眺める。
夜のノーティス通り。
行き交う人達は、男、女。楽しげな人。忙しそうな人。当たり前の事だが色んな人が通る。
「や。暇そうだね」
窓から目を離して声の方に向ける。
立っているのは衣里と叶さん。
「……何？」
「何その声？　暇そうで可哀想だから話しかけてるのに」
「別に暇って訳じゃないけど」

叶さんが持っているのはコーヒー二つ。
「この前はどうも」
「ん？　しのぶ何か頼んだの？」
「はい。一週間前に」
「ふーん」
「言っとくけど答えられ無いよ」
「分かってるって。それ位」
しかし、その目は好奇心に満ちている。
視線を外し再び窓の外へ。
横で衣里と叶さんの会話が聞こえる。
街灯の灯りを窓越しに浴びながら、通りを眺める。

「助けて下さいっ！！！」
まったりゆったりした店内の空気を切り裂く慌てた声。
「ん？　何？」
「助けて下さい！！」
漫画から顔を上げた店長と入って来た男の声色が違い過ぎる。
……思わず笑ってしまいそうになるが、グッと堪える。
「あのっ！」
カウンターに駆け寄って、
「あそこにいるのは代理屋だ」
こっちを指差すレスト店長。
迷い無くこっちに来る。
「じゃ、私達はこれで」
衣里達も席を立つ。入れ替わる間も無く男が来る。
「助けて下さい。お願いします」
「はぁ。とりあえず落ち着いて、何があったのかを」
「そんな悠長な事言ってられないんですよっ！！！！」
俺の手を引いて行く。
引っ張られたまま店の外に連れ出される。

「ちょ、何処へ？」
「妹が……」
レストから出て、真っ直ぐに走り続ける。
「「はぁ……はぁ」」
一体何処まで走るのか……？
「確か」
右左にと動く首。
およその見当をつけて、また引っ張られる。
まだ走るのか？
……
微かに聞こえた悲鳴。
「こっちか！？」
手を引っ張られる前に走り出す。

人気の無い路地裏。
数人の男に囲まれている女性。
それで状況を判断する。
「だ」
一人が振り返る前に、相手の顔面に拳がヒット。
その近くにいた男が構える前に蹴り飛ばす。
「大丈夫？」
二人を倒した事で、囲まれてた女性を助けに来た事は態度で伝えられたと思う。
後は、一……二……三人か。
倒した二人もそれなりに体格がいい。
同じ様なのが後三人。
短槍は無いが、持っている時と同じ構えを取る。
向ってくる男達。
そのスピードに若干の違いがある。それを見極めて、

「ふっ」
最初の男に肘打ち。
二人目は勢いを利用して投げ飛ばす。着地点は肘打ちを食らわした男の上。
後一人。同じ構えで正面に男を見る。
「ふー」
体格では劣るが、他の四人が倒された事で迷ってるな。
じっと目を見据えて。ジリッと足を動かす。
グッと腰を落として……そこで男は逃げ出した。

「ありがとうございます」
「いや、そんな」
テーブルに額が着きそうなほど頭を下げる男。
怯えている女性を休ませるためにレストに戻る。
女性は奥で衣里達が服を直したりしている。
「本当に助かりました！」
「頭を上げてください」
他に客はいないが……カウンターでこっちを見ている店長がニヤついている。
「こんばんわー……夏子ー。待った～？」
姉ちゃんが来店。俺と目が合ったのに他人のフリ。
ま、俺もそうするであろうこの状況。
目の前にはテーブルに対して平行な程頭を下げている男。
俺を知らない人が見ればどう思うのだろうか？

「良くやった！　千歳！」
事情を聞いた姉ちゃんがバンバンと肩を叩く。
「よく言うよ……無視したくせに」
「ま、その事は忘れろ」
え？　それは俺の台詞なんじゃ？

「ま、とりあえず……カレー」
カウンターに伝える。が、
「あれ？」
気付けばレスト店長がいない。
「どこ行った？」
「さぁ？」
カウンターに居たウチの店長が首を捻る。
「アンタ気付かなかったの？」
「漫画読んでたし」
「それなら仕方ないな」
「おーい」
奥に向って呼び掛ける。
「はーい。ちょっと待って下さい」
「え、いや」
腹の減った姉ちゃんに「待て」は通用しない。
「勝手に作るぞ」
「はい。ご注文は？」
「カレー」
「ご注文繰り返します。カレーが一つ」
「うむ」
偉そうに頷く姉ちゃん。
当然気付いているだろうが、目の前のウェイトレスは叶さん。
「さてと」
注文が終わると漫画を物色しに行く。
「あれ？　『ノヴァレル』は？」
ノヴァレルとは月間発売の漫画雑誌の事。
ちなみにウチの店長の愛読書の一誌。
「今、私読んでる」
「じゃ、次」
つなぎの漫画を取って来て読み始める。

「ただいまー」
入ってきたのは由宇さん。
「おかえりー」
カレーから顔を上げて返事する姉ちゃん。
「どこ行ってたんですか？」
「あぁ、さっきの事もあるし迎えにな」
俺の前で畏まっている男女の事で迎えに行っていたのか。
「すいません」
「あ、いや。すまん。悪気は無いんだ」
手で謝る仕草をしてからカウンターへ。
「私もカレー」
姉ちゃんのカレーの匂いに釣られた由宇さん。
「由宇ちゃん。読む？」
姉ちゃんが目の前にある雑誌ノヴァレルを差し出す。
「あ、私学校で読みました」
……親の前でそんな事言うなよ。
「おい。何しに学校へ行ってるんだ？」
「痛たたたた」
頭をぐりぐりと揺さぶられる。
「そうだぞ。由宇。学校は勉強するところだぞ」
「おお。夏子が普通の事を言っている！」
「そりゃアンタ。私だってまともな事を言う時だってあるさ」
何で得意な顔なんですか？　店長。褒めて無いような気がするのですが。
「でも～。部活があるし」
「帰ってから読むという事は無いのか？」
「帰ったらご飯食べて寝るだけだし」
即答。しかし、学校で漫画を読むという理由にはなってない。
「飯食ってから読めば良いだろう」

「忙しいんだよ？　私も」
「寝るだけだろ？　そう言ってたじゃないか」
「明日の授業の準備とか」
「それが済んでから漫画を読め」
「終わったら眠くて眠くて」
「部活って何やってるの？」
「んっふっふっふ。秘密ですよ」
いつかの店長の笑い声を真似する由宇さん。
「気になるな～。当てて上げる」
「ん～」
上から下まで由宇さんを見定めて、一言。
「囲碁部」
「違いますよ。囲碁はやった事無いですよ」
「千早、分かる？」
「じゃ、野球部。七番センター」
スプーンを銜えながら首を振る。
……姉ちゃん。守備位置と打順まで言うなよ。それに野球部のマネージャーの方が可能性はあると思うんだけど。
「千歳は？」
「うーん」
とは言っても持っている物体の形状はまさしく、
「テニス」
「正解です」
パチパチと拍手が聞こえる。
うわ～……恥ずかしい～。
「千歳～。せっかく振ったのに何でボケん？」
「そうだぞ」
え？
「まったく、恥ずかしいわ。そこはボケるトコやのに」
何で怒られてるの？

「あはは。怒られてる」
笑う衣里。
ぎこちなかった店内の空気が和らぐ。
見れば目の前にいる二人も笑っている。
ま、いいか。

和らいだ空位が一変した。
「全員っ！　動くなっ！」
勢い良く空いたドアから入って来たのは銃を持った男。
「きゃー！」
聞こえた悲鳴は三つ。
つまり、悲鳴を上げたのは俺の目の前にいるさっき助けに行った女性と衣里、由宇さんだけ。
後の女性、店長、姉ちゃん、叶さん。に至ってはまるで普通の事の様に見ている。
「いいか！　動くなよ！」
目が血走っている。
追われているのか、それとも興奮しているのか。
どっちかは分からないが俺も落ち着いたもんだな。
「大人しくしろっ！」
銃声が鳴り響き、照明が弾け飛ぶ。
にもかかわらず、落ち着いている女性が三人。
「いらっしゃいませー」
怯えている衣里に変わり、叶さんが近寄る。
衣里が肩に手を掛けようとするが、間に合わない。
ま、彼女ならどうにか出来るだろうけど。
近寄った瞬間、タイミングが良かったのか悪かったのか。
外が騒がしくなり始めた。
「お。警察か」
ウチの店長の声で皆の視線が外に向う。

警察が店の前に物々しい雰囲気と共に取り囲んでいる。
そして、姉ちゃんのテンションが上がり始めた。
「お～。お前何したん？」
窓際に近寄る。
「動くなっ！」
銃口が姉ちゃんに向く。
「……恐っ」
両手を挙げて座っていた場所に戻るが、その姿は恐がっていない。
「怒られてやんの」
クスクスと笑い合う二人。
「お一人様ですか？　ではカウンターへ」
マイペースな叶さん。
その余裕に苛立った強盗は、叶さんの手を捻り上げる。
「痛っ」
間接を極められて顔を歪める。
その表情を見て、……苛っと来た。立ち上がり、
「おい」
「おい。人質と言えばか弱いって言うのが相場やろ。それならこの私やろ」
誰も予想していない言葉が飛び出した。
「ちょっと待て。私の方がか弱い」
店長がバカな対抗心を燃やす。
「この人がか弱いと判断したのは私ですよ」
間接を極められても余裕の叶さん。
唖然とする店内。
三人の女性は微笑んではいるが何故か恐い。
流石の強盗もどうしていいのか分からない様だ。
「おい。私が一番か弱いぞ。なぜならゴキブリを見て逃げ出した事あるぞ」
ウチの店長発信による『か弱い女性自慢』？　が始まった。

「その程度で……私は泣いたぞ？」
何でそんな自慢気なの？
「私は気絶しましたよ」
現在『人質』の叶さんも自慢気だ。
……沈黙の店内。
こういった状況では正しいと言うか普通の事だと思うのだが、今現在は違う意味での沈黙だ。

「ふふん。どう？」
店長がこの前テレビで見た映画『預言者』という映画で泣いたと告白。
俺にとってある意味衝撃の告白。
「マジでっ！？」
その告白に驚く姉ちゃん。
「くそ～」
と、悔しがる叶さん。
誰が一番か弱いか？　よりも、何故そんなに緊張感が無いのかが気になる俺。
ガラス一枚隔てた外で警察が物々しい雰囲気を漂わせているのに、店内は微妙に緊張感が和らいでいる。
それは、俺達だけじゃなく強盗も同じはず。
「そろそろ『ルーディエス』が始まるから帰ろうかな」
ルーディエスとは最近始まったアニメで姉ちゃんや店長がハマっている。
「お。もうそんな時間か」
立ち上がる店長とウチの姉ちゃん。
時間は午後七時半前。
感覚的にかなりの時間が経ったと思っていたけど三十分位だった。
「おい」
動くな、そう言いたかった筈だ。

「もういいでしょ」
叶さんの言葉と共に一回転する強盗。
「一本っ！　じゃ、帰るわ」
何事も無かったように店を出る二人。
「ありがとーございましたー」
叶さんが姉ちゃんが食っていたカレーを片付ける。
残された俺達は呆然とそれを見届けていた。

護衛

本日は朝から依頼が舞い込んだ。
依頼人は『滝上良美』
「白石の方ですか」
差し出された名刺を見る。
「はい。お二人の事はある方から」
ある方と言うのは……間違いなくアノ人だろう。
「かなりの腕前だとお聞きしましたので」
その言葉で依頼が物騒な内容だと推測できる。
「で、何をすれば」
「実は」
小声になる依頼人。
「五日後、軍に採用される武器のプレゼンが行われるんですよ」
それに参加するのは嫌だな。代理屋としては責任重大過ぎるだろ。
「その時に我が社の新技術を使用した武器を発表するんです。その時に護衛して欲しいんです」
「護衛……ですか」
「はい」
「う〜む……襲われる可能性はどの位あるんですか？」
「無い。とは言い切れません」
「襲撃者を捕まえる必要はありますか？」
「いえ。例え捕らえても所属や何処の依頼かは言わないでしょう」
「確かに」
「ん〜」
天井を見上げて、
「分かりました。お引き受けします」
待ち合わせと移動手段についての打ち合わせの後、依頼人は帰っ

ていった。
「いいんですか？」
「ま、いいんじゃない？　あの子の紹介だし」
「それはそうでしょうけど」
襲撃が前提の依頼。
どんな襲撃者なのか？　俺の闘い方は通用するのか？　等と考えてしまう。
「おい。今から緊張してどうする？」
ビクッとしたのが見られてしまった。
ソファで笑っている店長。
「その余裕を分けてくださいよ」
「若いね～」
「俺の方が年上ですよ」
「え？　何？　三年先に生まれたからって年上ヅラ？」
三年なら充分だと思うけど。
「そんな気は無いですけど」
目が恐いので、話を変えよう。
「依頼の事ですけど、襲撃はどの程度の数なんでしょうか？」
「うーん。プレゼンに参加する企業全部？」
「いや。俺に聞かれても」
「でも、当たらずとも遠からず？」
何で疑問系？
「うーん、当たってる確率は、例えば……晴れのち曇り、時々雨」
「……何も判らないってことじゃ無いですか」
「ま、やってみれば分かる」
思ってた通りの答え。
「じゃ、レストにでも行くかな」
「俺もちょっと出てきます」
「そ。すぐに帰って来いよ」
店長はレストへ向う。

俺は緊張している体を解す為にジョギングへ。
強張った体と表情じゃ仕事にならないしな。

それから五日後。
毎日の型の稽古の為、若干の筋肉痛が残る俺の体。
朝、依頼人との待ち合わせ場所。『ラフト駅』に到着。
「あれ？　千早は」
「徹夜明けで無理。だそうです」
「あ……そう」
僅かながら表情が曇る。
ま、戦力としてアテにしてたんだな。俺もそうだけど。
かなりの戦力低下の中、依頼人を待つ。

来るまでの移動中。
車内には緊張感が漲っている。
「ラジオ聞いていい？」
「あ、どうぞ」
沈黙に耐えかねた店長がラジオをつける。
「緊張して無いんですね」
ハンドルを握る店長に微笑み掛ける滝上さん。
「そんな事無いですよ」
微笑む店長。その顔は言う通り少し強張っている様にも見える。
「襲撃があるなら早く来て欲しい様な、来ないで欲しい様な。それが正直な気持ちですね」
「店長も緊張とかするんですね」
「お前、私を何だと思ってた？　ん？」
左手で頬を抓られる。
「痛たたたた……すいません」
車内の空気が少し和らぐ。

車は快調に走り、ラフトシティを抜けて峠に入る。
「血が騒ぐな～」
「くれぐれも安全運転で」
「分かってる。安心しろ、私のドライビングテクニックはお前も知ってるだろ？」
分かって無いじゃないですか。店長。
「さぁ。踏むよ！」
踏まなくていいですから。

軽く酔ったか……？
少し足元がふらつく。
「はい。予定より五分短縮できました。拍手～」
パチパチと手を叩いている店長。
峠を越えて着いたのは『白石光学研究所　開発センター』
「じ、じゃ、入りましょうか」
少し気持ち悪そうな滝上さんに着いて行く。

駐車場から歩いてくる内に気持ち悪さが無くなっていった。
明らかに「何か作ってます」というような施設内の雰囲気。
「凄いな～。私もコレ位の部屋が欲しいな～」
「広すぎませんか？」
「漫画とかＤＶＤが多くて場所からなー。欲しいのはまだあるし。千早だってそうでしょ？」
あえて何も答えまい。
「黙るって事は肯定って事で」
……見透かされてるな。流石は似た者どうしか。

完全なバカ話を聞きながら前を歩く滝上さんはクスクスと笑っていた。
「こちらです」

所長室。とプレートに書いてある部屋に入る。
入ると、見た目三十手前の男性がいた。
「お待ちしてました。そちらは始めましてで良いですよね。私は」
差し出される名刺。
『白石光学研究所開発センター　第二開発室長　魚住周』　と書かれていた。
「魚住室長。早速ですが」
「分かりました」
俺達にソファを勧めて、その間に一つのケースを持ってくる。
「これが我が社が開発した新型のチャクラムです」
「え？　白石の新型ってチャクラムなんですか？」
「え、でも軍の採用試験ですよね？　他の武器は？」
「今回はチャクラムに絞って開発しました。他のも開発しましたが性能は予定していたものよりも低かったので」
「チャクラムだけが予定通りだったんですか？」
「予定の出力に近かった。と言うのが正確ですね」
白石の新型チャクラムと聞いて少し目が輝いた店長。
「それに、数撃つのは簡単ですけどそれで結果が出ないと僕の首が危ないですからね」
「うぅん。……では魚住室長。お預かりします」
咳払いで魚住室長を嗜める滝上さん。
「うーん。僕はお二人ともう少し話したかったんですが」
「それはまた次の機会に。失礼します」
滝上さんが立ち上がったので俺達も立ち上がる。

開発センターを出て車を走らせる。
市内に戻ってからプレゼン会場に向う。
「ここを越えればすぐですね」
俺としてはさっさと通り抜けたい。
「プレゼンて何するんですか？」

「え？　漠然とした質問ですね」
「千歳の頭じゃその程度の事しか聞けないよね」
そんな言い方は無いんじゃ。
「うーん。開発データを見せながら説明かな。後は軍による実戦テストの結果次第ですね」
「へ～」
「意外にインドアなんですね」
店長のその言い方もどうかと……。

ん？　何か光った……？
サイドミラーに何か光るモノが見えた様な。直後、
「うわっ！！」
破裂音の直後、ハンドルを切る店長。
耳障りな音と走っていると言うより滑っている感じの状態の後、草むらに突っ込んだ。
草むらに突っ込んで止まった車。
「大丈夫？」
「滝上さん？」
後部座席でケースを抱えながら蹲っていた。
「あ、っっ」
どうやら無事な様だ。

車を降りて辺りを調べる。
「一体、何が？」
「それは私が聞きたいな」
破裂したタイヤを調べている店長。その横で滝上さんが座っている。
俺はタイヤの後を見ている。
その先に人影が見えた。
「考えなくても分かるやろ？」

「え」
この声は？
風を切るモノが……避けようとするが反応が遅れた。
「千歳ッ！」
風が俺の両脇を駆け抜ける。
「逃げるぞ！　速く！」
滝上さんの手を引いて立たせる。
「逃がすと思うなよ？」
もう、戻ってきたのか！？
「チャクラム使えるのがお前だけだと思うなよ！」
店長のチャクラムが男に向う。
「お前もな」
距離を詰めて行く。途中でチャクラムをキャッチして更に詰めて行く。
「ほう？」
一歩、二歩。大きく踏み込んで飛びかかる。
回転して右回し蹴りから左蹴りで顔を狙う。
後ろに下がるが、店長は追いかける。
「先に行けっ！」
店長に見惚れていた俺。店長の声で現実に帰る。
「今の内に！」
滝上さんの手を引いて森の中に向う。

「はぁ……はぁ」
森の中を駆けて行く。
随分走った様な気がするが安心は出来ない。
「はぁ……はぁ……だ、大丈夫でしょうか？」
「店長は……やる時はやる人ですから」
息を整えつつ、走ってきた方を見る。
何も見え無いし、何も聞こえない。

……大丈夫ですよね。
「少し休んだら行きましょうか」
気にもたれかかっている滝上さんの息が整うのを待つ。
「私なら大丈夫です。行きましょう」
俺がケースを持った方がいいと思うが、他にも襲撃者がいないとは限らない。戦闘を前提に動かないと。

森を歩いていると、後からの視線に気付いた。
「滝上さん」
「はい」
俺が視線に対する対応を取った瞬間、それが殺気に変わった。
「俺の前にっ！」
「きゃっ！」
滝上さんの腕を掴んで引っ張る。
直後、長柄が滝上さんのいた場所に突き刺さる。
「余計な真似を」
長柄の先にいたのは大きな男。
目には明らかな殺気。
この目じゃ……話す事は無理だな。
滝上さんを引っ張って走って行く。
「ふー」
静かに息を吐いて、短槍を構える。
少し開けた場所。長柄相手に不利かもしれないが俺もあの狭い空間じゃ闘えない。
追いかけてきたのは大柄な男。持っている槍も長い。目測……五メートル位か。
第一印象、長すぎるだろ。
「大人しくっ」
「する訳無いやろ！」
迎え撃つが完全に間合いの外。突きを避けて、避けて、避けるし

かない。
森の中、開けているといっても木が邪魔で攻撃が突きだけの単調なものになっている。
それだけの長さがあればそうだよな。
実戦経験では劣るかもしれないが、この状況なら俺にも勝ち目がある。
　冷静に、落ち着いて。相手を見て、切っ先を見る。
起動していないレーザー。これなら死ぬ事は無い。
打撲以上の覚悟はいるが。
　何度目かの正面の突き。タイミングを見て避けそのまま懐に入っていく。
くそ、普通の槍なら手が届くのに。
「ふんっ！」
　手が届く直前に槍が動く。
「くぅっ」
　強引に払われる槍。吹っ飛ばされる前に体を沈める。
ごろん、と地面に寝転がる。真上に槍が振りかざされている。
「うぉ！」
　ごろごろと転がっていく。
ズシン、と響く音。
上がる土煙。
　軽々と持っているが重量もそれなりにあるのか。
「はぁ……はぁ」
　立ち上がり相手を見据える。
さっき感じた勝機がまったく感じられない。それでも
「……ふー」
　恐がっている時じゃない。
後には滝上さんがいる。依頼人の前で情けないトコは見せられないしな。
代理屋としての使命と男としての下心。

それを燃やして戦意と変えよう。
「参る」
律儀に宣告してから攻めてくる男。
突きから俺が体勢を少しでも崩したら払いに変わる。
先ほどと変わらない攻め方。
しかし、受けたら吹っ飛ぶか短槍が折れる。だから受ける事は出来ない。
さっきと同じ様に俺もタイミングを見て詰めるしかない。
ただ詰めるだけじゃさっきと同じ様に吹っ飛ばされるだけだ。……
それなら。
突きを避けて一歩踏み出す。
さらに一歩踏み込んむ。短槍を繋げればギリギリ届く！
突き出された俺の槍が男の右腕を掠める。
槍を捻って短槍に戻し、そこから一歩間合いを詰める。
この距離なら！　男が離れる前に出来るだけ手を出せ！
狙うは腕。それから足。
武器を持て無くして追えない様にする。
俺の狙いはバレているだろうが……攻めるだけだ！
思いっきり叩きつける。衝撃に負けて槍が手から離れた。
しゃがんで左膝を思いっきり振り抜く！
崩れる男。
離れて、滝上さんの手を引いて、
「今の内に！」
「あ……はい！」
また、森の中を駆けて行く。

「さっさと退いてくれよ」
「はぁ……はぁ……いや」
じっと目を見据えて答える。
私は息が上がってるのに、コイツは全然上がってないな。

「俺の方が強いって分かったやろ」
「うるさい。黙れ」
くそ。睨んでやる。
「はは。何でそんな強気なん？」
時間さえ稼げれば後は千歳が……
「悪いが、いつまでもお前に関わっている時間は無いんや」
腕が振られる。飛来音が聞こえる。同時に男が真っ直ぐ詰めて来る。
男から目を逸ら事は出来無いしチャクラムの軌道にも注意しつつ、構える。
一歩下がる。目の前をチャクラムが駆け抜ける。
それをキャッチして至近距離での攻防。
レーザーを起動していないから命に関わる事は無い……筈。
女だからって手を抜かれるよりはいい。私も本気で闘える。
力はあっち。スピードは……若干あっちが上。技は……悔しいがあっち。
惨敗かよ。私。
それでも退く訳には行かないな。
じっと相手を見て僅かな隙も見落とさない。
最初に見つけた隙を最大に活かす。
私の考えを見破られるな。
避けられる事を前提の攻め。バレバレでは意味無いから本気の牽制。
……ここ！　このチャンスを逃してたまるか！
振り上げられた右手。振り下ろされる前に間合いを詰める。
私も右手を突き上げて、軌道を逸らせる。
そのまま左手をたたんで、肘打ちを食らわせる！
振り抜いた左肘。鈍い衝撃。
咄嗟に翻って森に向って走り出す。
男の体が曲がった。確認できたのはそれだけ。
とりあえず……あいつ等に追いつかないと。

木々の間を駆け抜けて小川に出た。
「ここで少し休みましょうか」
「はい」
汗を拭い、水につけた手が冷たくて気持ち良い。
「大丈夫でしょうか？」
「店長の事ですから。大丈夫ですよ」
俺も早く合流したいが連絡出来ないしな。
緊迫したバトル中にケータイなるのもな……
とりあえず森を抜けないとな。それと店長と合流しないと。
それに、槍の男と最初に来た男。
また、闘う事になるのか。覚悟は決めておこう。
「じゃ、行きましょう」
ガサッ。
滝上さんを庇うように立つ。少し休んだ事で緩んだ緊張をまた張りなおす。
もう追いついたのか。それとも時間を掛けすぎたか。
どっちでもいい。とりあえず……先手必勝。
音のした方に突進する。
木陰から出てきた人影に、
「お」
誰かと確認する間の無く投げられた。
ドスン、と背中から着地。
痛み歪む視界に映ったのは、
「あ～……すまん」
ポリポリと頬を掻いている店長だった。
「いえ。こちらこそ」
店長と合流した後、小川に沿って歩いて行く。
「こっちでいいんですか？」
「知らん。とにかく動いておかないと」

その考えには賛成。
とりあえず俺が会った男について報告。
それと店長が闘った男についても聞く。
聞いた感じ、懐かしい様なこの状況では会いたく無かった様な。
「お前の知り合いか」
考え込む店長。
「で、どうします？　これから」
肩を竦めて、首を捻る店長。
「……何も無いんですね」
沈黙。
小川に沿って歩き続けていると、
ガサッ！
「逃げるぞっ！」
振り返る事無く先頭を走る店長。
「急いでっ！　滝上さん！」
店長が滝上さんの腕を引っ張って走る。
滝上さんの後を走る。
チラッと視界に映ったのは、
「よう。まだこんなトコにいたんか？」
最初に襲ってきた男。
「くっ！」
響く剣戟。
「やっぱり千歳か」
「！　宗士君」
懐かしい顔が目の前にある。
「久しぶりやな。千早はどうした？」
場違いな話の内容。
「何で宗士君が」
「ん、俺か？　俺は仕事。お前もやろ」
パッと離れて、再び接近戦。

店長と同じ様な闘い方だけど……
スピードが違う。受けきれないし避けきれない。
最初の一撃は俺だと確認する為力を抜いていたのか。
右腕を掠める攻撃。痛みを堪えて左からカウンターを狙う。
完全に読まれていた。寸前で空を斬る。
「がっ」
カウンターを狙った左腕がチャクラムで弾かれる。
鈍い衝撃に耐え切れずに短槍を離してしまう。
「さっきの女の方が強かったぞ」
この言葉を最後に意識が途切れた。

「誰？　アンタ」
バカみたいに長い槍を持った男が出てきた。
「その女が持ってるケースが欲しいんだ。大人しく渡せ」
「い、や」
反転して滝上さんを引っ張って行く。
千歳が言ってたのはコイツか。
さっきの男とは違ったタイプだな。
「ふー。とりあえず。滝上さん」
「はい」
「ここからは一人で行ってくれる？」
「え」
ま、この状況で言われたら驚くよな。
「えっと、依頼を放棄するんじゃなくて私があの男を引きつけるからその間に少しでもここから離れて」
「え。でも……それじゃ」
これが今考えられる最善の策。
残念ながら勝機は多くて三割位だろう。
後はどれだけ粘れるのか。
千歳が来れば何とかなるかも知れないが、追ってきたのがあの男じ

ゃそう期待は出来ないな。
「大丈夫。そう簡単には行かせないから」
そう言うのが精一杯の強がり。
「分かった？　じゃ、また後で」
「御無事で」
「ありがと」
滝上さんが歩いてく方と反対方向へと向き直る。
……目を閉じ、深く長く息を吐いて……覚悟を決める。
「良い覚悟だな」
その声に目を開ける。
「待っててくれたの？」
「ま、気にするな」
「しないわよ」
「じゃ、やるか」
風を斬るとか、そんな優しい表現は似合わない感覚が体を駆け抜ける。
受ける事を考えるヤツはバカだ！
しゃがんで避ける。頭上を通過した瞬間にチャクラムを投げる。
下から上への放物線を描いていく。
顎を引いて避けるが、チャクラムは数枚の葉を落として下がった私の手に戻ってくる。
これだけの体格差が合ったら私の体術じゃ効かないだろうな。
だからと言ってまだ逃げる事は出来ない。
もう少し時間を稼がないと。まだ、距離が取れてないだろう。
「ふっ！」
考えてる場合じゃないな。行動あるのみ。
切っ先を見据えて、右、左、前、後。ステップを踏んで距離を詰めて行く。
次に踏むステップを読まれて突き出される槍、
「っ！」

ギリギリで……体勢を変えて避ける。
「くそ」
追撃を避けていく内に元に位置に戻る。
「スピードはいいが、それだけではな」
スピードは私の勝ちだと認めたのか。
「パワーも当たらないと意味無いよ」
「はは、そうだな」
挑発にならなかったか。
「じゃ、続けようか」
巨体に似合わないスピード。
私やさっきの男よりは遅いが威圧感は違い過ぎる。
先を読め。
グッと腰を落として男の体と切っ先を見据える。
突き、薙ぎ払い。振り下ろしから突き出し。
一撃ごとに一歩下がって避けていく。
ドン、背中に衝撃。
引き絞られる右腕。
突き出される槍をギリギリまで動かずに、
「はっ」
左頬を掠める槍。切れたのかじんわり痛む頬。
木に突き刺さる槍。抜けないのが理想だがそんな漫画みたいには行かないだろう。
木の後に回り五歩離れてチャクラムを起動して投げる。
円軌道を描いて木の向こうにいる男に向うチャクラム。
光る軌道を描いて木の向こうで交差する。
狙ったのは両足。
直には動けない程の傷を追わせる事が出来れば……。
回りの枝を切り落としながら戻ってくるチャクラム。
「はぁ……はぁ」
膝に手をついて息を整える。

「ふぅー」
警戒をしつつ気の向こうを見る。
「はは。やるな」
座りこんで私を見て笑っている男。
「まだ？」
「無理だろ。残念だが俺の負けだ」
「さっさと認めれば痛い目見なくて済んだのに」
「そうだな」
「せっかく二人で来たんだから一緒に来れば」
「二人？　俺は一人でこの依頼を受けたんだが？」
「え？　依頼？　アンタ代理屋？」
「お前もか。他にも目的が同じヤツがいるのか。ま、後は頑張れ」
興味が無いのが分かる激励。そして、服を破って足に巻いて立ち上がる男。
漫画みたいだぁ。
「あ。俺は『本多大輔』」
「私は椎名夏子」
「椎名夏子か。じゃ、またな」
ゆっくりと歩いて行く本多。
「さて、残るは後一人」
ヒリヒリ痛む頬を押さえて空を見上げる。
……あ、血が出てる。

「ん」
目を覚ますと同時に痛みが走る。
「ん～。と」
確か……
「あ」
宗士君と闘って……それから。
辺りに人気は無い。

という事は……
「ヤバ」
ガバッと起き上がり、脱兎の如く走り出す！
「ちょうど良かった。持ってるソレ、欲しいんやけど」
森に入る前に襲ってきた男が目の前にいる。
「さぁ？　素直に渡してくれんかな」
近寄ってくる男。
振り返って走り出す。が、
「痛っ」
足に痛みが走る。
「素直に渡してくれたら痛い目見んで済むのに。さ」
手を出してくるが、答えは、
「断ります！」
足の痛みを堪えて来た道を戻る。
「そんなに痛い目見たいか？」
どんな目に遭ってもこれは渡せない。
「ふー。女苛めるのは趣味とちゃんやけど」
目の前から何かが飛び出し、
「！」
男に向って行く。
「お。ええタイミングやな。千歳」
流れる様に、舞う様に。そんな印象を受ける彼の攻め方。
「さっきとは違うな。はは。強くなったか？」
くそ。まだ余裕があるのか。
受ける事もなく、体の動きだけで避けられていく。
しかも、ギリギリ。空振っても攻めてこない。
「はぁ……はぁ」
肩で息をする。

「千早に稽古つけて貰ってないんか」
腰に手を当て、膝に手をついている俺を見る宗士君。
攻めて来ないのは余裕か……これが力の差か。
「ま、昔よりは強なったが」
言葉が止まる。
「その余裕がホンットにムカつくんだけど！！」
聞きなれた声と共に、頭上を駆け抜ける物体。
「よ。お前も来たんか」
「店長」
振り返ると店長が立っていた。
「さて、後はコイツだけか……じゃ、行くぞ」
戻ってきたチャクラムを握りなおして、
「千歳！」
「了解！」
左から飛んで行くチャクラム。
動かない宗士君。
ギリギリで避けるのなら、俺もギリギリまで待つ。
後に下がって軌道を外す。
俺は二歩踏み込んで右から薙ぎ払う。
更に下がる宗士君。
しかし、左右から同時に襲い掛かるチャクラム。
「ほう、左右で軌道を少しずらしてるんか……やるなぁ」
両方の軌道を見切っている。
「これでっ！」
二つ目のチャクラムを避け、体勢が崩れた瞬間に突き出す。
流石、と言うべきか。強引に捻って避けるが、
「二槍だったな。お前」
もう一本の短槍で追撃。
突き出した槍。

宗士君の手が動く。同じ手は喰らわない。
チャクラムで弾かれる前に、短槍を離す。
弾かれて飛んでいく短槍。
「これで！」
残った一本も突き出す。
「アホ。攻め方が単純やな」
「何がっ！」
空を斬る俺の攻撃。
「さっきと同じ」
「とは違うでしょ。私がいるし」
しゃがんで宗士君の蹴りを止める。
そして、店長が俺の真後ろから飛びかかる。

木に突き刺さった店長のチャクラム。
その間で笑っている宗士君。
「はぁ～。俺の負け？」
負けず嫌いな宗士君。
「何でもいいけど……諦めてくれない？」
「ちょっと油断しすぎたかな」
「聞いてる？」
「ん？　何？」
「聞こえてただろ？　宗士君」
「千歳、話し方おかしないか？」
「そんな事より！」
ちょっと苛立ってきた店長。
「どう！？　帰る！？　痛い目見る！？」
「俺も依頼があるんやけど」
「こっちも依頼なの！」
「おい、千歳。何で怒ってるん？　この女」
「お前の所為だー！！」

引き抜いたチャクラムが、
「痛っったっ～！！」
宗士君の脳天にクリーンヒット。
静けさを取り戻した森の中、宗士君の悲鳴が響き渡った。

二人の襲撃を何とか退けた。
森を抜けて、車のパンクを直しす。
「さて……時間はどうなんですか？」
滝上さんが時計を見る。
「ギリギリかも」
「じゃ、行っきまーす」
ホイルスピンさせて、
「うわっ！」
「きゃっ！」
「あっはっはっは」
店長の高笑いと後に押される感覚と共に発進する。

「到着～」
「すいません！　後で！」
駆けて行く滝上さん。
しかし時間は、
「は～。間に合ってないよね？」
「はい。プレゼン開始は二時からって言ってましたから」
「遅刻厳禁だろうな」
「そうでしょうね」
車で待つ事五分弱。
肩を落とした滝上さんが帰ってきた。
その姿でダメだった事が分かる。
「……あ～。その」
「すいません。お二人にはあんなに」

「ま、こんな時もあるよ」
ポンポンと肩を叩いて、
「さて、帰ろうか」
今度はゆっくりと発進する車。
「お腹空いたな。ちょっと寄り道して行こうよ」
店長の提案によりドライブしながら帰る事に決定。

店長と姉と

白石光学からの依頼から四日後、
「三割でいいですよ」
「しかし、あれだけの危険があったんですから」
「いえ、しかし」
「依頼はプレゼンまでの護衛。時間には間に合わなかったんですから」
「それは」
「そ、れ、も。含めての依頼です。ですから三割で」
店長の意思は固い。
「……分かりました。そこまでおっしゃるのなら」
小切手を鞄に仕舞い、
「では、後ほど」

「ふー。疲れたー」
「どうぞ」
滝上さんが帰った後、頬の絆創膏を擦りながらソファにもたれかかる店長。
「見た目と違って退かない人だね」
「真面目なんですよ」
「さて、これから何をするか」
「滝上さんが来るかもしれないから、ここを空にする訳にはいかなですよね」
「仕方ないな。漫画でも読も」
いつも通りの日常が始まった。

「いや。それは」
戻ってきた滝上さん。意外な報酬を持ってきた。

「そうですよ。これだけ貰えれば」
「社としての決定ですので」
声に退く気が無いのが表れている。
「いや、しかし」
「お二人の武器もかなりの損傷を受けたのでしょう」
確かにそれなりに痛んではいるが。
「こ、今回の様な依頼なら、あの程度壊れるのは普通だし」
「なら、修理に出している間に護衛の依頼があったらどうするんですか？」
「それは……断る事もありますし」
「ダメです！」
何故か怒られ始めた。
「いいですか？　危険が付きまとう職業なのに武器の破損を理由に断るのは仕事放棄と取られかねないでしょう！」
「はぁ……仰る通りで」
店長が勢いに押されている。
「ですから、今回の報酬は二十万円と私がプレゼンに持って行ったチャクラムの改良型とショートスピア二振りと言う事でいいですね？」
「はい」
勢いに押されてしまい頷いた店長。
「では、これから開発センターに行きましょう。車を待たせてあります」
この言葉から何を言っても無駄だったと分かった。

「どうも。今回の事で随分お世話になった様で」
「いや。そんな事は」
「ささ。どうぞ」
……白石光学の令嬢。白石春菜嬢の登場。
白石嬢を先頭に開発センターに入る。

「いえ。そんな。結局間に合わなかったし」
「お二人の努力はしっかりと聞いてますよ」
窓から入る日の光に照らされる笑顔には屈託が無い。
「う……何か胸が痛む」
「俺もです」
嫌味がないのが……辛い。
「？　どうしました？　そんな顔して」
「いや、何でも」
俺達の苦悩を知る由もなく案内されたのは、
「どうぞ」
ノックの後に聞こえた声は、
「や、どうも」
魚住室長が二つのケースと共に嬉しそうに待っていた。

店のソファとは比べられない程上等なソファに座るが、居心地が悪い。
「さて、今回は残念な結果に終わりましたが」
魚住室長の言葉に更に小さくなる。
「鯛ちょー。そんな事言わないの」
鯛ちょー。……あぁ。魚住周だからか。
等と考えている場合じゃない。
「まぁ、どのみち今回は落選してたと思いますから、そんなにお気になさらずに」
「はぁ……ありがとうございます」
おそらく、この人は困ってる俺達を見て楽しんでるんだな。
「で、滝上から聞いてると思いますが」
目の前のケースを開ける。
「今回のプレゼンに出す予定だったチャクラムと開発が間に合わなくて諦めたショートスピアです」
「「ぶっ！」」

店長と同時に吹き出す。
「ゴホ……ゴホ……いいんですか？」
「当然ダメです。知っているとは思いますが、軍の規格と民間の規格は微妙に違うんです。そんな事をしたら私達のクビどころか白石自体が危ないじゃないですか」
「そうですよね～。すいません。ウチのバカが間抜けな事聞いて」
え？　アンタも同じ事を思ったはずだろ！？
「それで民間に対応した規格に合わせた改良をしました」
「ですよね～」
徐々にいつもの店長に戻り始めた。
「どうぞ、手に取って下さい」
いいの？　店長と顔を見合わせる。
白い短槍。一振りは尖端が三つに分かれている。もう一振りは真っ直ぐな形状。
装飾は無くても光に当たれば輝いて見えから見惚れてしまう。
手に持ったそれは、とても軽くしっかりとした感触だった。
「どうですか？　気にいってくれました？」
「……ありがたく頂きます」
店長が頭を下げる。

「ふーん。それで貰ってきたの？」
部屋に帰ってきた。目ざとく姉ちゃんがそれを発見。
「ええな～。私も行けば良かった」
「アホ。どんな目に遭ったと」
「宗士やろ？　懐かしいやん」
「いや。だから……言ったろ」
「今度闘る時があったら姉ちゃんが闘ったる」
何で「闘う」を「やる」と読むかな。
「風呂に入ろうかな」
「どーぞ」

やっとニュースが見れる。
「そんなに嬉しいのか？　細見咲を見れるのが」
「うるさい。さっさと風呂入れ」
姉ちゃんの笑い声がフェードアウトしてからゆっくりとニュースを見る。

「へ～。大変だったんですね～」
「そうなのだ」
レストで前の依頼の事を話している。
「千歳もやる時はやるんだね～」
「褒められてる気がしないんだけど」
「でも、お二人のおかげで企業秘密は守られた分けですから」
「まぁ、そう言えるかな」
得意気な店長。
「相手は日高宗士でしょ？　結構有名な代理屋ですよ」
「え？　そうなん？」
食べる事に集中していた姉ちゃんが顔を上げる。
「アイツそんなに有名なの？」
ウチの店長を見るが、
「私は知らない」
「けっこう有名ですよ。軍や警察からの依頼もあるとか」
「へ～。それ程のヤツなの？」
「あの宗士がね～」
「つーか、何で知ってるの？　二人は」
店長が気付いた。
「実家が近所だから幼馴染」
一言で説明する姉ちゃん。
「ふーん。にしては手加減しなかった様な」
「宗士君は真面目だし、向こうも依頼受けてきたんだから手は抜かないですよ」

「武器は？　千歳は槍で千早ちゃんは？」
「私は剣」
「宗士って人は？」
「私と一緒」
「チャクラム？　皆違うじゃん」
「私と千歳は師匠が同じ」
「器用な人だね。剣と槍、両方出来るなんて」
「出来無いよ。剣だけ」
「え？　じゃ」
俺は？　と言う疑問が起こる。
「千歳は私の練習についてきて、その時に木の棒振ってただけ」
「？　見て貰ってないの？」
……
「特には見てもらって無い……様な気が」
「じゃあ、自己流？」
「子供の頃から二本持ってたし」
「何で？」
「一本より二本の方が有利と言う子供染みた発想だと思う」
姉ちゃんの解説。
俺もそう思う。
「でも、一本より難しいんじゃないですか」
「他の練習生には結構勝ってたよ。な」
「そうかな。あんまり覚えてない」
訳ではないが。
「アイツは？」
店長の声が恐い。気にして無い様にしているが気になっている様だ。
「アイツは師匠の知り合いのトコでやってて、何度か模擬戦した事ある」
「で？結果は」

「……全勝」
クイッとコーヒーを飲んで自慢げに言い放つ。
「でも、向こうは実戦経験してるわけだし、千早は？」
「うーん。特には」
「なら、経験の差でヤバいんじゃない？」
「そんな事は無い。絶対に私の方が強い」
ん？　店長が挑発してる？
「そうかな～」
しかし……何でそんな事する理由は。
「私もそれなりに実戦経験してるけど……結構苦労したよ」
「はっはっは。夏子。私もただ遊んでた訳とちゃうぞ」
「ふふーん。試して見る？」
「ええやろ。挑発に乗ったるわ」
なるほど。貰ったチャクラムを使いたかったんだな。
だから、挑発してたのか。
睨み合う二人。
どうしていいのか分からずに戸惑っている衣里。
微笑んでいる叶さん。
さて、俺はこれからどうしたものか。

「さて、覚悟はええか？」
「そっちこそ」
夜の公園。とは言ってもそれなりに人がいる。
芝生に座り、これから起こる事に期待すらしている様にも見える。
「じゃ」
「千歳」
まったく気にしない二人。
名前言うなよ。まったく。
「始め」
スコーン！　とチャクラムが頭にヒット。

「気合が足りん！」
「真面目にやれ！」
何だよ……何で怒鳴られなきゃいけないんだよ。
「もう一発いくか？」
「遠慮しておきます。では、うぅん……始め！」
正拳突きまでしてしまったが、
盛り上がるギャラリー。
良かったのか？　これで。
俺は邪魔にならないように芝生に退避。

軽やかに地を蹴るステップと剣戟が響く。
あれだけ盛り上がっていたギャラリーも声もなく見ている。
振り下ろされる剣を弾くチャクラム。
突き出されるチャクラムを逸らす剣。
一瞬の鍔迫り合いの後、火花が飛び散る。
……正直、俺には二人の攻撃が見えていない。
全体を見ていてこのザマだ。
前に店長と模擬戦やった時は随分手を抜かれていたんだな。
そう思うと悔しくて情けなくなる。
「どうしたの？」
隣にいる衣里が俺を覗きこむ。
「いや。何でも」
「無い様には見えないんだけど」
痛い位に握っている拳。
「ホント、何でもないよ」
力を抜いて、いつも通りに話す。
「そう」
納得したのか闘っている二人に目を戻す。
姉ちゃんが踏み込めば、更に踏み込んで迎え撃つ店長。
狭い間合いから一歩下がる姉ちゃん。

店長は追い打ちを掛けるが、姉ちゃんは剣で薙ぎ払う。
　薙ぎ払いを後に下がって避けて、チャクラムが店長から放たれる。
姉ちゃんの舌打ちが聞こえてきそうだ。
薙ぎ払った剣で弾こうにも間に合いそうにない。
チャクラムの軌道を判断して体勢を変えて避ける。
体勢を戻したら、店長の攻撃が待っていた。
ギリギリで避けている様にも見えるが、掠っているのもある。
「夏子さん、本気だね」
　レストでは絶対に見れない店長の顔に驚く衣里。
「でも、直撃は無いですよ」
　冷静に話す叶さん。
おそらく彼女には全ての攻撃の軌道が見えているのかもしれないな。
「千歳はどっちが勝つと思う？」
「さぁ」
「どっちも頑張れ？」
「とは違うけど……どっちが勝っても良いかなって思ってる」
「どっちも頑張れじゃん」
「だから違うって……面倒だな」
「何よそれ？　ちゃんと言いたい事は言いなさいよ」
　首を捕まれる。痛くは無いが暑いので止めて欲しい。
「うーん」
　どう言ったものか。夜空を見上げる。
真っ黒な空にチカチカと光る星。
「あ。流れ星」
「え？　マジで！？　どこどこ！？」
　叶さんの一言で衣里は流れ星を探している。
助かった。この思いは誰にも言いたくは無い。

　余所見をしていた瞬間に、勝負は決まった。
うつ伏せに倒れた店長の首元に姉ちゃんの剣が当てられる。

「……参った」
店長が負けを認める。
「ふぅ……お疲れ」
姉ちゃんが手を出して店長を立たせる。
沸き起こる拍手。
照れ臭そうに見合っている二人。
俺はその光景を羨ましい様な、悔しい様な、色んな感情が混ざった心で見ていた。

「ふふ。あの二人の強さを直に見て自分の弱さを認めました？」
帰り道。叶さんが俺の耳元に囁く。
彼女が言った事は俺が感じて誰にも知られたくない思い。
「でも、そう感じるたのならこれからどうすればいいのか。分かりますよね」
彼女は俺の心を見透かしている様に話す。
「私は応援しますよ」
ポン。と肩を叩かれる。
くそ……何か恥ずかしいな。
「千歳ー。早よ来ーい！」
姉ちゃんが呼ぶ声に、深く息を吐いて走っていく。
この思いをどうすればいいのかなんて……言われなくても分かってるさ。

探求者

「ふー」
俺以外にもジョギングや体操をしている人が居る朝の公園。
日課になった朝の稽古の休憩にベンチに座りながらそれらを見ている。
「よ。青年。頑張ってるな」
「あ、おはようございます」
最近知り合った『柴田浩一郎』
毎朝ジョギングしているランナーだ。この間ジョギングなのに競争しようと誘われた。
「槍二本なんて珍し～」
「毎朝言ってますね。それ」
「ま、気にするな。青年」
「同じ年でしょ」
「ま、気にするな」
朝の公園い響く高らかな笑い声。

「よ」
「おはようございます」
店に来ると、いつも通り漫画を読んでいた店長。
「千早は？」
「何かやる事あるって言ってました」
「ふーん」
「寂しいだろうけど我慢しろって」
「この口か！？　そんな事言うのは！？」
頬を抓られる。
「……い、痛いですよ」
ぎゅ～。と抓られて引っ張られる。

痛みが残る頬を擦りながら、
「俺が言ったんじゃないですよ。そう言ってくれって」
「分かってる」
なら……やめて下さいよ。痛いんだから。

「お」
レストでのお茶の後、散歩がてら公園まで店長の思いつきで歩かされた。
前から来るのは柴田君。
「誰？」
横でコンビニで買ったアイスを舐めている店長が柴田君に顎で聞いてくる。
「柴田君。最近知り合ったんですよ」
「ふーん」
「小林君、そっちは」
店長を見る。
「上司」
見上げる店長。柴田君は俺より背が高い。
「へ～。いいな～。こんな可愛い人と一緒に働けるなんて」
「でしょ？」
可愛いと言われても表情を変えない店長。
「何してるの？　バイトは？」
「買出し。そこのコンビニまで」
「ま、頑張って」
「そっちもな。じゃ」
柴田君が俺達が来た方に歩いて行く。

公園のベンチに座ってぼんやりと時間を潰す。
「誰？　さっきの」
「あぁ、柴田君ですか。毎朝会うんですよ」

「何で？」
そこまで言ってしまったが、
「何で？」
「えっと」
言うのは何か恥ずかしい様な。
「……ま、言いたくないならいいけど」
アイスの棒を銜えながら鳩を見ている。
……沈黙。
「……稽古。してるんですよ。毎朝」
沈黙に耐えかねて言ってしまう。
「ふーん」
笑われると思ったが、店長はこっちを見る事無かった。
「で、その時に知り合ったんですよ」
……沈黙。
「何で？」
「それは」
店長と姉ちゃんの本気を見たから。
「ま、良い心掛けかも」
それだけ言って、
「さて、帰るか」
立ち上がるって歩いて行く。

「お」
「あ。どうも」
「「誰？」」
前方歩いてきたのは、
店長と同じタイミングで同じ事を聞く。
「こっちは大家さんです。で、こっちは上司です」
「よろしく。椎名代理店店長の椎名夏子です」
「『泉荘』管理人の『泉さゆり』です」

軽くお辞儀する二人。
「じゃ、帰ろうか」
「あ。もしかして今暇？」
「まぁ、簡単に言うと」
「じゃ、ちょっと頼まれてくれない？」
突然の依頼に店長と顔を見合わせる。

「マジですか」
大家さんから頼まれたのは『大家宅の掃除』
目の前に立っている大きな門。
大きな表札には、これまた大きく『泉』と鮮やかに力強く書かれている、というより描かれている。
表現がおかしいような気がするが、そう言うのが正しい。
「ま、入って」
当然だが、当たり前の様に入っていく大家。
気後れしている俺達が後に続く。

「何処？　ここは？」
明らかに別世界。
立派な庭。真っ直ぐに敷いてある石畳。横には綺麗に手入れされた芝生。
店長が芝生に入るかと思って心配していたが、気後れしてる為に素直に大家さんの後を歩いている。
「千歳。千歳」
小声で話す店長。グイッと耳を引っ張られる。
「痛たた……何ですか？」
下らない悪巧みか？　それは止めて欲しい。
下手をすれば俺達姉弟が追い出される危険すらあるんだから。
「ホントに大家？」
「そうですよ。間違いなく」

顎に手を当てて何かを考えている。
「大家って儲かるの？」
「……さぁ？　大家になった事無いので分かりません」
「聞いてよ」
「嫌ですよ」
「ん、何？　どうかした」
後でコソコソと喋っている俺達の声が大家さんの耳に入った。
「いえ、別に」
振り返った大家さん。誤魔化して歩いて行く。
「ささ。入って」
無駄話をしている間に玄関に到着。
「千歳。門から歩いて五分位掛かった」
いつの間にか時間を計っていた店長。
小声で結果を報告してくる。
多分、店長は微妙にテンションが上がっている。

豪華な玄関、上を見ると二階が見える。
「吹き抜けだ！」
上を見て声を出す店長。
「声に出さないで下さいよ。店長」
恥ずかしい。
「あっはっは。ま、上がって」
スリッパを出して、入っていく大家さん。

「ここの片付けやって欲しいんだけど」
日当たりの良い部屋。部屋の両側に大きな本棚。ぶ厚い本がぎっしりと詰っている。
窓際を背にしたゴツイ机。その上には隙間なく何かの資料らしきものと本が乗っている。
多分、絨毯が敷いてあると思うが、その上にも本棚に入りきらなか

った本が平積みされている。
「うわ〜。……はは」
笑うしかない。
「積んである本は二階の書斎に運んどいて」
「じゃ、本棚の本はアルファベット順に並べますか？」
「あ、やってくれる？」
店長の言葉に嬉しそうに微笑む大家さん。
しまった……と、顔をしかめる店長。
「ま、今日中でいいから。よろしく」
今日中って……まだ十三時間程あるんですけど。
「ちゃんと報酬は払うし、夕飯も付けよう」

「しっかし。よくこれだけ集めたもんだな」
手に取った本をパラパラと開く。
「店長もこれ位あるんじゃないですか？」
「流石にこの数は」
クルッと見渡して、
「……本棚に入ってる数ならイケるかも」
ぶ厚い本から薄い本まで。内容はよく分からないが何か凄そうと言う印象の本達。

「へ〜。神様って結構いるんだ〜」
「仕事してくださいよ」
「千歳、知ってる？　ってヴィンラークって神様の武器も槍なんだって」
「聞いてます？」
壁にもたれかかって読みふけっている店長。
書斎の整理もなんのその。相変わらずのマイペース。
整理いていて気付いたのは神話関係の書籍が多い。
「大家は何してる人なの？」

「……大家じゃないんですか？」
「……間違いないな」
静かに片付ける俺と、しっかりと読んでいる店長。

「よ？　進んでる」
大家さんが入ってくる。
「どう、面白い？」
「凄いね。ロティってヤツは」
読みながら入ってきた依頼人、大家さんを見る事もなく答える。
「あぁ、ロティは最後ルバヴォルに裏切られて」
「え！？　マジで！？　仲間でしょ！？」
「その辺は……確か」
本棚を指差しながら一冊ずつ確認して、
「こっちの方が詳しく載ってるよ」
一冊のぶ厚い本を店長に渡す。
「ま、神様だって色んなヤツがいるし、その数だけ考えがあるし野望もある」
羨望の眼差しの店長。
「人間みたい。神様って」
手渡された本を読み始める店長。
そんな店長を見ながら、
「そうなの！　神様って偉大で神秘的で畏敬の念を持たれてるだけじゃなくて、失敗したりそれを誤魔化したり、でもそれがバレたりしてまたそれを誤魔化すために知恵を出したりとか」
「神様が身近に思えるね」
大家さんの講義が始まった。

とっぷりと日が暮れて、
「へー。ルルティンは結構気が合うかも」
門前の小僧な俺。

ルルティンは「光と闇に存在するもの」が産み出した精霊の事。
その大雑把な行動で回りは迷惑を被っている。
「あははは。そうかもね～。夏子は細かい事気にしなさそう」
「そんな事無いよ。な？　千歳」
……
「黙秘？　それは私の言葉を肯定したって事で」
「ち～と～せ～」
ゆらりと立ち上がり、
グイ！
「痛たたたたた。店長！　髪を引っ張るのは」
本気だ！　この人は！
「私って繊細だよね？」
「はい！」
「私ってデリケートだよね？」
意味は同じじゃ。
しかし、この状況じゃ俺の出来る事は、
「そうです！　はい！」
ひたすらに店長の言葉に頷く事だけだ。

作業開始から七時間。
何度、階段を往復しただろうか……？
何度、ドアを開けただろうか……？
「お疲れ様」
と、依頼者の言葉で業務終了。
「じゃ、ご飯食べようか」
疲れた体を伸ばし腰を叩いて、大家さんの跡について行く。
「疲れた」
眉間を押さえている店長。
ちっとも手伝ってくれなかった店長。

「じゃ、今日はご苦労様でしたー」
大家さんの部屋で乾杯。
テーブルに並んだ食事。と言うか出前。
それらを摘みながら話している。内容は神話の事。
「神話って結構面白いねー」
店長が大家さんの心に火をつけた。
「その時代に生きていた人達は、何か自分達に理解出来ない事は全部神様と言う不確かな存在が起した現象だと認識する事で納得して来たの」
あれ？　いつの間に酒瓶が……？
「神々や人類はある時は敵対し、ある時は手を組んで共通の相手と闘う」
クイッと飲み物を飲み干して、ダン、とテーブルに音を立てて置く。
「その風、海、土、火と光りと闇。それに地下の勢力がそれぞれの思いを胸に秘め世界を導いていた時代。その世界に思いを馳せると……心がトキメクでしょ？　ねぇ！？」
……
「千歳……何か嫌な予感がするんだけど」
「俺もです」
小声での会話。
「さぁ！　今日は神話時代に神々の生きた時代に思いを馳せて語り明かそう！」
大家の一方的な講義が始まった。

再会

「大丈夫か？」
ついさっき帰ってきた弟。
……返事が無い。
目が合う。すれ違う瞬間、
「酒臭っ！」
私の声になんのリアクションも無く、ゆっくりとした動きで自分のベッドに向う。
「ま、寝とけ」
カーテンを閉めてとりあえず日が当たらない様にする。
「ほら。水。置いとくぞ」
ベッド脇にコップを置く。
まったく……何処で何をしていたのか。
青ざめた顔で、ぐったりとしている。
しかし、暇だな。寝ているのかは分からんが横でゲームする訳にもイカンし。
情けない弟を放って行くわけにもイカンしな。
弱ったな。漫画でも読むか。
「何か欲しい物があったら言えよ。千歳」
聞こえているのかいないのか。分からないが一応声を掛ける。

「ん？」
ケータイが鳴る。着信は夏子。
「はい？」
「……」
何か言っているが聞き取れない。呻いているのか？
「何？　聞こえんのやけど」
何か呟いているが……

「え？　何？　おい！　夏子！」
切れた……聞き取れたのは……
「た、す、け、て」
切羽詰っていた様な……
「千歳！　ちょっと出てくるから！」
財布とケータイと事務所の鍵を持って部屋を出る。

走って事務所に到着。
「あっつ～」
夏の日差しの中のマラソン。
汗を拭って中に入る。
「夏子～。来たぞ～」
小さくドアを開けて中を窺う。
いつもと違い暗い室内。
「何処にいるん～」
ゆっくりと辺りを確認しながら入っていく。
掃除用具の入ったロッカーを静かに開ける。
ガチャ、と鳴る音が響く。中に手を入れモップを取る。
いつものデスク、ソファ。
壁を背にして音を立てずに進んで行く。
窓際のカーテンを開けて、室内を照らす。
外を窺うが、ここから見る限り不審者は見えない。
「狙撃って事は無いやろうけど」
何か妙な組織に関わった事もあるしな。
無いとは言い切れんか。
窓を一気に駆け抜けて、夏子の部屋のドアの前に立つ。
耳を当てて中を窺う。
音は聞こえない。
人の気配は……
アカン。分からん。

……考えてる場合じゃないな。
くるん、とモップを回して、勢いよくドアを開ける。
「夏子！」
誰もいない。
奥から聞こえる音。
「夏子！」
「……千早？」
千歳より青ざめた顔の夏子がいた。
崩れ落ちる夏子。
「どうした！　何があった！」
駆け寄って支える。
「うっ」
ほのかに漂うスッパイカホリ。
「も一回行ってくる」
回れ右でドアの向こうに消える夏子。

「二日酔い～！？」
「大きい声はヤメテ」
布団にくるまる夏子。
もぞもぞと動く布団。
多分、頷いている。
それならこんなにも緊張していた私の立場は？
手にしたモップがアホらしい。
「しかし、あんたの部屋に入ったのは初めてやけど意外な」
畳引いてるし。屏風も掛け軸もあるし。
本棚は漫画で一杯。かと思いきや、
「うわ、小説あるやん」
マジで？　正直に言うて意外やわ。
背表紙は、
「『夕闇の論理』……やっぱりそっちか」

夕闇の論理。夏子が最近ハマってる漫画。そのノベルか。
「お」
よく見れば……神話の本が一冊ある。
漫画を買った時、カモフラージュで買ったか？
しかし、コイツがレジで漫画を買うのを恥ずかしがるタマか？
いや、違うな。貰ったな、これは。

「おい。水置いとくぞ」
「ありがと」
頭を押さえて一口飲む。
「じゃ、帰るから。何かあったら電話して」
「……ありがと」
手を振って答える夏子。
「大人しくしてろよ」
そう言って、事務所を出て行く。

通りかかったレスト。
とりあえず、夏子の事を言っとくか。
「あれ？　一人？」
入ると衣里がカウンターに座っていた。
「いらっしゃいませー」
しのぶはコップを磨いている。
衣里の隣に座って、
「ミックスジュース。あのさ、夏子の事だけど」
「何？」

「二人とも、二日酔いですか」
「そ。だから夏子の事をよろしく」
ストローを銜える。
「あ～、千早さんは千歳君の介抱があるから」

「嫌なんやけど。一応、家主やし」
「じゃ、ちょっと見て来るから」
衣里が席を立つ。
「いってらっしゃい」
しのぶの声が響く。

レストで夏子の事を頼んでからの帰り道。
「誰かっ！！」
後からの叫び声。
振り返ると、男が走ってくる。
「どけっ！！」
の声に腹が立ち、足を出す。
ものの見事にスッ転ぶ男。
「何回転するんや？」
笑いを堪える声で話しかける。
「こ、この」
相当の痛みのはず。
立ち上がろうにも間接が痛くて思う様に動かない。
「ん？　何」
目の前に座り込む。
「その男は私の鞄を」
転がった時に飛んだ鞄を拾って、
「これですか？」
後から来た男に渡す。
「あ。あぁ」
大事そうに鞄を抱えている。
「くそっ」
去っていくひったくり。
「どうします？　捕まえますか？」
被害者の男に尋ねるが、

「鞄も戻ってきたし、それで。では、ありがとうございました」
「あ、そうですか」
被害者がそう言うなら。
ここで、私が追いかけて捕まえても被害者がいないと意味無いしな。

懐かしい公園前。
初めてこの街に来た時に夏子に会った場所。
なかに入ってその時のベンチに座る。
「うわ～。腹減った～」
その時の思い出が空腹を思い出させる。
レストで何か食ってきたら良かったな。
戻るのも何やしな。と言うか面倒くさい。
どうしたものか。
空を仰ぐ。
眩しく照らす太陽を手で翳して、流れる雲を見る。
「あっつ～」
そよぐ風が心地良い。
「お。千早？」
懐かしい声。
「よう」
視線を前に向けると、懐かしい顔。
「久しぶり」
「この前は千歳が世話になったそうで」
「あははは」
豪快に笑う男。名前は日高宗士。腐れ縁のアホ。
「で、何？　千歳に用か？」
「いや。ちょっと仕事で来ただけや。お前見つけのは偶然」
「ふーん。何？」
答えないとは思うが、興味本位で聞いてしまう。
「言える訳無いやろ」

やっぱり、答えない。
「で、何？」
「何て……久しぶりに会ったのに」
えーと。……最後に会ったのは。
「五年位前か」
「そうやなー」
懐かしいな。
隣に座る宗士。
「隣に座んなや」

「あの時の私は、容姿端麗、才色兼備の」
「ちょ、ちょちょちょちょっ」
「何？」
「誰が？」
「何が？」
「え。容姿端麗、才色兼備って誰？」
「今、喋ってたのは私やろ？」
「え！？　お前！？」
「何！？　そのリアクションは！？　失っ礼な」
「え……だって。お前、自分の事解ってる？」
「当然やろ」
首を振る宗士。
「残念。千早。皆お前の事、鬼っ子って呼んでたんやぞ」
「え？　なんで？」
意外や。こんなに可愛らしいのに。
「お前……子供の頃の大会の時、相手の女の子、血塗れにさせた事あったやろ」
記憶を辿ると……やった覚えがある。
「……無い。それは私や無い」
「いや。お前や間違いなく。で、お前その時に半笑いやったやん」

「笑ってないて」
「やった事は認めたな」
しまった。こんなアホに引っ掛けられるなんて。
「それからお前の事は鬼っ子って呼ばれたんや」
「絶対嘘や。お前が言うてるだけやろ」
「違うって。藤崎とか山原も言うてたし」
「三バカやん」
「誰が三バカや！」
「お前かてな、結構言われてたぞ」
「何をアホな事を。そんな事無いて」
「知らんだけやて」
「絶対にそんな事無い。おい。知ってるか？　俺と目が合ったら女は皆、目を逸らしたぞ。好意以外にそんな事するか？」
「アホが夢見てるわ～。愚かやな。宗士」
「何？　その笑い」
「お前、変態って言われたんやぞ」
「絶っっ対にそんな事無い」
「知らんだけや」
「会う女、皆目を逸らしたんやぞ？　そんな俺が変態などと呼ばれる訳が」
「あるんやて」
「何や？　その理由は？」
「お前、大会の時女子更衣室除いたやろ？」
「……覗いて無いよ」
「何？　その間は」
「覗いてないですよ」
「喋り方変わったな」
「変わってないですよ」
「アホみたいな喋り方やめぇ。で、その時からお前は変態って呼ばれてるんや」

「おい。否定してるやろ」
「否定も何も、それは事実やし」
「だから覗いてないて」
「その時私が穿いてたパンツの色は？」
「え？　金色？」
「ほらぁ！！」
「何でやて。冗談やん。てか、金色のパンツあるんか？」
「あるて。持ってるし」
「どんな趣味や？　お前は」
「間違いなく覗いていたと言う事実は、今証明された訳で」
「待てて。他に誰が言うてるんや」
「そんなん、お前」
「ほら。誰もいんのやろ」
「その逆でいすぎて誰から言うてええのか」
「じゃ、十人」
「白鳥に美咲、有里、伊藤、渡辺、晶と松嶋に西野と石田、最後に望」
　十人を指折り数える。
隣には、うな垂れた宗士がいた。
「？　どうした？」
「そんなに……スラスラ出るとは」
「ショックやった？」
　……
返事が無い。
どうやら本気でショックを受けている様だ。
「思い当たるフシがな。あるんや」
「あ。やっぱり？」
「中学の時、門脇に告白した時、本気で嫌そうな顔されたし」
「あっはっはっはっはっは」
「笑うなや。俺は本気やったんやぞ」

「アホやな～。門脇はそんなん一番嫌ってるのに」
「しょうが無いやろ。年頃やぞ！？」
「え。今、私にキレられても。そうか～。門脇に行ったか～。チョイスを間違えたな」
「え！？」
ガバッと顔が上がる。
「中学の時は美咲に行っといたら」
「マジで！？」
もっと面白かったのに。とは言わない。
ちなみに、門脇に告白した事も当時すぐに聞いた。
その時の門脇は本気で嫌がっていた。
「確か、そん時、門脇が好きやったのは青木やったと」
「……青木かぁ」
「おい、声が恐いぞ」
「……何か負けた気がするのは何でやろ？」
「……さぁ？」

「さて、アホと喋ってるとアホがうつるし帰るわ」
「誰がアホじゃ。誰が！」
結構話しこんだな。このアホと。
コイツもかなりの暇人やな。
ホンマは仕事無いんちゃうんか？
ま、私にはどうでもええ事やけど。
「俺も帰ろかな」
振り返る事もなく公園から立ち去る。
千歳のヤツは大丈夫やろか。
いつもより少し速く歩き出す。

任務

衣里さんが夏子さんの介抱に行ってから、
「いらっしゃいませー」
お客が来店。
「やぁ。元気そうで何よりだ」
「何かありました？」
席に案内して、注文を取りながら話し掛ける。
「結構似合ってるね」
「そうですか？」
自分の格好を見る。
自分ではよく分からないが、この人がそう言うならそうなんだろう。
メニューを見ながら、
「どうしたんですか？　『りっつん』が来るなんて」
りっつん。私が所属する『キューゼ』の幹部。とりあえずは私の直属の上司。
とぼけた呼び名だが戦闘能力はキューゼ一と言われている。
本名は知らない。最初に会った時からりっつんと呼んでいる。と言うかそう呼べと命令された。
「任務が入った。詳しい事は仕事が終わったら連絡してくれ。ミックスジュース」
「了解」
相変わらず突然雰囲気が変わる。
「スマイルを忘れてる」
にこやかな笑顔のりっつん。
……
「少々お待ち下さい」
自分なりににっこり笑う。

「じゃ、お先でーす」
いつも通りに振舞う。
「お疲れー」
夏子さんの介抱から帰ってきた衣里さんに挨拶して店を出る。
店を出たらキューゼの一員に戻る。
メールでりっつんに連絡を取り、公園で待ち合わせ。

「早速だけど、ターゲットは」
一枚の写真。
「前回の失敗を取り戻すチャンスだ」
「失敗って……あれはりっつんも彼女達の事を利用したじゃないですか」
初めて千歳君に会った夜の事。
森の中で彼女達を見て、その行動を利用して任務を失敗させた。
後からりっつんにその事を問いただすと、詳しい事は言わなかったが何か裏があったらしい。『上』で何があるのかは私は知らないし、知る事も無いだろう。
私は私の任務をこなすだけ。
「で、彼の情報は？」
「名前は『イフォード＝ジョイルバディ』職業は『ライタウス連邦』系企業『トレイズ』の専務」
トレイズは私達と敵対している組織『永遠の王』に協力している。
「彼の暗殺が今回の任務だ」
「了解」
感情の無い言葉。
どんなに言われても慣れない感じに心がざわつく。
「私一人ですか？」
「いや、あの代理屋にも動いて貰おうかな」
「あ。無理です。二人とも二日酔いだそうです」
「あ……そう」

「アテにしてたんですか」
「ディリストラム卿の時の彼女達は僕の予想を遥に越える働きをしてくれたし」
「まぁ……そうですけど」
あの時はりっつんも相手の狙撃手を狙っていたと後で聞かされた。
「だから、上に言って彼等の報酬も取ってきたのに」
ポケットから札束がドン。と出てきた。
「あまりこっちに関わらせるのも」
「向こうの目をそっちに向ける事ができれば後は僕達でやれる」
僕達？
「え？　他にも任務に入るんですか？」
「僕」
「あ、……そうですか」
「だから、彼女達に動いて欲しかったんだけど。まぁ、無理ならしょうがないな」
「相手の人数は？」
「昨日『永遠の王』の会合があったらしい。現在はその帰り道の途中だろう。そこを襲う。護衛が何人かいるだろうが、そうだな多くて……五人かな」
「それなら二人でどうにかなりますね」
「余裕はいいが、油断はするなよ」
「了解」

人気の無い深夜の国道。
綺麗に並んだ街灯。人工の灯りが幻想的だ。
「そろそろかな」
運転席のりっつんが時間を確認する。
直後に一台の車が通りかかる。それを見届けてから、
「じゃ、覚悟はいい？」
私の答えを待つ間の無く、車を発進させる。

黒塗りの車を追い越し、前を塞ぐ。
私は助手席から飛び出して、シールドを射出して相手の車のフロントガラスを割る。
ひび割れるガラス。
どっちが先……
左！
巻き戻ったシールドを再び射出。
ドアのガラスごと相手を吹っ飛ばす。
シールドを巻き戻す間に、運転席、後部座席から男が降りてくる。
街灯が照らす男達の手には銃と、
「来てくれて良かったよ。退屈してたんだ。何か起こらないかって考えてたんだ」
剣士がいた。
「そう考えてた事を後悔させてあげるよ」
光りが駆け抜ける。
「ターゲットを」
いつも通りのりっつんの声。
「了解」
りっつんの援護を受けて、剣士をやり過ごす。
「あ」
「君の相手は僕だ」
開いたドアのガラスに映ったのは、剣士に銃を突きつけているりっつんの姿。

これで二人。
逃げたターゲットを追いかける。残る護衛は後一人。
「何処へ」
小さな物音に反応する。
左手を振り上げる。

弾かれる左手。
「っっっ」
感覚がぼやけて力が入らない。痺れた左手では攻撃出来ない。
「どこの組織の」
「答えると思う？」
感覚が戻るのを待ってる時間は無い。
「そうだな。興味が無い」
大振りな攻撃。
街灯から外れた路地裏。相手のレーザーだけが光っている。
その感情から……剣……かな。
まぁ、何でもいいか。これだけ大振りなら少し感覚が戻れば問題無い。
ここにいるのは私とこの男。
ターゲットは何処に行った？　仲間を呼ばれると面倒になるな。
もし呼ばれたのなら、合流する前に完了させないと。
よし。ちょっと感覚が戻った。
「ちょろちょろと！」
苛立った男の攻撃を避け、左手のレーザーを起動する。

ターゲットは何処まで逃げたのか。
足音に気をつけて後を追う。
応援を呼ばれてたら厄介だな。
路地を抜けて、『ルヒ川』に出る。そこでターゲット発見。
「私を殺せばどうなるか……分かるだろう？」
震える声で虚勢を張る。
立場のある者ほどそこにしがみつく。
敵対している者には無意味と理解しているのか？
……まぁ、そんな事はどうでもいい。
「任務の為」
狙いを定める。怯える男の顔が闇に浮かぶ。

「……恨まないで」
到底無理な私の願い。
目を閉じ、開く。同時にシールドを射出。

「誰？」
「任務の邪魔をするのがアンタの仲間に居るのか？」
弾かれたシールド。
巻き戻して、弾いた相手に備える。
ゆっくりと歩いて、シールドを弾いたモノを引き抜いて、
「さて、相手が女なら本気を出すわけにはイカンな」
構える。
長い柄の先に片刃に突起。尖端にも槍の穂先がある。
ハルバート。今、レーザーが起動しているのは片刃だけ。
状況に応じて使い分けるのか。
現状の分析はこれぐらいにして置こう。
「そう」
余裕を見せているのなら、その内にやらせて貰う。
狙いはターゲット。ただ一人。
幸い、応援に来たのも一人。任務を優先する。
その後は直ちにこの場から離脱する。

距離を取り、シールドでの牽制。
体勢は崩れないか。
それなら、一足飛びで間合いを詰める。
風を切り振り払われるハルバート。
まともに受ける事は無い。
軌道を読み、ギリギリで避ける。
目の前を穂先が通り抜ける。
同時に距離を詰めるが、相手も同じ様に下がる。
長柄を振り回しているのに、バランスが崩れないのか？

「いい目をしてる。ちょっとナメてたかな」
「何をっ！」
止まらず前に出る。
「こういう使い方もあるんだぜ」
突き出されるハルバートの穂先のレーザーが切れる。
バッテリー切れ？　どうでもいいか。今は攻めるのみ。
「え」
後からの衝撃。足が前に引っ張られる。

「くぅっ」
私の予定が崩された。
「どうした？」
片刃に足を引っ掛けられそうになり、強引に体勢を変えたのでバランスを崩して尻餅をついた格好の私。
見上げると余裕の表情の男。その後に隠れているターゲットが元気に叫ぶ。
「捕まえろ！　捕らえてどこの組織か喋らせろ！」
「……了解」
下品な笑い声を含んだ声に鳥肌が立つ。
ちょっとでも想像しちゃった自分が嫌になる。
「来い」
呆れた表情の男が私を誘う。
どうやら男の戦意も無くなった様だ。
「ふー」
立ち上がって目を閉じ、息を吐いて目の前の男に意識を集中させる。
……
少し間を開けて……よし！
ダン！
地を蹴り、間合いを詰める。片刃から穂先にレーザーが切り替わる。

突き出される穂先を見極め……避ける。
柄の動きに注意しつつ、右手を突き上げる。
　この距離なら打撃だけ。
右手を払うハルバート。
　タイミングを計って、腕を絡める。それでハルバートを封じる。
「！」
　驚く男の表情。
至近距離なら私の方が有利だろう。
レーザーを起動したシールドでの攻撃。
「ゴメン」
「気にするな。ここで死ぬ気は無い」
　レーザーが頬を斬る。
「高くつくぞ？」
　お腹に衝撃。
「くふ……っ」
「手は離さないのか？　流石って言うべきか？」
　力が入らない手を離される。
「捕まえろ！」
「捕まえても無意味ですよ」
「それは私が決める事だ」
　力が入らない。起き上がれない。
このままじゃ。……こんな下品な男に捕まる位なら。
　左手のレーザーを起動して、
「止めとけ。これ以上は無理だ」
　狙いはアンタじゃない。
左手を私の首に向ける。

　首に当たる直前、左腕に熱い痛み。
「僕が居る事を忘れてませんか？」
　りっつんが後から飛び出して、私の左腕を撃ち抜く。

「仲間割れ？　違うなっ！」
「状況分析している暇。あるんですか？」
「無いな！」
私と闘っていた時とはまったく違う威圧感。
振り上げるハルバートのスピードが段違いだ。
「でしょう？」
余裕のりっつん。
銃を構え、飛び出した勢いのまま突っ込んで行く。
ハルバートの射程ギリギリの位置にりっつんが入る。
その瞬間だけ、りっつんの足が止まる。そして、
振り下ろされたハルバートの柄の上を走っていく。
「なっ！」
驚く男。
「邪魔」
一言。男を蹴飛ばし、着地。
銃口はターゲットの額に向けられている。
「任務完了」
冷たい宣告。
躊躇い無く指先が動いた。

待ち合わせた公園のベンチに座り、
「大丈夫？」
「自分で撃ったんじゃ無いですか？」
「ま、それは言わないって事で」
私の腕に包帯を巻き終わる。
「じゃ、お大事に」
ぽん、と腕を叩いて帰っていくりっつん。
一人残される。
今回の任務で、私の力がどの程度なのか情けない考えと共に痛感した。

あの男にもりっつんにも及ばない自分。
「はぁ」
がっくりと頭を落として、ため息を一つ。
……泣くな。ばか。
ぎゅっと目を閉じて、
もっと強くならないと。
左腕の傷を教訓に明日から頑張ろう。

探求者2

「マジですか？」
「大マジ」
店長の思いつきが始まった。
「でも、仕事は？」
「二、三日なら大丈夫。ほら、行くよ」
ボストンバッグを抱えた店長が、俺をグイグイと押していく。
「二、三日もかかるんですか？」
押されて、事務所から追い出される。
「……さぁ？」
その悠然とした微笑みが恐いんですけど。

「で、何処行くんですか？」
「とりあえず『ウェストリダー』」
「何処ですか？　そこ」
「無知だな～。千歳は」
「ウェストリダーは『フォーイニア＝シティ』にある歴史と神秘の遺跡じゃない」
「パンフの受け売りですよね」
「吸収した知識は全て私のものよ」
ああ言えば、こう言う。素直に認める事は出来ないのか？

途中で運転を交代しつつ、夜に到着。
「さて、何処に泊まろうか？」
「行き当たりばったりですね」
相変わらず。
「さっさと泊まるトコを探せ。じゃないと車で一泊になるぞ」
「それは嫌ですね」

「ならばっ！」
この状況でそんなに意気込むのなら最初からきちんと段取りを決めておいて下さい。

うろうろと車を走らせる事、一時間。
ようやく見つけた。一軒のホテル。
チェックインを済ませて、部屋に移動。
「私と一緒の部屋になった事を誉れと思うが良い。じゃ、私は風呂に入るから」
「了解です」
残念ながら、同じ部屋。嬉しい様な、そうでもない様な。
バッグを持ってバスルームへ向う店長。
「あ、千歳」
「何ですか？」
「コレ。読んどけ」
ゴソゴソとバッグを探して、投げられる一冊のぶ厚い本。
表紙には『エデン神話体系』
一晩では読み切れるぶ厚さじゃない。
「ウェストリダーの知識を入れとけよ。上司命令だから」
パタン、ガチャ。という音と共に店長が見えなくなる。
「ウェストリダー……えっと」
目次でウェストリダーを探して、
「あった……ページは」
五十……、
「えっと、ウェストリダー戦役」
地底に追いやられた『創造するもの』の侵攻に気付いたエデンの神々は人類に知恵と力を与えて、迎え撃たせた。
その中心となったのが、後に『兵聖』と呼ばれた『キカ』と『火乃皇子　ロ＝ホウ』
キカは人間で、ロ＝ホウは『火を識るもの』が使わした神様。

『火を識るもの』は「火、知識、鍛冶」を司っている。
ちなみに、『火を識るもの』と人類との間に生まれた所属は『鬼人』と呼ばれている。
さて、対する侵攻してきた地底軍は、『殲滅者　エンヴェリス』
『軍神　ネーテレス』
二人とも『創造するもの』が産み出した神の力を持つ者。
戦争が始まった直後、神々は突然の侵攻に対して対応出来ずにいた。
エンヴェリス、ネーテレスの圧倒的な力の前に無力な人類。
フォーイニアの住人、キカは侵攻に対してフォーイニアの人達と共に凌いでいたが、次第に戦局は悪化していった。
『火を識るもの』が最初に救援に向った。その援軍の先鋒がロ＝ホウ。
ロ＝ホウは人であるキカを見下し、ロ＝ホウは援軍単独で地底軍と闘うが、力が互角では数的劣っている為、不利になっていく。
ネーテレスの策略に嵌り、追い詰められたロ＝ホウを助けたのが、キカ達だった。
ロ＝ホウは助けてくれた事に感謝し、見下していた事を謝った。
その後、キカとロ＝ホウが協力し、キカの知とロ＝ホウの武で数に勝る地底軍と対等に闘っていった。
その後、長い膠着が続いたが、キカの挑発に乗ったエンヴェリスがロ＝ホウに討たれる。逆転する戦力差。しかし、追い詰めるには足りなかった。
キカは侵攻軍に対し追撃をしない事を条件に即時撤退を要求する。
ネーテレスはこれ以上、地上での戦闘を続ける事は出来ないと判断し、それを受け入れた。

「おい、さっさと風呂に入れ」
「あ！　いつの間に上がったんですか？」
「十分位前」

「あ。じゃ」
読み耽っていたのか……店長が横に居た事にも気付かなかった。
ゆったりと浸かりながら天井を見上げる。
ぼんやりと見える天井、さっき読んだ神話の世界が広がっていく。
キカとロ＝ホウの対立と友情。ロ＝ホウとエンヴェリスとの闘い。
キカとネーテレスの知恵比べ。
何を思い、何を考え、どう闘ったのか。
顔も何も見えない程に濃い霧に覆われた俺の頭の中で、彼等は確かに闘っていた。
魅せられる。とはこういう事なのだろうか。
……
ベッド脇の小さな明かりを頼りにエデン神話体系を読み進める。

「うわ～」
ウェストリダー戦役で、エデン側の防衛線『ウォンルラム要塞』
若干の寝不足ぎみな俺の思考回路が一気に覚めた。
昨日読んだ神話が妙に現実的に感じられる。
「凄いですね」
「一言では語れないね」
手すりから身を乗り出して、風を感じる店長。
「こっから何を見たんだろう？　キカは！」
店長の声に回りの人達がこっちを見る。
「どう思う！？　千歳！」
「名前を言わないで下さいよ」
キラキラした目と目が合う。
「さぁ、どうやって生き延びるか。とかじゃないですか？」
「そうかもしれない。でも私は、自分の力が神に通用するのか、わ

くわくしてたと思う」
店長らしい言葉だ。
「自分の知恵がどこまで通用するのか？　世界に対して自分はやれるのか？　そう考えたって不思議じゃないでしょ」
「まぁ、通用しなきゃ生き残れない訳で」
真っ直ぐに目を見つめる店長。
店長には攻め寄せる軍勢が見えているのかもしれない。
「……で、そこからキカは……」
近くでガイドの説明が入る。観光客の一団が来ている。
「……千歳。千歳」
「何で小声なんですか？」
「お前もだろ。着いていこう」
「誰にですか？」
クイクイと指差したのは、観光客の一団。
「何でですか？」
「ガイドの説明が聞きたい」
セコ……俺の意思など無視して、一団の最後尾にくっついている店長。
仕方ないな……そう自分に言い訳して俺もついて行く。

「火乃皇子、ロ＝ホウは……」
ガイドの説明が続く中、この人は、
「今、ピコピコって言わなかった？」
ガイドが聞いていないか？　ヒヤヒヤしている俺。
「言って無いですよ。ちゃんと，ひのみこ，って言ってましたよ」
「嘘～。マジで？　私は，ピコピコ，って聞こえたけど」
近くのツアー客がクスクス笑っている。

ツアー客の後にくっついていたら、駐車場に来てしまった。
「どうするんですか？　帰ります？」

「うーん。どうしようか」
取り出したのは、ぶ厚い本。
何で、このタイミングで？　訝しがっていると、
「よし。次は『カーシュティス』に行こう」
「マジですか？」
「マジです。ほら、行くぞ」
車に乗り込む店長。
フォーイニアからカーシュティスまで、ざっと二時間。
本気で帰りたいが、
「早く乗れ」
助手席のドアが開く。
俺の意思は関係なく事が進んで行く。

「じゃ、予習しとくように」
走り出した車。信号待ちの時に神話体系を渡される。
「カーシュティスですか」
「そ」
走り出す車。
「一時間で読む様に」
自分も読む気か。という事は殆ど知らないんじゃ……単純にカーシュティスと言う地名が目に止まっただけで、行くって言い出したのか。
「はぁ」
「酔ったの？」
「あ。いえ」
俺のため息が聞こえたのか。
酔ったんじゃなくて、思いつきの行動に疲れ始めているんですけど。
とは、口が裂けても言えない。

途中、サービスエリアで運転を交代して、

「ほ〜。この『シーウンリクム』って『ユ＝ナ』と互角だって？知ってた？」
「さっき読みましたから」
俺の返事を聞いていない。
「お。ロ＝ホウに勝ったって」
「その後に火と水は同盟を組んだんですよね」
……
無視された。……横目で見ると、こっちを見ていた。
「あのさ。まだそこまで読んで無いし。言わないで欲しいんだけど」
「……すいません」
……本気で恐かった。あんな目、今まで見た事無い。
ちなみに、『シーウンリクム』は『水に漂うもの』の眷属。槍の名手。思慮深く慎重な性格だったらしい。
『ユ＝ナ』は『火を識るもの』の娘で、知恵と勝利を司どる女神。
『燎原ノ焔』と言う剣を持ち、『大地を育むもの』と闘った女神。
「ほ〜。千歳君の言った通りだ〜」
抑揚の無い平たいお声。
「ほ〜。凄いね〜。千歳君は何でも知ってるな〜」
「ごめんなさい」
「お腹空いた」
「はい。ご馳走させて貰います」

目的地、カーシュティスに到着。
冷ややかな空気に耐えかね食事を奢る。
「さて、と」
どこからか取り出したカーシュティスの地図。
「いつの間に買ったんですか？」
「えっと……『リトベル』は……何処かな〜……あ。すいません。リトベルって何処ですか？」
探せなかったのか、店員を呼んで聞いている。

「リトベルですか？　それなら、ここから……」

シーウンリクムの伝説の発祥の地。リトベル。木と水の公園になっていた。

大きな公園の中央にシーウンリクムの像が建っている。

「ほほほ。凄いね」

「何でそんな笑い方なんですか？」

槍を手に真っ直ぐに前を見つめるシーウンリクム。

表情は敵を前に大胆不敵に微笑んでいる様にも、仲間の冗談に嬉しそうに微笑んでいる様にも見える。

「うーん。もっとゴツイ印象があったけど、結構優男って感じだね」

「そうですか。俺は結構印象通りですけど」

「そうか～。伝説だと『ウォブムス』って巨人を一突きで倒したってあったし」

「それは、力任せに突いたんじゃなくて、技とスピードで突いたんじゃないですか」

「いや～、違うだろ。強引に突き出したって感じだけど」

「そうですか？　技巧派って俺は感じましたけど」

「え～。体勢を崩されながらも力で持って行ったって私は読み取ったけど」

同じ本を読んだのに、受けた印象は全く違っている。

キョロキョロと辺りを見渡す店長。

「どうかしました？」

「うーん。ここにはガイドは居ないのか」

儚い期待ですね。店長。

学生の団体さんはいるが、来ているのはジャージ。

近くの学校の運動部だろう。俺達より詳しい事は知っているかも知れないが、今は間違いなく邪魔だろう。

店長の気性から行くかと思われたが、思い止まってくれた。

気付かれない様に、ほっとするが、

「よし、学校に行こう」
俺の想像を超えた事を言い出した。
「ねぇ。ちょっと！」
部活中の学生さんに話しかけに行く

店長の思いつきに戸惑う時間が短くなっていく自分がいる。
「あ。あそこそうじゃないですか」
見えてきた学校。
「結構大きいな」
店長の言う通り、大きな学校。
「……いいんですか？　入っても」
「入らないと、駐禁だろ？」
そうだけど……目の前を『関係者以外立入禁止』の看板が通り過ぎる。

駐車場から正面玄関までの間、すれ違う学生がチラチラと興味深そうに見ていた。
ちょっとした有名人の気持ちを体感しつつ、正面玄関に到着。
「すいませーん」
窓をノックして教師を呼んで、事情を説明する。
「それなら、ここよりも図書館の方がいいんじゃないですか？」
当然と言えば当然の回答。
「しかし、ここは学び舎ですよね？」
「そうですが……神話に関する資料なら、なおさら図書館とかの方が」
食い下がる店長を、やんわり断る教師。
何度かのやり取りの後、
「はぁ。分かりました」
「図書館ならここから」
図書館の場所を説明しようとした教師に対して一言。

「結構です。自分で調べる位なら知り合いの詳しい人に聞きます」
毅然と言い放つが、その言葉はこの旅の意義を否定するんじゃ…
…

私にお任せ

いつもの日課、レストでのお茶の時間。
「しのぶっ！　その手は！？」
「ちょっと……怪我しちゃって」
下をだして笑う叶さん。
左腕の包帯が痛々しいが笑顔はいつも通りだ。
「しのぶー。七番テーブル拭いてきてー」
「あ。はい」
衣里の声に答える叶さん。
「怪我人に普通に仕事させてるよ。鬼だな、衣里は」
「何か言いましたー？」
店長の小声に反応する地獄耳。
「何でも無いよ」
テーブルにお冷の水滴で、『凄いな、衣里は』と書いた店長。
頷く俺。
その様子に何かを感じ取った衣里が近寄ってくる。
「何？」
お絞りで書いた言葉を消して、
「何かしてませんでした？　今」
笑顔の衣里。
「何もして無いよ。なぁ」
してました。と答えるバカはいないだろう。
「ホントに？」
疑いの目だが顔は笑ってる。
恐くなってきた。

「しかし、休んだら良いのに」
「そうも言ってられないじゃないですか？」

「怪我してるのに」
そう言って何か考え込む店長。
そんな店長を見て、目を合わせる俺達。
しばらくして、だん、と立ち上がり、
「よし。私がしのぶに変わりに今日一日働こう！！」
突拍子も無い事を言い出した。

「いらっしゃいませー」
……
「お一人様ですか？　ではこちらのお席にどうぞ～」
……
言い出したら聞かない店長の言葉通りに話が進んでいった。
「……そこそこ出来てるけど」
衣里がそう呟く。
「まぁ、大丈夫だろう」
レストの店長はそう言うが、そう思うのは早計だ、と皆感じてる。
「オーダー入りまーす」
ゴキゲンなウチの店長。
「千歳。帰って店番してろ」
「はい」
このまま店長を置いて帰っても良いのか、悩む。
店長以外、つまりレストの面々は「連れて帰ってくれ」と目で俺に訴えるが、俺にそんな力がある訳が無い。
「じゃ、後は」
「お。任せとけ」
どん、と胸を叩くウチの店長。
反対に小さいため息が聞こえた。

「さて、と。お客は来ないの？」
「昼過ぎたからな」

確かランチタイムの忙しさは凄かった。初心者の私には荷がほんの少しだけ重かった。そこは機転を効かして乗り切ったのは私だからか。
「千早も暇なら手伝えよ」
ランチタイム過ぎに顔を出した千早。
窓際に座り、のんびりと遅めの昼を取っている千早に声を掛ける。
「え、無理。忙しいし」
「そんなにのんびりしていて？」
「掃除とか洗濯もあるし、買い物のせんと」
「あ～。そうか」
なら、無理か。
「それなら、明日は早く来て一緒にやろうよ」
「え、だから、する事あるし」
「明日はウチ休みだから。千歳も呼んで」
「え？　姉弟で？」
笑う千早。
「おい。勝手にバイトを増やすな」
「そうやぞ」
む～。

「夏子。上がっていいぞ」
「え？　もう？」
時計を見ると、午後七時。
いつの間にか外も暗くなっていた。
「いつの間に」
「時間はお前の意思関係無く進んで行くぞ」
とは言っても、何か実感がわかないと言うか。
「ま、いいや。どうする？　明日も来る？」
「しのぶの怪我次第だな」
「じゃ、来るわ。しのぶは八時からでしょ」

「そうですけど」
「じゃ、また明日。お疲れー」
「お疲れー」
衣里の声に手を振って奥に行く。
ふぅ。慣れない仕事は疲れるけど、面白いな。
やる事、覚える事があると仕事は面白い。そう感じるのは私だけかな。
まぁ、どおうでもいいか。
とりあえず、お腹も空いたし。
「じゃ、とりあえず、いつもの」
そう言っていつもの席に座る。

騎士団

いつも通りの朝。
「千歳。後はよろしく」
「はいはい」
レストでの『バイト』が一週間続いている。
叶さんの怪我はすっかり治ったので意味は無いのだが、本人は止めようとしない。
まぁ、その内飽きるだろうと言うのが俺達全員の意見だ。
その間に来た仕事は俺が全て行っている。
当然、店長に話をして許可を受けたものしかしてない。
昨日解決した案件のレポートをパソコンに打ち込んでいると、ノックが聞こえた。
「どうぞ」
ドアを開けると、一人の男が立っていた。

「『室川浩太』さん。でよろしいですか？」
「はい」
目の前に座っている依頼人。
年は俺より上。細身だが華奢という印象は受けない。
「で、依頼と言うのは」
「実は……」

「何で『騎士団』が私達に依頼してくるの？」
「さぁ？　そこまでは言わなかったですけど」
レストから戻ってきた店長に依頼の事を伝える。
「それに警察のメンツもあるでしょ。後々警察に睨まれるのは嫌だし」
それは俺も嫌。

「『盗賊団の摘発』　……面白そうだけど」
「裏がありそうですね」
「千歳がそう言うのも珍しいね」
茶化された雰囲気がするが、気にしないで置こう。
「ま、とりあえず依頼人に会って見よう。それから受けるかどうか判断しよう」

依頼人が指定した場所は『エンイスン通り』にあるビルの一室。
「始めまして。椎名代理店の椎名と言います」
「始めまして。室川浩太です」
「早速ですが、依頼の事をお聞きしたいのですが」
室川依頼人は騎士団所属の騎士。騎士団の任務『永遠の王』と呼ばれる地下組織の摘発チームの現場指揮官。といっても幾つかのチームがあるらしいので小隊長と言ったところか。
「なぜ、私達なんですか？」
直球を投げる店長。
「ある方達からの推薦でして」
「ある方達とは？　騎士団やそれに近い所にいる人に面識はありませんが」
疑っている店長の声。
それに対してどう答えたものかと、苦笑しつつも思案顔の依頼人。
「えっとですね」
「答えられないんですか？　では」
立ち上がる店長。
すなわち、受けないと言う事だ。
「ちょ、ちょっと待って下さい。分かりました」
座ろうとしない店長。
見下ろされた依頼人は、ちょっと気圧されつつも、
「連絡を取ってみます」
ケータイを取り出し、どこかに連絡。

「あの、代わってくれって」
ケータイを店長に渡し、
「もしもし」
警戒心まる出しの声。
「……アンタだったの」
警戒心に敵対心が加わった様だ。
誰と話してるのかが気になる。
「もういいや。はい」
店長が電話を返そうとする時に電話から大きな声が聞こえた。
「ちょちょちょちょちょちょ！！！」
え……宗士君？
「うるさい、バカ。はい、もう切っていいですか？」
答えを待つ事無く切ってしまった。
「……あなた達を推薦した方は」
「分かりました。このバカは強いらしいから一人でも大丈夫ですよ」
渡そうとした瞬間に、ケータイがなる。
「あの～。日高君からですけど」
「あ。出ていいですよ」
「もしもし……はい、居ますけど……はい。あの代わってくれって」
「え？　俺ですか？」
「はい。千歳に代われって」
「さっさと切れよ」
「もしもし」
「千歳？　この依頼受けてくれる様にあの女に言うてくれんか？
あのアホはこっちの話を聞こうとせんし、話にならん」
口に指を当てた店長から指でケータイを貸せと指示が来た。
その通りに、黙ってケータイを渡す。
「あのアホはこの前、俺に負けた事を根に持ってるんやろ？　だから受けんのやろ。つまらん事をいつまでもネチネチと……ホンマに。なぁ？　千歳？　あ、そや。千歳、そんなアホのトコ止めて俺と一

緒に」
「悪かったわね～。こんなアホで」
何時も通りの声。しかし、込められた‘想い’の所為で恐怖を感じる。
宗士君の驚いた顔が目に浮かぶ。
「千歳は私を手伝うよね？」
疑問系だが俺に選択氏は無い。
背中に流れる冷や汗を感じながら、頷く。

「じゃ、そう言う事で」
宗士君の電話ですっかり気を悪くした店長。
「ちょちょちょちょちょちょっ！！」
依頼人が店長とドアの前に立ちはだかる。
「もう一人。もう一人。居ますので、そちらに連絡を取りますので。もうちょっと待って下さい」
……。
「もうしばらく……あ、もしもし」
ドアの前で立ち塞がる店長を気にしつつも電話している。
「あ。代わってくれって」
「……もしもし」
不機嫌な店長。誰かは知らないが店長を知っているのならどんな心理なのか一発で分かるだろう。
「アンタだったの。……うん。……それなら知ってるでしょ？　私達は一般人なの」
誰だ？　声も喋り方も若干和らいだ。
「……今、何処に居るの？　分かった、そっちに行って直接話そう。何か書くものは。千歳。メモ」
ケータイを取り出し、メモの用意をする。
「良いですよ」
「『レーナール』地区の『ハーサディビル』の三階。分かった」

ケータイを依頼人に返して、
「行くよ。千歳」
「はい」
依頼人を残して、部屋を出る。

「……良いんですか？　タクシーに乗って」
「大丈夫。領収書はちゃんと貰うから」
いや、そうじゃなくて。ちゃんと落とせるんですか？　ちゃんと依頼も受けてないのに。

タクシーに乗る事、十分。
「あ。領収書下さい」
領収書を切ってもらってタクシーを降りる。
降りた直後、
「あ」
思わず気付いて声を上げた。
ビルの前に立っていたのは、いつかの騎士。
服装は前と違い普段着。以前の凛とした雰囲気とは違い……相応の雰囲気が……良い。
俺と同時に頭を下げる。
「早速で悪いけど、詳しい事聞きたいんだけど」
店長に機先を制された騎士。挨拶しようとして止まる。
中途半端なお辞儀のまま、
「どうぞ、こちらへ」
お辞儀をしそこねて顔が若干赤い顔で、凛とした雰囲気を纏いながらビルの中に入っていく。

「どうぞ」
案内された部屋。
デスクトップが五台、ノートパソコンが三台ある。

「いいなー。一台欲しいなー」
しげしげとパソコンを眺めている。
「依頼を受けてくだされば、報酬とは別に渡しますが」
部屋の置くからの声。
「雪原君。彼女達か」
「はい。大佐」
……大佐？　見た目は四十ちょっとに見えるが。
「どうぞ」
「自己紹介ぐらいしたら？」
手で勧められたソファに座らずに、自己紹介を手で促す。
「『立野瑛真』騎士団所属、階級は大佐。こちらは『雪原純子』」
「雪原です。同じく騎士団所属。階級は少尉です」
雪原さんの自己紹介の後、ソファに座る。
同時に目の前にコーヒーが出される。
「で、何で私達が？」
「ショリス＝ディリストラム中将暗殺未遂事件の時、あなた達の判断と行動に対する正当な評価。それが今回の我々の任務に必要と判断しました」
「しました。……て、私達の意見は？」
「それは今からお聞きします」
「む」
揚げ足を取られた店長。
「じゃ、お断りします」
「では、詳しい事は雪原君」
店長の上を行くマイペース？
「えっと」
微笑み掛ける上司と、噛みつきそうに睨んでいるウチの店長に挟まれて、困っている雪原さん。
「えっと。……その」
困り果てた彼女は俺に助けを求める。

が、俺も困る。
雪原さんの視線から送れる事、一秒弱。
穏やかな視線と、殺気が篭った視線が後に続いていた。
「小林君はどう思う？」
「え？　どうって？」
「我々の任務に参加してご両親に立派にやっていると報告」
「あ。コイツ、両親いないんで」
店長の言葉に場が静まる。
店長。それは俺が言うべき事じゃ？　やりたく無いからってそんな……セールス断るみたいに言わなくても。
「すまない。小林君」
頭を下げる立野大佐。
「あ、いえ。昔の事なんで」
「ふふーん。騎士団の情報収集力も大した事無いですねー」
嬉しそうな店長。
「貴女の個人情報を調べても構わないのですか？」
店長の子供じみた嫌味に真っ向から乗ってくる雪原さん。
「調べられるものなら。でも、千歳の事を全然調べられ無かったのは事実だし。たかが知れるよね」
「彼の事。と言うより貴女達、一般人の個人情報を調べる必要性は無いでしょ？」
確かに。そんな事で税金が使われるのは騎士団の予算の無駄遣いだ。
「そんな事言ってー。ホントは調べる力が無いんでしょ？」
「なら、十分後に貴女の生い立ちから一時間前の事まで調べて見ましょうか？」
声に怒りが混じってきた。
「調べられるものなら」
店長は余裕だ。からかわれる事に慣れてないと判断して、面白い玩具を手にした子供の様な目だ。

「ま、君達のやり取りはその辺で。雪原君。資料を」
「はっ」
口喧嘩を窘められて毅然とした返事で答える雪原さん。
「いい年して怒られて……恥ずかしくない？」
貴女もね。

……概要はこうだ。
永遠の王と呼ばれる組織の幹部がこの街にやってくる。
理由は知らないが、とにかくやってくるらしい。その時ソイツを逮捕。
当然、一人でぶらぶらと歩いている訳は無い。護衛はいるだろうし、情報も幾つかダミーが流れているだろう。狙っているのは騎士団だけじゃなく、永遠の王と敵対している組織は幾つもあるだろう。
今回はその全ての情報に乗り、ついでに影武者も逮捕してそこから永遠の王も弱体させよう。と言うかなり大雑把な作戦だ。
「で、一体何人の騎士が動くの？」
「それは機密です。現在部外者の貴女にそこまで教える必要はありません」
「何？　その言い方？　それが協力を頼む人に対する態度？」
「気になるのでしたら、参加して見ればどうですか？」
この二人の対立を微笑んで見ている大佐。
だが、目は泳いでいる。
「それが人にモノを頼む態度？」
ああ言われたら、こう言い返す。
「貴女こそ、そんな態度でよくやってこれましたね。そちらの方の努力に涙が出そうです」
横目で威圧を受ける。
「え。そんな事は。……店長はこう見えても仕事はしっかりやる方なんで」
「ほら～！　聞いた？　聞いた！？　聞いた！！」

「立場を利用してそう言わせたんじゃないんですか？　そうですよね？」
「え」
真っ直ぐに見る瞳。思わず見惚れてしまう。
「ほら。困ってるじゃないですか！　これは職場の上下関係から発した威圧。つまり。パワハラじゃないんですか？」
「何言ってんの？　アンタ？　バカじゃないの？　ねぇ？　千歳」
もたれかかって来る店長。
腕に店長の重みと体温が伝わる。
思わず、ドキドキしてしまう。
「え。あ、はぁ」
「そういう態度が彼に威圧感を与えている事が分からないんですか？」
「別に千歳は嫌じゃないよねー」
声は可愛いが、反論は出来ない空気が漂っている。
「高圧的で威圧的な上司を持って大変ですね」
微笑む雪原さん。こちらも反論出来そうに無い。
「それに。彼ほどの力があれば独立する方が良いと思いますが？」
「戦闘も営業も千歳はまだまだまだ。独立は無理でしょ」
「そんな事は無いと思いますよ。少なくとも貴女よりは優れていると思いますが」
「はっはっは。確かに千歳は君より強いかもしれないけど」
一息入れて、絶対の自信を持って、
「私より弱いの」
「そんな事は無いんじゃないですか？　彼が私より強いと言う事も無いですけど、貴女より弱いと言うのも信じられません。あ、そうか。一応上司だから手を」
「抜く訳無いでしょ。ねぇ？」
「まぁ、俺もマジで闘りましたよ。その時は」
「その時？」

雪原さんが食い付いた。
「何か引っかかりますね。小林さん、彼女と最後に闘ったのは何時ですか？」
「二ヶ月ほど前かな」
「それから貴方は訓練とかしましたか？」
「はぁ。それなりに」
「なるほど。では今現在、力量差は分からない。と言う事ですね」
そうなるの……か？
チラッと店長を見ると、
「んふふふ。何かな？　千歳君？」
目が恐いですよ。店長。

で、こうなりました。場所は屋上。
「さて。じゃ、闘ろうか」
「用意はいいですか？　小林さん。……では、僭越ながら審判を務めさせていただきます。……はじめっ！」
いいも何も、俺の意見は完全スルーだったじゃないか。
「泣かしてやるよ」
くるっとチャクラムを回して、そのまま投げて、同時に間合いを詰めてくる。
チャクラムを弾く。
その真後ろにいた店長は、俺が弾いたチャクラムをキャッチして、そのまま接近戦へと入る。
「っ」
短槍を突き出し、相手のペースはさせない。
左突きから右払い。一歩踏み込んで斬り降ろしてから更に薙ぎ払う。
「前よりは速くなってる」
完全に見切られている。
手を抜いている訳ではない。店長とはまだ力の差があった。
この二ヶ月。俺なりに鍛錬を積んで来た。少しは差が埋まったと思

ってた。
しかし……現実は……。
今は俺が攻めているが、店長は俺の攻撃を完全に見切っている。
突き。払い。薙ぎ。その全てが空を斬る。
何で……？
焦る心。
それを押さえつけるのにも限界がある。
「乱れたな。千歳」
甘く入った突きを踏み込んで避けられて、俺の左足に店長の右足が乗る。
顎に鈍い衝撃の後……
……空を見た瞬間、意識が途切れた。

「大丈夫ですか？」
気がつくと、真上には見知らぬ顔が心配そうに俺を見ていた。
「え。あ……っと」
状況が理解出来ない。
……あっ！
そうだ。確か店長と闘う事になって……それで、負けて……それから。
「おい。気がついたのならさっさと起きろ」
心配そうに見ている顔の向こうから店長の不機嫌そうな顔が俺を見下ろしていた。
「……あ！」
「いいですね～。膝枕」
羨ましそうに立野大佐が見ていた。
「さて、これで私の実力が分かったかな？　お嬢ちゃん」
見下ろす店長と、
「……彼よりは強い。と、言う事は」
見上げる雪原さん。

雪原さんの膝枕から飛び起きてみれば、一触即発の空気は変わっていない。
「ははは。どうしましょう？」
立野大佐の乾いた声が響く。

「さて、次はアンタ？」
俺と立野大佐は顔を見合わせる。
店長は雪原さんにチャクラムを突きつける。
「ちょっと……椎名さん？」
「どう？」
答えない雪原さん。
「あの～。椎名さん？　僕達騎士は魅せる為の鍛錬はしてないんで」
「大丈夫ですよ。大佐。すぐに終わりますから」
雪原さんのスイッチが入った！
「剣を……取って来ます」

「彼女の意外な一面が見れました」
この雰囲気を楽しんでいる様にしか見えない大佐。
ある意味、羨ましい。
「大丈夫なんですか？」
「うーん。それは大丈夫でしょう。お互い、相手に怪我させる様な事は無いでしょう。椎名さんも技量はあるし、雪原君も技量では騎士団の上位に位置してますから」
ふーむ。こう言っては失礼だが、雪原さんの見た目からは想像がつかない。
「お待たせしました」
いつか見た剣。小柄な彼女には大きいと思われる。当然それを見逃す店長じゃない。
「大きい剣だね～」
声が笑ってる。と言うよりバカにしてる。

その声に、ピクッと反応しながらもストレッチをしている雪原さん。
「さて、始めましょうか」
スゥ……。
剣を構える眼差しを受けた店長も真剣な目でそれに答える。

目の前で繰り広げれる光景。
響く剣戟。地を蹴る音と空を斬る音。目まぐるしく入れ替わる攻守。
「やりますね。彼女は」
大佐の声に何も答えられない。
騎士と互角に闘える。
それでも店長にはまだ余裕がある様に見える。
踏み込んで一回転。遠心力を利用した一撃。
遠心力を乗せる事で一撃の威力を上げる。
今までで一番の速度。俺の目では追い切れなかった。
しかし、店長はそれを捌いて間合いに入る。
「はい。これでどう？」
「何がですか？」
すぐさま切り返し、
ギリギリと音を立てて睨み合う二人。
体格は店長に分がある。
しかし、押しているのは雪原さん。
店長がチャクラムと剣の設置点を点をずらして、左裏拳から右腕を振り上げる。
雪原さんの注意が右腕にいく。剣で右手からの攻撃に備える。
しかし、店長は無防備な左足を蹴り抜いた。
崩れる左足。追い打ちを掛ける店長。
振り下ろす拳。剣でそれを受ける雪原さん。
しかし、力が入っていない。難なく弾かれる剣。
決まった。そう思った瞬間、剣を放して、
雪原さんの体が宙を舞う。

店長の右腕に絡みつく。
右腕を引いて雪原さんの攻撃を避け左手で攻撃するが当たらない。
空中で体を捻り、店長の攻撃を避け正面から着地。その瞬間肘を曲げてショックを和らげ、剣を取りすぐに立ち上がる。
一歩、二歩。後にステップを踏んで間合いを取る店長。
「ふむ……このままだとどっちかが怪我するかもしれないね」
確かに。徐々にお互いの攻撃に殺気が篭ってきている様に思える。
「もう少し見ていたいが……今後の事を考えて。はい！　二人共！
そこまでっ！」
立野大佐が二人の間に入る。
「大佐」
剣を引く雪原さん。
「何？」
「これまで。そう言っただろ。お互いの力はよく分かっただろ」
「いや。どっちが強いのか、って事はこれからでしょ」
不敵に笑う店長。
「まぁまぁ」
店長を宥める立野大佐。
「貴女の力はよく分かりました。おそらく貴女の方が強いでしょう」
そう聞いて一気に機嫌が良くなる店長。
「では、話の続きを」
二人が中に入っていく。
それを雪原さんと二人眺めている。
風が吹く屋上。ぽつん、と閉まるドアを見ている。
「あの」
気まずい空気。とりあえず声を掛ける。
「何ですか」
微笑んでいるその顔に悔しさや敗北感は感じられない。
「行きましょうか？」
歩き出す雪原さん。

「あ。はい」
その後に続いていく。

「じゃ、これで」
大佐に挨拶して部屋を出る。
「う～ん。久しぶりに体動かした～」
ビルを出て、体を伸ばす店長。
「どうした？　人の顔を見て」
「あ。いや」
とにかく色んな思いが重なって口ごもる。
「ま、たまにはこんな依頼があってもいいんじゃない」
そう……この依頼を受けた事も気になる。
あれだけ嫌がっていたのに、何故急に考えを変えたのか？
「それだけですか？」
俺の問いに意味ありげな微笑みで返す。
「あのチビとはまた闘りたい」
今まで闘う事に拘らなかった店長。
それが今、あの騎士ともう一度闘いと言っている。
「どうしたんですか？」
「チビの癖に生意気にも手加減してた。それがムカつく」
「それが理由で受けたんですか？」
「こんな依頼なら戦闘は間違いなく起こる。そうなれば私はもっと強くなれるかも知れない」
真剣な目。その目が本気でそう思っている事の証。
「だから、たまにはいいでしょ？」

「じゃ、最初の相手は」
「そ。コイツ」
店長は左、俺は右に避ける。
その間に後から襲ってきた男。

勢い余って前につんのめる。
手にはナイフ。
それを見た、俺達以外の人。つまりは無関係な通行人の悲鳴。
それが連鎖していく。
「行くよ。千歳」
「了解」
立ち上がろうとする男。その手を蹴り飛ばす店長。
「グッ」
小さく呻いて顔を見上げる。が、その後は、
「ガハッ！」
俺が男の腹部を蹴り上げる。
腕を固めて、背中に座りこむ。
「さて。これから……」
どうしようか。そう言おうとしているのは分かった。と言うのも、
「警察だっ！！　動くなっ！！」
善良な誰かさんが警察に通報してくれた。
「あ。待てっ！！」
ここで捕まる訳には行かない。
それにこの男の事は大体分かる。とりあえず今は逃げるのが先決。
店長と離れて別々に逃げる。

襲撃者

「ふぅ」
路地に逃げ込む。
深呼吸して、息を整える。
路地を更に奥に進む。
「待った？」
後からの声に振り返る。
槍……違うな、切っ先の横に刃がついている。戟を持った男が一人。
敵意も殺気も無く立っていた。
「いや……そんなには」
短槍を構える。
「そう。それは良かった」
一気に間合いを詰めて、突き出される戟。
それをギリギリで防ぐ。
何がいい反応だ。……切っ先が目の間にある。
「ふむ。素人にしては。じゃ、これは？」
戟を引いて、突き。
軌道がバレバレ。ナメられてるのか。弾いて反撃に入る。
「ッ！！」
弾いた戟。しかし、鮮やかに風を斬り、軌道を修正して真横から向ってくる。
耳元で響く金属音。
「君は本当に素人か？」
体を沈めて、戟を外して反撃に出る。
腕を伸ばし、左突き。少し後に下がる男。
目一杯腕を伸ばすが、目の前までしか届かない。
見切られた。
だからと言って止まる訳にはいかない。

右手で戟の柄を挟んで、反撃を封じる。
こっちも左手しか使えないが、構わず攻める。
「攻め方が単調すぎるな」
うるさい。その余裕が何時までも続くと思うなよ。
俺の体勢が崩れる。右方向に倒れる。
「え……？」
何が起こったのか分からない。
状況を理解するのに時間がかかる。
理解するより速く衝撃が襲ってきた。
カラン、と鳴る音と共に壁にぶち当たる。
「今のを避けるか？」
何があった？　鈍い衝撃が体に残っている。
目の前には右ハイキックの体勢を保っている男。
それで状況は理解した。戟を放して格闘に持ち込んだのだ。
俺の体勢が崩れたのは、男が戟を放したから。
その隙をついてのハイキック。
俺は……どうやって避けたんだ？
考えるが分からない。確かなのは体中に痛みが残っている事。
多分左手で防いだのだろう。……じゃなくて、どうやって避けたのか、よりも優先しなきゃいけない事があるだろう！
「名前。聞いておこうか。私は『七尾瞬生』」
「小林千歳」
勢いに押されて名乗ってしまった。
「大丈夫。君以外には関わらないよ。私は」
「貴方以外は関わるんですか？」
「私が何処の所属かは流石に分かるか」
そう言うって事は、俺の考えが正しいって事だ。
「ま、その辺は私を信じて貰うしかない。では失礼」
ゆっくりとした仕草で立ち去る男。
一気に緊張が切れて、そのまま座りこむ。

千歳は上手く逃げられたかな。
公園のベンチに座って息を整える。
「さて」
帰ろうと思い、立ち上がる。少し離れた所に何となく見覚えのある男が立っている。
「よう。久しぶり」
言葉には殺気。それを感じて防御体勢を取る。
「だ、誰っ！？」
一閃、二閃。避ける。
「お前の所為で……俺は……っ」
逆恨み？　される覚えは。
顔を見る。……あ。
「思いだした！　あの時の！」
「忘れてたのか！？」
私の声に止まる男。その隙に足を払う。
「あ。しまっ」
倒れる男。
追い打ちをかけずにチャクラムを構える。
「そうか、そうか。あの時の暗殺者」
確かにディリストラム暗殺未遂の時に見た顔だ。
「何だ。アンタ永遠の王だったの」
「うるさい。騎士の犬！」
「口の聞き方に気をつけなよ？　下っ端」
コイツの強さは分かってる。
千歳と同等ぐらいの強さ。まぁ、殺気がある分こっちの方が強いかも。
楽観は出来ないが油断しなけりゃ大丈夫。
「誰に言ってんだ？　お前」
声に怒気が篭る。

あぁ、頭の方は千歳より遥に下だな。こんな挑発にのる位だし。
でも、こっちとしてはその方がいいか。
「誰にって……はは」
更に挑発。目を見て鼻で笑ってやる。
「殺すぞ」
体中から殺気が立ち登っている。気圧されそうになるが、
「その気で来たんじゃないの？」
私は笑うのを堪える様に話す。
ビビッてはダメ。調子付かせると手に負えないかもしれない。
相手のペースじゃなく私のペースで闘う。
「早く立て」
人差し指をくいっと動かす。
「本気で」
「あ～、分かった分かった」
ゆっくりと立ち上がり、一気に攻めてくる。
速く重い攻撃。チャクラムが弾かれそうになる。だが、挑発が効いている。
単調な攻め。剣閃が読み易い。
振り上げられる剣。
ここで、崩す。
振り下ろすより速く、チャクラムを相手の喉下に打ちつける。
声を出す事無く倒れる男。
「ふむ」
コイツが誰なのか。考えるまでも無いな。
とりあえず……きょろきょろと辺りを確認。
よし。誰もいない。
剣を木の後に隠して、ベンチの下に男を放り込む。
これで目を覚ましても状況を理解するのに少し時間がかかるだろう。
多分。
上着を漁る。やっている事が事なので、もう一度辺りを確認。

何か、身分証とか無いか……な。
「こらっ！　何してるっ！」
ドキっ！！！！！
気付かなかった？　マジで？　じゃ無い。何か言い訳考えないと……。
どうしよう、どうしよう……えっと、えっと。
うわっ、何も思い浮かばない！
当たって……砕ける？　何で疑問系！　誰に聞いてるの！？　あぁ。もう！
ゆっくりと後を振り返る。
「どう？　ビビッた」
「は～……ビビッた何てモンじゃ……無いわよ！！！！」
立っていたのはいつかの代理屋。
とりあえずチャクラムを投げつける。
難なくキャッチされる。
「で、何してるんだ？」
ベンチの下の男を指差す。
「う～ん。仕事」
流石に言え無いよな。騎士団からの依頼とは。
「どんな仕事だよ」
「ま、色々とある訳よ」
「違いないな」
笑うおっさん。
そう言えば名前なんだっけ？　聞いた覚えはあるのだが……。
「お前。覚えてないな」
「えーと」
確か、確か……何だっけ。
「あはは」
思い出せない。笑って誤魔化そう。
「まったく。本多大輔だ。どうだ？　思いだしたか」

「思い出せなかったのは名前だけ。それ以外は大丈夫」
親指を立てて答える。
「なら、名前も覚えろよ」
「仰る通りで。で、何の用？」
「仕事だって言ったろ？」
「あ～。そんな事言ってたね」
「で、公園の前を通りかかったら物騒な音が聞こえてきて見に来たって訳だ」
「なるほど」
「で、聞きたいんだが」
「ちょっと待て。この状況についてもっと聞こうとはしないのか？」
「聞いたら答えるのか」
「う……む」
答える事は出来ないな。
「だろ？」
悠然と微笑む顔にムカッとなる。
ダメダメ。カルシウムが足りないな。帰りに牛乳を買って帰ろう。
「おい。聞いてるか？」
「あぁ。聞いてる。何？」
「聞いてないじゃないか。道を聞きたいんだ」
「何で？」
「分からないからに決まってるだろう」
「それもそうね。で、何処？」
「トーロザってトコに行きたいんだ」
んん？　トーロザ？　レーナールから近い通りの名前だ。
「トーロザは……」
ここからの最短距離を伝える。
「分かった。こっちの仕事が終わったら飯でも奢ってやろう」
「いいよ。別に」
「遠慮するな。ケータイを教えてやろう」

「いいよ」
「そんな事言うなよ～。ほら」
ケータイにはコイツの番号が映し出されている。
どうやら私は強制的に登録しなきゃならないらしい。
「私のは教えんぞ」
「警察……呼ぶ？」
ベンチの下でまだのびている男を指差す。それは困る。
「用も無いのに電話してくんなよ」
「分かってる。俺もそんなに暇じゃない」
ケータイを取り出し、仕方なく教えてやる。
「じゃ、またな」
長さにツッコミたくなる槍を持って去って行く。
さて、思わぬ邪魔が入ったが男の上着を漁る事を再開。
内ポケットにも何も無い。身分証は当然として、ケータイとかそういった通信手段を期待していたが……無いな。
捕まる事を想定しているのか、それともコイツに信用が無いのか。
私が考えても分かる訳無いよな。

「こちらが思ったよりも速く対応して来ましたね」
チビに連絡を取り、公園に来てもらった。
「つーか。速すぎない？」
「……」
連絡した時に縛る物をもってきて貰ったので男は木に縛り付けてある。
ついでに男の剣も渡す。
「どう？　何か分かる？」
「いえ。これは何処でも買える物ですね」
まじまじと剣を見ているチビ。
チビって心で言ってるのは当然内緒。
「そうか。その剣から何か分かると思ったんだけど……そう簡単に

はいかないか」
「おい。さっさと殺せ」
縛り付けられているのに態度がデカイな。
「貴方には色々と聞きたい事があります」
冷静に答えるチビ。
「答えると思うか」
唾を吐く。
「おい。態度に」
「殺せ、と言った筈だ」
「私も言った筈です。聞きたい事がある、と」
唾を吐かれても態度を変えないチビ。
私ならブチ切れるな……。間違いなく。
意外に大物かも。体はちっちゃいのに。
等と考えてる場合じゃない。
「で、どうする？　連れて行く」
「いえ。それは出来ません」
「え？　何で？」
「出て来なさい」
後を振り返る。
「流石。バレてたか」
女が一人。明らかに通行人じゃない雰囲気。
スッと剣を構えるチビ。
「ついでに貴女にも来て貰いましょうか」
「「嫌」」
奇しくも声がハモる。
「でも来て貰いますっ！」
一気に間合いを詰める。
響く剣戟。
「やってみな」
女の武器もチビと同じく剣だが少し反り返っている。

チビの剣より長い。
リーチでは圧倒的に不利だな。
しかし、チビはリーチをものともせずに攻める。
地を踏み蹴る音と、風を切り響く剣戟。
密着した間合いでは捌くのに精一杯の筈。
このまま攻め続けられればチビのペースになるだろう。
しかし、一切攻めに出ない相手が気になる。
　私と目が合う。……笑った？
誘ってるのか。それともカウンターを狙ってるのか。それなら、そのタイミングで私が入る。その瞬間の注意は私よりもチビに向いている筈。
　チャクラムを構え、その時を待つ。
柄でチビの剣を弾く。
「クッ」
　来た！　チャクラムをチビの頭越しに投げる。
チビの剣の真横を通り、女に向う。
紙一重で避けるが、顔を掠り前髪が少しはらはらと落ちる。
牽制としては充分。
もう一つのチャクラムを腕目掛けて投げる。
同時にチビも反撃に出る。
　振り下ろされる剣と、向ってくるチャクラム。
女の顔には微笑み。
その余裕は何処から来るのか、それはその一瞬の後に分かった。
チビの剣を体を捻り紙一重で避ける。同時に振り上げた剣は私のチャクラムを弾き落とし、チビの顔を掠める剣。
　私は間髪いれず間合いを詰める。
振り上げられた剣、私の右裏拳は女の眼前を通り、舞い戻るチャクラムを取り左手で取る。
回転し剣が私に向ってくる。
　チビが私の前に入り、剣を防ぐ。

この間合いじゃお互いに剣を振るう事は無理だろう。
勝機が見えた。
……かに見えた。
「手間取ってるな」
「一人で充分よ」
新手？　それならこの女を先に……！
チャクラムを握り、突き出す。
「きゃ」
チビの剣が押される。
こっちは二人なのに……押し戻される。
「ま、そう言うなよ？　こっちも片付いたし。ちょっと手伝うよ」
こっちも片付いた？　その言葉に引っかかる。
「それ程言うなら好きにしたら？」
「そうする」
私達を無視して話が進む。
しかし、状況はこっちに悪い方に進んでいる。
近づいてくる気配。
それは私達を通り抜け、縛り付けられた男の前で止まる。
手には槍……じゃないな。切っ先のそばに三日月状の刃が付いている。
「覚悟は出来てるか？」
「無論」
躊躇い無く突き降ろされる戟。
「……なんで？」
戟は縛っていたロープを切っただけ。
呆けた顔で男を見る下っ端。
「負けたままじゃ死ねないだろう」
「おや～？　いいの～？」
茶化す女の声。
「上に私から話するよ」

「ま、アンタならすんなりいくんじゃない」
「そう願うよ」
剣を収める女。
縛り付けられた体勢のまま、呆けている男とそれを見下ろす男。
これで三対二。その内一人は武器無し。
そう考えると二対二。数の上では互角。
能力は女一人に対して私達二人で闘っていた。
おそらく後から来た男も女と互角。
「じゃ、今回は見逃してあげる」
すっかり戦意の無い女。
「じゃ、私達はこれで」
構える私達の横を通り抜ける三人。
本気で闘う気が無いの？
「これ……返すよ」
チビが振り返り、剣を投げる。
受け取りそのまま去っていく三人。
公園に残された私達。
「何か……とてつもなく悔しいんだけど」
チャクラムを握り締める。
「私もです」
見ればチビも手を握り締めている。

ハーサディビル、三階。
ムスッとした顔の店長と顔に絆創膏を貼った雪原さん。そして、難しい顔をした立野大佐が居た。
「何があったんですか？」
……。
二人にギロッと睨まれる。
「別に」
って言う雰囲気じゃないじゃないですか。

「小林君。君も襲われたのか」
「君も……？　て事は」
顔の絆創膏が痛々しい。
「何？」
「大丈夫だったんですか？」
「見て分かんない？」
「顔の絆創膏……」
店長が横に座っている雪原さんの顔を見る。
「何コレ？」
「さぁ？」
声が恐いよ。二人とも。
「千歳。分かる？」
「え……絆創膏……ですよね」
「何で貼ってるの？」
……。
間が開く。
「何となく？」
見上げる目。微笑む口元。
「あ、……そうですか」
そう言われては何も言えない。
「で、小林君は何かあったの？」
「え。俺は……」
とりあえず襲われた事と襲撃者の事を伝える。
……。
「戟？」
「アイツか」
「知ってるんですか？」
……黙り込む二人。
「この二人もその男に会っているんだ」
「それで名前だが、ナナオシュンセイ。……そう名乗ったのか？」

メモを取る大佐。
「偽名でしょうか？」
「多分、そうかな。でも、そうじゃないかも」
「どっちよ？」
「今は分からないと言うのが賢明だな」
「何も分かって無いんだね。相手の事」
舌を出してとぼける大佐と一口お茶を飲んで天井を見る雪原さん。
「おい。しっかりしろよー！」
がたがたと隣の雪原さんを揺さぶる。
「おい！」
「大……佐に……聞いて……下さい」
揺さぶられて途切れ途切れに答える雪原さん。
「大佐っ！」
振り返ると……
「ど、何処行った！」
いなかった。

「全く奴等はホントに騎士団か？」
帰り道。店長のぼやきが夕暮れに響く。
「声が大きいですよ」
「気にするな」
「気にしますよ」
「さて、また襲われる前に帰るか」
物騒な事を口走る店長。
がさっ。
後からの物音に咄嗟に振り返る。
野良犬がきょとん、と見ていた。
「あ、あはははは。千歳何ビビッてるの」
「て、店長こそ」
ドキドキしながら帰り道を急ぎ足で帰る。

「お。おかえり」
ストローを銜えた姉ちゃんが奥からこっちを見ていた。
「た、ただいま」
「走って帰ってきたん？」
「う、うん」
「飯、作る？」
「あ、ありがと」
頬をぽりぽりと掻きながら、冷蔵庫を開けて、
「ゴメン。食材が無いわ」
「じゃ、食いに」
「よし、行こ」
言うが早い。さっさと着替える。

「で、何をそんなに警戒してんの」
「え」
近くのファミレスに入ってるからも辺りを窺っている俺に一言。
「おい。何があったかは知らんがウェイトレスをビビらせるな」
「そんな事は」
ない筈。
「アホ。何かすると思われるから」
「何かって何？」
スッと顔を寄せて、辺りを見て、
「食い逃げ」
こんな馬鹿な事を言い合う。
昼間とは違う和やかな雰囲気。
「どうした？」
目の前にあるハンバーグをがっついている姉ちゃんが見ている。
「ん。別に」
「やらんぞ」

「いらんわ」
いつもの顔。いつもの会話。
今回の依頼、無事に済ませたい。そう願った時間だった。
「ここ？」
真夜中のジノト通り。雪原さんと合流。つまり、依頼である『永遠の王幹部逮捕』
「そうです」
武装した雪原さん。騎士団の制服がカッコイイ。
「で、アンタだけ？」
他の騎士達が見えない。店長はいつもの格好。ちなみに俺も。
「いえ。五人一組で行動する事になってます」
「後二人来るんですか？」
「強いの？」
「店長」
ここで挑発しなくても。
「強いですよ。でなきゃ今回の任務に入れないですから」
「へ～。今回の『任務』は騎士団の選抜でやるの？」
「そうですよ」
「なら、何で私達を？」
「能力と、後は」
言いかけた雪原さんの口が止まる。
「余裕だな」
目の前には街灯に照らされ武装した男が二人。
「なめられたもんだ」
歪む口元。
誰なのか。確認するまでもない。襲われたんだから！
一人が突進してくる。
両手に剣。

二刀っ！
それなら、俺がて二槍で抑える。
手に衝撃。睨み合う。
「やるな。……短槍二本？　七尾さんが言ってたのはお前の事か？」
「ナナオ……昨日の」
「それなら、楽しませてくれよ」
もう一人、後から突き出してくる。
顔をずらして避ける。
「しゃがめ！」
店長の声に従う。
力を抜いて剣を捌く。
チャクラムが飛んでいく。
一つは剣士、もう一つは後の長柄。
どちらも体を捻り避ける。
俺は体勢を立て直し、剣士の後へ。
「おい。俺と」
「私が相手しましょう」
雪原さんが剣士の間合いに入る。

強襲

「七尾さんから聞いていたけど、そんな闘い方する奴ってのは初めて見たな」
突き出した長柄を引き戻す。
穂先に片刃、それに突起がある。ハルバートか。
何にしても構える間を与えない。
突き、踏み込んで前に。
ひらり、と避けられ、横薙ぎ。
それを……受ける。
左手が痺れる。
ぎりぎりと押される。前に出たいが、力を抜いたら真横に飛ばされる。
しゃがんで、点をずらして、
「何度も同じ手が通用すると」
「思うかっ！　バーカ！」
店長が戻ってきたチャクラムを手に一気に間合いを詰める。
「援護っ！」
上下に間髪入れず攻めていく。
店長の攻めの一瞬の間、それを俺が埋めて交代。
それを繰り返す。
守勢に回るしかない男。
しかし、目は冷静に体は最小の運動。
攻めているのはこっち。
構える暇を与えずに攻める。
長柄では不利な距離のはず。しかし、攻めきれない。
……じれったい。
そう思った。
牽制で出されるハルバート。

何度か繰り返した動作。
巻き込んで店長が一歩前に出る。
ここまでは同じ。
ここからが違った。
光る突起。
店長は腕を振りかぶっている。
今までとは違う速さで引き戻されるハルバート。
「単調な動きに」
店長はチャクラムを突起に引っ掛けて、ハルバートを押さえ込む。
「へへへ。慣れたのはお前だろ？」
「そうだな」
微笑む男。
まず、一人。
俺の突きが男の左肩に直撃。

「チッ！　チビでも流石に騎士かっ！？」
全く、何で人を見た目で判断するのか。
剣を払い一歩前へ。眼前を通り抜ける剣を避ける。
「人を見た目で判断するのは駄目だな」
「偏見は良くないですよ」
「全くだ」
口元は笑っているが目は笑ってない。殺気も少し増したかな。
どうやら本気になったのか。
これで、私も少し本気になれるな。
「では」
一呼吸入れて、
「参る」
「前時代的な」
言い終わる前に踏み込む。
全速の剣閃。

斬り上げて体を捻り薙ぎ払い。
打ち合う剣。
スッと後に引いて、相手の体勢を崩す。そして前へ。
薙ぎ払いから重心をずらして相手の反撃を避ける。
相手の剣が戻る前に、突き。
それから横に斬り払ってから斜めに斬り下ろして真っ直ぐ斬り上げる。
　相手の反撃。
無防備な腹部に薙ぎ払い。後に飛んで避ける。
間合いを詰められて、左右からの連撃。
一撃目を避けて、二撃目を捌く。
弾かれる剣を戻して、打ち合う。
一撃、二撃、三撃……。
互いにレーザーを起動している。真夜中のジノト通りに火花が飛び散る。
無論、こっちは死なない程度の威力だけど。
「やぁぁっ！」
　渾身の力を込めて斬り上げる。
弾いた瞬間を狙って前に。
後に仰け反りながらも冷静に私を見つめる瞳。
ギリギリ間合いに入る。その瞬間、突き出されるもう一本の剣。
切っ先を見据え、軌道を読む。
　突きなら直線。
突き出された直後に左に重心をずらして避ける。
もう一撃ある。
　私が片方に意識を集中した直後に弾いた剣を振り下ろす。
体を横にし、振り下ろされる剣が眼前を光りを残して駆け抜ける。
　その直後、
私の剣が相手の肩に振り下ろされる。
「いっ！」

悲鳴にならない声。
首筋に剣を当て、
「さ。来て貰いましょうか」
レーザー起動のスイッチに指をかけながら見下ろす。

「遅れまし……た」
二人の男から武器を取り上げ本部に連絡した所でやって来た二人の騎士。
「遅いっ！！」
上官でも、まして騎士でもない店長が一喝。
「「すいません！」」
声を揃えて謝る二人。
「いえ。遅れてはいません。作戦開始時刻はまだ先です」
「「え」」
今度はこっちの声がハモる。
「そうなの？　千歳？」
怒鳴った事に対して悪びれる風も無く振り返る店長。
「そうですね」
時計を確認。雪原さんの言う通り予定時間ではない。
「さて、時間も余りないですから、名前だけでも」
「吉川です」
「森下です」
「うむ」
「すいません。こっちが椎名で、僕は小林です」
何でそんなに威張っているのかは分からないが、名乗る気が無い店長に代わり俺が答えた。
「じゃ、行きましょうか」
雪原さんの言葉と共に次の場所に向う。

「はぁ！」

打ちつけられたハルバート。
アスファルトに亀裂が入る。
武器は同じだが……力はさっきの男の比じゃないな。
俺達は当初の目的どおりに『永遠の王幹部襲撃』を開始。
おそらく外れと思われるが、相手が……悪くないか？
ハルバートを携えた大男。顔の傷が男の戦歴を物語っている。
もう一人いたが店長のチャクラムによってさっさと退場。
従って大男一人に対し俺達は五人。
にも関わらず攻め手に欠ける。
雪原さんが正面から攻める。
ハルバートを避け、踏み込む。
少し遅れて俺と森下君が左右から、吉川君が後同時に突っ込む。
切っ先を地面にした構えから、横薙ぎ一閃。
後ろに飛ぶ雪原さん。受けた手が痺れる俺。顔を歪める森下君。
そして、
「声を上げたら少しは楽になるぞ」
「は。下っ端風情が何を」
パルチザンを支えにようやく立っている吉川君。
足が普通じゃないほうに曲がっている。
顔には脂汗。痛みは尋常じゃ無いだろう。それでも、戦意は失ってない。
その姿を見て、俺の中の闘志が燃え上がる。
ジリッと足を動かす。
その気配を感じ取り、俺に向き直る男。
正面切って睨み合う。
それだけで気後れしてしまいそうになる。
目を閉じ、覚悟を決めて、一歩踏み出す。
唸る剛槍。見極めて避け反撃。
切っ先ではなく柄で受け止められる。
力の差は歴然としている。このまま一気に攻める。

受け止められた槍は腕、それと同時にもう一振りの槍は肩。
「か、は」
腕に突き刺さる直前、柄が俺を打ち払った。
「甘い。その程度の腕で何を」
「何か言ったかぁー！」
森下君が攻める。突きに特化した造りの剣。
踏み込むスピードは俺より速い。
三連突き。
柄でその軌道を変化させられる。
そして、カウンター。
「見かけによらず器用だな」
店長が割って入る。
密着した間合い。確かにその間合いならハルバートの一撃は封じられる。
だが、体格が違い過ぎる。
店長の蹴りはまともに入っているが、それは男が避けようとしていない様にも見える。
それに、男はチャクラムの一撃に注視している。
つまり、それ以外の攻撃は効いていない。
それでも攻め続ける店長。
「気が済んだか？」
「店長っ！！」
「くっ」
捕まった店長。チャクラムの一撃を捕らえられて腕を持ち上げられる。
「良い目だな」
「チャーム……ポイント……な、んだ」
この期に及んでもいつもの強がりを言える店長。
何時までも痛がってる場合じゃない。
ふらつく頭を奮い立たせて、立ち上がる。

「何だ、まだ闘るのか？」
「いえ。彼ではなく私です」
雪原さんが攻める。
光るレーザー。それが照らす冷静な瞳。店長を捕らえている手を斬り上げる。
店長を放し、ハルバートを構える。
「うわっ！ちょ」
いきなり放されて尻餅をつく。
「痛った～」
店長の痛そうな声を無視して、雪原さんに続いて森下君と俺が続く。
俺はハルバートに狙いを定めて短槍を振るう。
男の意識が俺に向う。柄で弾いて、直後に森下君の突き。
俺達二人の動きで隙ができる。
そこを雪原さんが攻める。
斬り上げる剣。
打ち合う剣とハルバート。
力では圧倒的に不利なのは分かってる。
だから、その一瞬を逃さない。
弾かれた体勢を立て直し、無防備な腹部を薙ぎ払う俺と剣を突き出す森下君。

「五対一でここまで」
とりあえず、本命ではないが俺達の任務は終了。
その報告と負傷者の事と捕らえた永遠の王メンバーの引渡しの為に本部にいた立野大佐に連絡を取った。
「その他のチームは？」
「概ね成功かな」
「て事は、本命はまだ？」
「と言うより、いない。と言ったほうがいいかも」

ガセネタを掴まされたって事か。
「情報漏洩の可能性は？」
店長が単刀直入に聞いてしまう。
もうちょっと、言い方ってものに気を使って欲しい。
周りにいる……大体は俺の事だが……者は気が気では無い。
「ありえません。騎士たるものが二心を抱くなど」
雪原さんが真っ向から否定。しかし、
「私はその可能性もあるかと」
「大佐っ！」
雪原さんの声に怒気が含まれている。
「雪原少尉。幾つかの可能性の中からその可能性もある。と言っているのです」
窘めるが、声にはその可能性が一番高い事を確信している様な印象を受けた。
「じゃ、詳しい事、聞かせてくれる」
「それは……後ほど」
含みを持たせる大佐。
捕らえたメンバー一人の護送を確認してその場から立ち去る。

「しかし、君達五人相手に互角に闘うとは」
「しつこいな、大佐も。それにあれは人間じゃないな」
口を尖らせて呟く店長。
ハーサディビル、三階。そこに立野大佐と雪原さんと森下君。店長と俺がソファに座りさっきの闘いを振り返る。
「全てに置いて圧倒されました」
素直に力量差を認める森下君。じろり、と店長と雪原さんに睨まれて俯く。
彼とは気が合いそうだ。
「それよりも内通者の事を」
雪原さんが話を変える。

「そうだった。そっちの方が重要だ」
珍しく？　気が合っている。その理由は『負けた勝負』から話を逸らしたいのだろう。
「一つの可能性としてある。とだけだね。今は」
「何か含んでない？」
「こちらもこれから調べる訳でして」
「じゃ、怪しいのは」
一本指が立つ。
「それは？」
「言ってもいいが……」
俺達を見る大佐。
「ん？　何」
お茶を啜っていた店長がその目に気付いた。
「誰がスパイなのかって事を言おうと思って」
「あ。そう。で、誰なの？」
ずずずっと啜る。
「いいのかい？　言っても」
「いいんじゃない」
「え、でも」
口ごもる大佐。
「何よ。はっきり言いなさいよ」
大佐に対してもタメ口で喋る店長はカッコイイ。
とは思わない。社会人としての礼儀は持てよ、というのが俺の感想だ。
「え。聞いたら君達も巻き込まれる事になるけど」
「それは……」
いつもは即決の店長が珍しく悩む。
「正直に言うと、気にはなる。しかし、アンタ達の内部事情に巻き込まれるのは嫌」
「なるほど。気持ち良い位正直に言ってくれましたね」

俺としてはもう少しオブラートに言って欲しい。
「なら……追加って事でどうですか？」
「それで」
依頼なら受ける。
「お金で」
「私達は代理屋なの。依頼を受け、それを達成してお金を貰ってご飯食べてるの」
店長の言葉に雪原さんが言葉を止める。
「大佐。で」
「うん。……私が疑っているのは『嶋沢栄太』フリージア軍少佐」
軍？
「え、フリージア軍の少佐？　騎士団じゃないの？」
「それもいるでしょうが、現在では分かりませんね。騎士団の者ならこっちの手の内も分かっているでしょうから」
「対応は取れる。って事ですか」
「そう言う事です」
「じゃ、とりあえずその少佐が怪しいって事か」
頷く立野大佐。
「しかし、何ででしょうか？」
「さぁ？　彼の背景までは知りませんし、興味がありません」
「千歳。そんな事気にしてもしょうがないぞ」
「そう言う事ですね。彼が情報を流した疑いがある。それだけですよ」
疑い、と言っているが確信している顔だ。
「で、これからの事は？」
「それは、依頼を引き続き受ける、と解釈しても」
「よろしいですよ」
微笑む店長。
「小林君は？」
二人は俺を見る。それに続いて雪原さんと森下君も。

「俺もやります」

今後の事を打ち合わせた結果。

「じゃ、小林君のお姉さんにも手伝って貰おうかな」

と、軽いノリで決定。

そして、家に向う。

「おっかえり～」

首にバスタオル、大きなアイスを抱えてスプーンを銜えている。

我が姉ながら……

「お。お客さんか～。ちょっと待って」

俺の後にいる森下君に気付いてキッチンに向う。

「あ、いえ。お構いなく」

「千歳。入って貰え」

「その前に服着ろよ」

「ま、気にすんな」

無理だろ。

「話があるんだ」

事情を掻い摘んで説明。

納得したかどうかは分からないが、とりあえず必要な物を持って家を出た。

「で、その本部で何するん？」

「他のトコの情報が入ってないか、確かめて」

「悠長な。そんな事してる間に向こうに主導権取られるで」

「何も根拠に」

「そうやろ？　向こうにはこっちのスパイがおって情報はそれなりに入ってる訳やろ」

「そうらしいけど」

「だったら、こっちの対策ぐらい考えて、それに相応しい対応するやろ」

「う……そうかな」
「ま、今は向こうに合わせるしかないんちゃう」
何処か……この状況を楽しんでいる風に見える。

「や、無事で何より」
本部に到着。店長の声に声を掛ける姉ちゃん。
「姉ちゃん。こちらが……」
大佐達に紹介する。そして、
「お。お嬢ちゃん。こんな時間やから早よ寝んと」
半笑いで頭を撫でている。絶対にワザとやってる。
その手を払いのけて、
「雪原です。よろしく」
「あ。怒った？」
「千早。それ私もやった」
「あ。そうなん？　ゴメンな～」
今更謝るのもどうかと……。
じろりと俺を睨む雪原さん。
俺は何も言って無いし、何もして無いんですけど。
「さて、これからの事だけど」
大佐が話す。
「現状は幾つかのベースが襲撃された」
「報復ですか」
誰も頷かないが、そうである事は理解している。
「あれ？　宗士も入ってるんやろ？」
「日高君達は無事に逃げたそうだ」
「やろな～。あのアホが簡単に負ける訳無いし」
「アホが逃げに専念する位の相手がいるって事か」
「日高ってあの？」
「そう。日高宗士。フリージア、いや世界的に見ても彼に並ぶ代理屋はいないんじゃないか？」

「え？　アイツってそれ程の奴なの？」
「知らん。長い事会って無いし」
「そんな奴が何であんな強盗みたいな真似を」
「強盗？」
白石からの依頼の事を掻い摘んで話す。
そして、俺達が出したそんな有名な宗士君が何でそんな依頼を受けたのかという理由。
「暇だったんじゃない？」
だった。

「さて、これからの事だけど」
「あ。店長のご家族の方は？」
「あぁ、ウチは大丈夫」
「そうやぞ、千歳。夏子の親やぞ？」
その……言い方は失礼なんじゃ。
「そのとーり！！」
本人が気にして無いから、まぁいいか。
「じゃ、早速ここを引き払いましょう。小野君、中村君、撤収準備の方は？」
「すでに」
「では」
見ればすでにパソコンは無い。
こうなる事を予測していたのか？

「で、これから何処へ？」
「次の本部へ」
「手回しの良い事で」
目を閉じ、ゆったりと凭れている。
「相手は地下組織やろ？　分かってるのは名前だけ？　規模とかは？」

「資金の大半は『フィーラタル財団』から流れています。戦闘員は五百から千人。活動範囲はフリージア、『ライタウス連邦』が中心です。今回フリージアでの目的は現段階では不明。フリージア軍にスパイもしくはそれに準じる人物がいる模様です」
「それが嶋沢栄太フリージア軍少佐？」
「それは私の予測です。根拠は無いですけど」
「でも確信はあるんですよね」
「まぁ、それは」
ワンボックスの一番奥で照れている大佐。
「で、こっちにもいるんでしょ？　地下組織の協力者」
「あ。そうだよね。でなきゃ幹部の情報は流れてこないよね」
言われて見れば。そうだよな。
「するどいですね。確かにいますよ」
この一言に俺達はもとより、騎士団の面々も驚く。運転している小野君もミラー越しに大佐を見る。
「信用出来るんですか？」
「大丈夫ですよ。今回の事でそれは実証できましたし」
「襲われる事も？」
「そう言われると何とも言えないですね。向こうの対応が思ったより速かったとしか言えないですよ」
「で、ソイツとは連絡取れるの？」
「取れますよ。といっても潜入しているのは向こうのスパイですし、連絡が取れるのはその上司と言う事になりますね」
「向こう……という事は、騎士団では無い？」
「ええ。騎士団ではありません。永遠の王と同じく地下組織です」
「信用出来るの？　その永遠の王の事が終わったらそっちが動くんじゃない？」
「大丈夫ですよ。こっちと利害が一致してますから」
「利害？　騎士団と地下組織が？」
互いに敵対してるんじゃないのか？

「ええ。世界の安定と秩序。という点で」
「それで摘発はしないんですか？」
「しない。というより出来ないでしょうね。聞いた話じゃ規模は永遠の王より上。騎士団と同等と言う話です」
「だったらそいつ等に任せれば良いじゃない」
「ディリストラム氏暗殺未遂。これが無かったらそっちに任せたんとちゃう？」
「ま、否定はしません」
「メンツ、か」
「『上』はそう判断したんでしょう。それに『その組織』との同盟も理由の一つでしょうけど」
「じゃ、『その組織』も永遠の王を煙たかってたんですか？」
「おそらくは。自分達だけでどうにか出来たのでしょうけど、傷ついた状態だったらその他の組織につけ込まれますから」
「じゃ、その外の地下組織も参入する可能性も？」
「今の段階では何とも言えないですね。永遠の王の目的もはっきりと分かって無いですからね」
俺達を乗せたワンボックスが真夜中の国道を駆け抜ける。

協力者

無事に逃げ出したベースの騎士達と港にある倉庫で合流した。
その中に、
「よう」
「何でいるの？」
不機嫌な店長の声。
「あ。どうも」
宗士君がいた。
「お。千早もいるんか」
「手は多いほうがええやろ」
月明かりの元、不敵に微笑む姉ちゃん。
「随分強気な女だな」
振り返ると、いつかの槍を携えた男が立っていた。
「あれ？　アンタも？」
「知り合いか？」
白石の一件を話す。
「何や。その時の」
「こっちは始めましてだな」
自己紹介を終えて、
「ていうか、コレで全員？」
見渡しても二十人もいない。
そして、店長の言葉に答えない大佐。

「では、これからの行動についてですが」
「その事で一つ提案が」
手を上げた姉ちゃんに視線が集まる。
「何でしょう？」
「多分、無事なのはここにいる人数だと仮定してなんですけど」

仮定。といっても待ってもこれ以上は来ないと言う雰囲気がこの場所に漂っている。
「もしそうなら、協力者に応援を頼む事は出来ないんですか？　騎士団本部に増援を頼んでもその情報が流れたら同じ事になるし」
「確かに。増援の規模、入国ルート、配置。それらの情報が渡ってしまっては意味無いですね。そう考えると協力者に頼むのは良い判断かも知れません」
騎士団内にスパイがいる。前提に誰も口を挟まない。
的確に騎士団のベースを攻撃されれば否定する材料は無いよな。
「分かりました。応援を要請しましょう」
時計を見て、
「日が昇るまで時間があります。それまで休みましょうか」

「ふ～。疲れた～」
壁にもたれて上を見上げる店長。
「気付いた？」
「何に？」
大佐達を見てる姉ちゃん。
「協力者の事」
「後で連絡取るんだろ」
「そうじゃなくて。言うてなやろ。その組織の名前」
「うーん」
言われて見れば。言って無いよな。
「何でだと思う」
「それは」
幾つかあるが、
「この中にそのスパイがいるって疑ってるのかもね」
「もしくはソイツに情報を流しているヤツか。って事やろ」
宗士君が俺の隣に座る。
「流すって誰に？」

「スパイって自分で情報を集めてるって訳でも無いやろ」
「何言ってんの？」
「え～と、つまり」
どう言おうか考えている宗士君。
「例えば、アイツ」
中村君を指差して、
「アイツが『上』に報告を入れるだろ」
「うん」
「もし、ソイツの上司がスパイだとしたらって事だな」
「そう言う事か」
なるほど。
「でも、それだとしたらかなり上の立場って事じゃないですか？」
「事を起すまでに信用を得ないといけないし随分労力を掛けるね」
「それ以前に、それなりの能力がいるな」
確かに。
「ま、そうじゃない可能性もあるしな」
「どっちなのよ」
「どっちも可能性としてどっちもある。って事やろ。どっちでも良いように対策しといて損はないし」
なるほど。そうなると、
「そうなるとスパイはどうやって情報を集めてるんでしょうか？」
三人の目が俺に向く。
あれ？　何か変な事言った……？
「「「はぁ～」」」
三人が大袈裟にため息をつく。
「こんなに」
「アホな」
「社員だったとは」
三人の言葉が見事に繋がった。
「話聞いてたか？」

「え。どうしてですか？」
「この中にスパイがいたとして、もしソイツに行かせたらどうなる？」
それは、……勝手に情報が入ってくるよな。
「あ」
「で、怪しいのは通信担当かその上司かもって事を話してるのよ」
「分かったか。アホ」
こつん、と頭をこつかれる。
「じゃ、その場合はこっちの動きはバレる、って事ですよね」
「バレない可能性もある。ちょっとやけど」
「一応、警戒だけはしとけ」
「じゃ、とりあえず俺達四人は大丈夫やろうし、交代で休むか」
「アンタがスパイじゃ無いと言う保障は無いんだけど」
店長が宗士君の言葉に反応する。
「ま、俺の能力からすれば一番先に声を掛けて来るやろうけど」
そう言うって事は、
「掛けられなかったんでしょ？」
「向こうにつく理由は無いしな」
「いや、そうじゃなくて、声掛からなかったんでしょ」
「こっちの方がお得意様やし」
「私の話を聞け」
「というわけで先に寝てええぞ。千早も」
指差した先の姉ちゃんはすっかり寝息を立てて夢の世界へ。
「何てベタな……ここは流石と言うべきか」
「嫌なら交代するか？」
「嫌よ。お休み」
「二時間で交代」
宗士君の最後の言葉は聞こえたのかは微妙なタイミングで目を閉じた店長。

薄暗い倉庫からでると白み始めた空がやたら眩しく感じられた。
「ふわぁ～」
思わず欠伸が出る。
「おい。もうちょっと緊張感ってモンが無いんか？」
「だって」
時計を見る。
交代の時間になった時に起しても起きなかったそっちの所為で俺は寝られなかったんだから。
ちなみに店長は今も夢の世界にいる。
「ええな～。ちゃんと寝れて」
恨みがましい宗士君の言葉にも、
「さ、行こかっ！」
明るく無視する姉ちゃん。
「千歳」
目を閉じ、今にも寝てしまいそうな宗士君。
「何ですか」
同じ様な状態の俺。
「大変やな」
心に染みるその一言。

そして意外な待ち合わせ場所。俺達の行きつけの喫茶店レスト。
「眠……。千早。来たら起して」
「俺も、ちょっと寝る」
そのままテーブルに突っ伏してしまう。
「分かった。来たら起すから」
遠ざかる意識の中でそう聞いた。

「冷たっ！」
「うわっ！　痛っ！」
突然頭に何か冷たい物がかかった。

そう感じた瞬間にガバッと飛び起きて、立ち上がる。
その勢いで椅子が倒れ、俺の声で店中の目が俺に集まる。
「起きた？」
目の間に水が半分ほど入ったコップを持って笑っている姉ちゃん。
そして、俺が飛び起きた時に押し倒された宗士君が立ち上がる。
「痛った～。何？　何があったん？」
肘を押さえながら辺りを確認して、目の前で笑っている姉ちゃんを発見。
「お前か」
「違う違う。アンタを倒したのは」
指差すのは俺。
寝ぼけた目で俺を見て、
「……何で濡れてるん？」
頭をポリポリ掻いている。
「さぁ？」
自分でも分からない。多分姉ちゃんが関係しているのは間違いないと思うのだが。
「さて、二人が起きた所で」
あれ？　姉ちゃんの隣に知らない男が座ってる。
「誰？」
「待ち人」
……
あ。そういえば。俺達がここに来た理由は、
「スマン。ちょっと待っててくれ、顔洗ってくる」
宗士君の続いて俺も洗いに行く。

席に戻って来る。
「まず　僕の事は『りっつん』と呼んでください」
……。
「りっつん……ですか」

コードネームにしては……何とも。センスを疑うな。
「で、早速だが」
本題に入る。
「その前に。失礼だけどあなた達の事は信用しても良いのですか？」
ま、当然の事だよな。
「大丈夫よ。とりあえず私達の事は信用して」
俺達を眺めて、
「分かりました」
「じゃ、本題に入るわよ」

「なるほど」
「そう言う訳やからそっちからも人を出して欲しいんやけど」
「状況が状況ですから『こっちの上』もそれに答えると思いますけど」
「それは良かった」
「で、そのスパイの方の情報は？」
「それは大佐が調べる事やし。そっちもそれに関する情報があるんとちゃう？」
「そうですね」
あっさりと認めた。
「そこ辺の事ももう少しで確証が得られると思います」
「凄いな。騎士団の内部事情にまで入り込めるなんて」
「凄くないですよ。こっちのスパイが優秀なんで」
「それはどっちに潜入してるスパイの事？」
「無論、永遠の王ですよ」
その微笑みは疑わしい。
「じゃ、大佐によろしくお伝えください」
席を立つりっつん。
「応援はいつ位になる？」
「そうですね」

店を見渡し、
「じゃ、とりあえず一人は合流させましょう」
「一人？」
「ええ。僕の裁量じゃそれが限界ですね」
「何や、もっと上の立場かと思ってたわ」
「はは。殆どはスパイに行ってるし、それ以前に僕にはそれ程の人数を取り仕切る器量は無いですよ」
「ま、詳しい事は今夜にでも」
コップについた水滴で待ち合わせ場所『リヴェンス湖』と書いた。
「では」
優雅に立ち去るりっつん。
「おい」
「何？」
「時間……聞いたか？」
「あ」
時間は午前十時。
「ここから倉庫に寄って大佐に会って話しても……リヴェンス湖までは大体」
「一時間……半位か」
「たっぷりと寝れるな」
「お。そやな」
そう考えると、
「よし、早よ行こ」
脱兎の如くレストを出る。レジを通り過ぎる直前、
「おい。お前等！」
レスト店長の声が後から聞こえる。
「ツケでっ！！」
そう言い残して倉庫に向って走り出す。
倉庫に戻って大佐に事情を話し、リヴェンス湖に向う。

当然、店長を叩き起す。
「で。何処行くって？」
たっぷり寝ていた店長に運転を任せた。
「リヴェンスでこっちに協力してる奴等と会うんや」
「へ～」
まるで他人事の様に答える。
「お前がたっぷり寝てる間に事態は進んでるんやぞ」
「別にアンタが何かした訳じゃないじゃない」
「ま、まぁ、そやけど」
眠気の所為なのか、イマイチ元気が無い宗士君。
店長と姉ちゃんのアニメトークで車内は異常に盛り上がった。
俺と宗士君を無視して。

「おい。起きろ」
……
「ん」
揺すられる感覚で目を覚ます。
寝ぼけた頭で辺りを見渡す。夕日に照らされている湖。
えっと……確か、
「あ。もう来たの？」
ここで待ち合わせてたんだ。
目を擦ると欠伸が出た。
「まだ。時間指定は無かったけど、まだ来んやろ。とりあえず顔でも洗って来い」
「そこのバカも連れて行け」

宗士君を起して、顔を洗いに外に出る。
「う～ん」
顔を洗い、固まった体を伸ばす。
「はぁ。よぉ寝た～」

ベンチに座り、缶コーヒーを飲む。
首の骨がポキポキなる。
「凄いな。千歳」
「あ。聞こえた？」
「俺も鳴るかな」
手を使って首を捻る。
いや。そんな負けず嫌いを発揮しなくても。

日が沈み、夜。
「そろそろかな」
車に戻り、外を窺う。
人通りは無い。誰か来ればすぐに分かる。
「お。来たか」
姉ちゃんの声に振り向くと、確かに人影が見える。
その影はよろよろと右に左に揺れている。
「酔っ払いか？」
「何時だと思って」
そこで言葉が途切れる。
ぼんやりと見えたその顔は俺達が良く知っている顔。
「しのぶっ！」
車から飛び出し駆け寄る。
「あ、はは。……お待たせしました」
力無い笑顔。
手で押さえている腹部からは赤い染み。
「じゃ、しのぶが……？」
意外なような当然の様な。そんな感じ。だが、そうも言ってられない状況だ。
「すぐに病院にっ！」
「救急車……はマズイか」
そうなると俺達が乗ってきた車しかない。

「すぐに病院に連れて行くから」
「よろしく」
店長の声に親指を立てて答える。
どこにそんな余裕があるのか。
叶さんを車に乗せて、
「やっぱりこういう展開ですか？」
二人組みの男がやってきた。
「ま、こっちの思う通りで良いじゃない」
明らかに敵意を持っている。
「早速で悪いが」
構えから攻撃。その動作に無駄がない。
叶さんを抱えている姉ちゃんを庇い攻撃を防ぐ宗士君。
「さて」
「先に行くぞ！」
「おう。お前も先に行け」
「でも」
「アホ。こんな奴等一人で充分や」
声は笑っているが、雰囲気は戦闘態勢に入っている。
「おい！　早よ」
「じゃ、後で」
「負けんなよ」
「はは。誰に言ってる」
宗士君の言葉を聞いた後、車が発進する。

「さて、伊達男。俺達に勝つつもりか？」
「言うたやろ。一人で充分やって」
間合いを詰める。
二人の武器が光る。
レーザー軌道に躊躇いがないな。
流石、地下組織。

この感じ、緊張感……久しぶりやな。
一人の武器は、尖端が三つ光っている。
もう一人は……。
飛来音が迫ってくる。光りの軌道と音を頼りに避ける。
体を通り抜ける光。真っ直ぐに戻る光。
シールドか。珍しいな。
……ま、どうでもいいや。
もう一人の男が突き出す。
避けて、踏み込んで、チャクラムを握りしめて振り抜く。
手には鈍い衝撃。
巻き戻されたシールドを打ち払い、左手で矛を薙ぎ払う。
男の顔が驚きに満ちる。
無防備なその顔に左足を蹴り上げる。
空を斬る足。
そのまま一回転。
「はは。貰った」
まったく、シールドは巻き戻せるからいいよな。チャクラムは弾かれたら拾いに行かんとアカンし。
背中に迫るシールドを、
「よっ」
体を捻って避け、着地。
すぐに攻める。
突き出される矛。確かに速いが軌道が読みやすい。
体をずらして避け、チャクラムを投げる。狙いは、
「まず、こっち」
シールドを巻き戻すより速くチャクラムがヒット。
一歩で方向転換してシールドを持った男に向う。
横から向ってくる矛を飛び越え、
シールドを持った男に向う。
すでに巻き戻っていたが、この距離なら接近戦になる。

相手より速く手を出す。
パンチは空を斬る。続けて攻める。
気をつけるのは左手のシールド。それ以外なら死ぬ事は無い。後は、背後からの突き。
何て思ったそばから！
気配を感じ、反転。ギリギリで避けられた。
更に一歩下がって二人に対峙する。
距離は二メートル位かな。離れたらこっちが不利やな。チャクラム片方。向こうに落ちてるし。
「さっきの女は歯ごたえがなくてな。物足りなかったんだよ」
矛を持った男が喋り始める。
「俺達二人を相手に余裕を見せて子供を庇うから隙なんか作るんだよ。はは。それで死にかけてちゃアホだな」
……
「ふ」
唇を湿らせて一息入れる。
突き出される矛。長柄だから突き以外の動作が大きくなる。だから突きに頼る。
したがって最小の動きの突きにさえ注意しておけばこの男に関しては問題ない。
左手で軌道を変えさせて、二人の間に入る。
視線をシールドの方に向けて、
そのまま駆けて間合いを詰めて、渾身の力を込めて矛の男の顔面に肘打ち。
「ごっ！」
振り抜いた勢いのまま、チャクラムを投げる。
同時に射出されたシールドとチャクラム。
互いに弾く。
弾かれたチャクラム。空中でそれを取り間合いを詰めて、
シールドが巻き戻るより速く右手を振り抜く。

「我慢すんなや」
確かな感触が手に残っているのに、男達は立ち上がる。
目にはさっきよりも殺気が篭っている。
……
洒落とちゃうぞ。
そ、そんな事よりどうする？　流石に同じ手は通用せんやろうし。
どうしようか。
等と考えていると、
矛が突き出される。
スピードは少し落ちたな。痛みか傷の所為で踏ん張れないのか。
矛の後からの殺気。こっちの方が注意が必要か。
今まではそれを抑えていた殺気。それを隠す事をしないのは余裕がないのか、頭に血が上ったからなのかは分からないが、俺としては向こうの狙いが分かるから利用させて貰おう。
シールドが殺気を放ちながら攻撃して来ないのは俺の隙を狙っているからなのは間違いないだろう。となると、矛の動きは牽制。と見ている。
しかし、矛の方も自分で決着をつけようとしている。
二人は連携が取れない。
ここで俺が隙を見せれば、二人は同時に俺を狙う。
そこに連携は無い。
一歩二歩、三歩下がって矛の間合いから外れて、体勢を崩す。
すかさずシールドが飛んでくる。同時に矛も前に出てくる。
お互いがお互いの動きに一瞬止まる。
思った通り。どっちが速い……。
シールドの方が速い。シールドを避けてワイヤーを掴んだ瞬間、『あの言葉』が頭に浮かんだ。
ワイヤーを振り回してシールドの軌道を変える。当然、矛の方に。
矛に突き刺さるシールド。これで二つの武器を封じた。

矛を持った男が呆気に取られた瞬間に男の顎を蹴り上げる。
俺、矛、シールドを持った男。三人が一直線に並んだ。
倒れる男が死角となって判断が遅れたのだろう。
弧を描いて、
「が、っ」
苦しそうに喘ぐ声。
近寄ってチャクラムを首元に当てる。
「矛盾。て知ってるか？」

「宗士君。大丈夫かな」
遠く離れた公園を見る。
「大丈夫やろ。宗士やし」
「そーそー。バカは死なないって」
……酷い言われ様だが、信じてるんだな。
確かに宗士君が負ける訳無いよな。
「それよりも」
叶さん。
今は目を閉じて痛みを堪えている様に見える。
「もうすぐ着くからね」
店長がハンドルを切ってアクセルを踏み込む。

「しのぶ。大丈夫ですか？」
叶さんのケータイでりっつんに連絡を取った。
近くに居たのかすぐに来てくれた。
「で、そっちはどうなの？」
「大丈夫ですよ。『上』も応援を出す事を了承しました。規模などはスパイの情報待ちですけど」
「情報？」
「ええ。向こうの狙いが分からない事には手の打ち様が無いでしょう」

「それも大事だろうけど、こっちに入っているスパイの情報は？」
「それも含めて。もう少し時間が掛かりますね」
「こっちの情報が流れたら。同じ事の繰り返しになるし」
叶さんが襲われたのはこっちにスパイが居る事を証明する事だな。
「じゃ、あの場所にスパイが居るって事じゃ」
「間違いないな。じゃなきゃタイミングが合いすぎてる」
「向こうは大丈夫なんですか！？」

「やれやれ」
「余裕ですね。大佐」
「ま、それなりに経験してますから」
すっかり囲まれている。
「で、他のメンバーは無事に逃げられたでしょうか？」
「大丈夫でしょう。残っているのは私達三人だけです」
目の前には二、三十人の敵。
「では、逃げましょうか。本多さん、行けますか？」
「嫌でも行くしか無いだろう」
「では」
まず、私が剣を構え突っ込む。
何も全員を相手にする必要は無い。
一人を斬り上げる。
そのまま右に薙ぎ払う。
一人一人の力量は大した事無い。
「このっ」
後からの殺気。
振り返る前に、
私の頭上を風が通り、衝突音の後に殺気が消えた。
「止まるな！」
大佐の声に足を動かす。
「先に行け」

「すいません。お願いします」
前に私、その後に大佐。後に本多さん。
数は厄介だが、本田さんの力量なら大丈夫だろう。

「ま、向こうは大丈夫だろ」
のんきにジュースを飲んでいる店長。
「それより、こっちの方がヤバいんとちゃう？」
「こっちも大丈夫ですよ。ここは僕達に協力してくれてる所だし」
「なら、大丈夫やな。腹減った」
「そういえば、宗士君は？」
あれから二時間近く経っている。
「誰か、宗士君に連絡した？」
三人を見渡す。
「僕は連絡しようにも番号知りませんから」
「私も」
「あ！　ケータイ忘れたっ！」
誰も取ってないの？
宗士君。今何処にいるんだろう？

反撃準備

あれから三日経った。
叶さんは命に別状は無いとの事で向こうの本部で療養する事になった。
新たなベースに移って交代で見張りをする事になった。
「交代します」
「はいよー、じゃ寝よー」
交代制の見張りを店長と交代する。
「さて、と」
見張りと言っても特にする事は無い。
まぁ、あったらあったで困るけど。
立ってるだけだと、体が固まるような気がして常に動かしている。

三日。
言葉にすると二文字だが、色んな事があった。

「永遠の王の目的は王族の暗殺」
スパイがもたらした情報は意外すぎて大きすぎた。
「間違い無いのですか？」
「その準備は整いつつあります」
スパイ。それは『ディリストラム氏暗殺未遂』の時、狙っていた剣士。
名前は『奥田和人』。
「しかし、思いきった事を」
「なんでそんな事をやるの？」
「おい。ニュース見て無いのか？」
店長が宗士君の言葉に反応する。
「で、なんで？」

「警察が『ライタウス連邦』系企業『トレイズ』の摘発したやろ」
「そんな事あった？」
「結構大きな事件だぞ」
「千歳知ってる？」
「確か専務がマネーロンダリングに関わってるとか、ですよね？」
「そう。その専務が永遠の王の関係者で逮捕されたの」
キョトンとした顔で俺を見る。
「なんで知ってるの？」
驚いた顔で俺を見る。
「まぁ。一応ニュースは見てるんで」
「マジで？」
「コイツはアナウンサーが目当てで……むぐ」
！　姉ちゃんが余計な事を口走ろうとしている！
咄嗟に口を塞ぐ。
「……」
嫌な沈黙。
「そんな事だと思ったよ」
店長の声が冷たく響く。
「まぁ、その報復って所やな」
「それなら警察狙うんじゃないの？」
「それより大きな存在である王族を狙う事によって自分達の力を誇示しようとしているのかもしれない」
「なるほど。勢力争いにもなってるって訳？」
りっつん達を見る店長。
直球。
もうちょっとオブラートにして下さいよ。
「まぁ、そんな所です」

「暗殺って……王族の護衛には軍がやってるんだろう？」
「軍の嶋沢栄太少佐が護衛に関する情報を流しています。これが証

拠です」
数枚の資料が大佐に渡される。
「……」
資料が順繰りに読み回される。
「じゃ、こっちに入っているスパイについては？」
その資料は王のライタウス連邦視察からの帰途のルート。その警備の配置や人数が書かれている。
「それは」
一枚の写真。画像は鮮明ではないが、誰なのかは判別できる。
「彼女が？」
「はい。何度か永遠の王の幹部と会っているのを見ました」
「こっちは……」
もう一人の女性が写っている。姉ちゃんがそっちを指差す。
「キカ。と呼ばれていました」
「キカ？　英雄と同じ名前か」
店長が呟く。
「何か？」
聞こえた雪原さんが聞き返す。
「何でもない。続けて」
「では、まずはこっちに入っているスパイをどうにかしましょうか」
「誰？」
写っているスパイについては大佐が情報をくれた。
『上沢香』騎士団の通信担当。
いつか話していた通り、通信担当がスパイだった。
「ポジション的には良い場所だな。自ら動かなくても情報は上がってくるしその中から
必要な情報を流せば良いんだし」
「そうしてても怪しまれる事はないしな」
「それを見越しての配置でしょう」
「じゃ、もっと上にも居るって事ですか」

「それは間違いないでしょう。永遠の王かどうかは分かりませんが」
協力者達を見る。
笑える状況じゃない。
「ま、黙秘って事で」
「今は良いじゃない。協力してくれてるんだし」
あっけらかんとした店長の言葉で、
「優先しなきゃイケないのはこいつをどうするかって事じゃない」
「それについてはこちらに任せてもらいましょう。内部の事ですし」
「何？　揉み消し？」
「夏子。もうちょっと言い方あるやろ？」
「しゃーない。コイツやもん。な？」
な、って言われても。否定も肯定も出来ない。
「大丈夫ですよ。これ以上こちらの情報が流れるような事は無いです。それにあなた達には依頼の方に集中して欲しいですから」
「じゃ、任せるとして。こっちはどうするの？」
簡単ですね。店長。
「無論、阻止。それしかありません」
「規模や準備に要する時間を考えると……相手の方が有利か」
本多さんが冷静に分析する。
「その辺は臨機に対応すればどうにかなるわよ」
いや……店長、それは何も考えて無いってことじゃ。
「当然、一つずつ潰してる暇はありません。先日と同じ様に同時に全てのルートを潰します。幾つかダミーが混ざっているでしょうが、今からどれが本命なのかを調べている時間もありませんから」
地図を広げてその上に赤線を引く。
「相手の一番弱いところにこっちの最強をぶつけます」
「じゃ、相手の最強にはこっちの弱いのを？」
「そうです。その場合は勝つ事が目的ではありません。時間を稼ぐ事が目的です。一つ潰せばその他に合流して数的有利を作っていけば勝率は上がります」

「それは向こうの配置が分かっている場合の作戦やろ？」
「そうです。現段階では向こうの使う予定のルートしか分かりません」
地図上の赤線が王様の通るルートに繋がる。
「最強対最強になった場合は？」
「その場合も同じです。時間を稼いでより勝率を上がる方法を選択してもらいます」
「一人でも勝てるのなら勝負しても良いって事？」
頷く大佐。
「その場合は確実に勝てる見込み確実な場合ですが。それと連絡は密に取ってもらいます」
「勝負だけで精一杯だと思うが？」
「こっちの通信士を配備します。勝敗は彼等が行ってくれます」
「一緒に闘った方がいいじゃないですか？」
「非戦闘員ですので」
「こっちからも応援を出すし、幹部達を抑える事が出来れば勝利は見えてきますよ」
「一敗も許されない状況の中で？」
「勝負事に緊張感は必要でしょう？」
「そのわりには余裕やな」
「ふふ」
微笑むその顔は、潜った修羅場の数の違いを感じさせられた。
「さて、なんだかんだと言った所でだのルートに最強が配置されたのかは分からないので、クジで決めましょうか？」
……
「「「ハァ？」」」
で、アミダクジの結果、俺の担当は『ノーティス通り北』担当。
一番最初に通りかかる。
だから俺は負ける事は許されないが、

「ここは最強が来るやろ？」
「そうですね。おそらくキカ辺りが」
「え？　この女が最強なの？」
「フリージアに入っているメンバーの中では最強クラスでしょう。ウチも彼女には痛い目に遭わされましたから」
色々と地下組織にはあるんだな。と妙に納得してしまう。
「千歳。変わったろか？」
「いいよ。時間稼ぐだけなら何とか」
出切ると思う。
情けないがそれが精一杯だろう。
「心配すんな。俺がすぐに行ったるから」
優しい宗士君の言葉。
「あ。それは私の台詞」
弟思いの姉ちゃん。
「その前にアンタが負けたらどうするの？」
一言多い店長。
「いちいち……」
「……何？」
睨み合う二人。
「キミは身を守る事を優先していれば良い」
「そうやぞ。無理すんなよ」
姉ちゃんもクジを引く。
「うーん。微妙やな」
何が微妙なのか？　気になるところだ。

「今から緊張してるのか？」
本多さんが出てきた。
「いえ。何か落ち着かなくて」
「それが緊張してるって事だろ」
そうなるか。

何か恥ずかしくなってきた。
「ま、今までとは違うしな」
今までも依頼の中で闘った事はある。
しかし戦闘を目的とした依頼は初めてだ。
しかも負ければ命の保障はない。それが目前に迫っている。
緊張するなって言う方が無理だろう。
「本多さんは緊張してないんですか？」
「命のやり取りになるんだ。するなって言うほうが無理だろ」
そうは見えないないけど。
格が違うって言うか……
「はぁ」
「どうした？」
「いや、何か……大丈夫かなって」
「おい。まだ何も始まってないぞ」
笑う本多さん。俺を励まそうとしてくれてるのだろうが、余計に核の違いを感じさせられる。
「ま、精一杯やればそれでいいんじゃないか？」
結果失敗したら……
「悪い方に考えるな」
心を見透かした声。
「あの嬢ちゃんの様にあっけらかんとしていれば結果はついて来るんじゃないのか」
……無理だろ。アレは天性のもんだし。
「では、作戦決行します。各員予定の位置について下さい」
大佐の声でそれぞれの配置につく。

決戦

俺の担当『ノーティス通り北』
人通りは無い路地裏。騎士団通信士『石原敬』少尉
薄暗い路地、二人で敵を待つ。
「来ますかね」
「来て欲しくないですが、来てもらわないと困ります」
「ですよね。すいません、つまらない事を聞いて」
「いいですよ。喋ってる方が気が紛れますから」
静かな方がアレコレ考えてしまって落ち着かない。
「そうですか」
言葉が止まる。
俺達以外の気配。
ここはフリージア軍が封鎖している区域。一般人は誰も来ない筈。
「おや？　どちら様？」
予想通り写真の女。腰に手を当てて、
「ここは立入禁止なんだけど？」
その女以外の気配はない。
「聞いてる？」
声にも態度にも敵意は感じられない。
「聞いてますよ」
二本の短槍を繋げたまま構える。
「では、御武運を」
ささっと隠れる石原さん。
その方が良いな。庇いながら闘える程の余裕は無い。
「ふふ」
微笑む声。
直後、
槍を払われる。

「くっ」
分離して、右手で剣を抑え左手で反撃。
「瞬生が言ってた通りね」
……瞬生？
剣を外され、反撃の突きも避けられる。
「そう言うって事は」
「ええ。最初から分かっていたわよ」
嬉しそうに笑う。
「では」
斬り上げられる剣。
顎先を風が通る。
反撃……する間が無い。視線を戻した直後に突き。
「うわっ」
槍で防いで後に下がって距離を取る。
「お見事」
そう言う割りには余裕があるな。
腕から血が流れる。
「珍しいでしょ」
そう言う女の剣にうっすらと赤い血が付いている。
レーザーが起動していないのに、斬られた？
それならもっと痛みと熱さを感じる筈だし、傷口ももっと……。
想像したら気が遠くなりそうだ。
それに女の剣は少し反りかえっている。
「真剣って知ってる？」
真面目に取り組む事。
何て答えたらどうなるか。
「神話時代はこういう武器で闘ってたらしいわよ」
きらり、と光る。
「剣。と言っても神話時代には色々な形状があったの。突く事を優先した剣、斬る事を優先した剣」

「じゃ、それは斬る事が専門ですか？」
「そう。斬る事に特化した剣は刃が反っている場合が多いの。でもレーザーではそんな事はしないの。何でか分かる？」
「何でも斬れるから？」
「あははは」
バカにされた様な気がする。
「それもあるけど、反りをレーザーで作るのが無理なの。レーザーは真っ直ぐにしか行かないから。それにそんな装置を作っても実用化は無理だし」
切っ先が俺に向く。
「利点はエネルギー切れが起きない事位ね。どう？　分かった？」
「貴女がその剣を使うのは分かりました」
「ちょっと違うわね。剣じゃなく刀。かの英雄『キカ』も使ったとされる『永久楽園（トコシエノラクエン）』のコピー」
「え？」
ふわっと風に乗る様に間合いを詰めてくる。
舞う様に振るわれる剣閃。
避けるのが精一杯。
しゃがんで避ける時にチラッと見えた顔は……微笑んでいた。
くそ……余裕か。
腹が立つ事だが力の差は歴然としているのは間違いない。
勝つのは無理。だとすれば俺がしなきゃいけないのは時間稼ぎ。
何処までやれるのかは分からないがやるしかない。
手を出せ。頭では分かっているのに体が反応しない。
次。それを避けて、
「このっ」
タイミング外れの反撃。
「甘い。もっとよく狙って」
返す刀で薙ぎ払いが来る。

ガキィ。と金属音が響く。
何とか左手の槍で防いだ。
右手で狙いをつけて、一歩下がる。
「おや？　今のチャンスを使わないの？」
下手に攻めてカウンターを食らっては意味が無い。
「負ける訳にはいかないので」
上がる息を抑え、相手を見据える。
ギリギリの戦闘。
張り詰めてないと切れる緊張。
集中する事がここまで疲れる事を今まで知らなかった自分。
「それはこっちも同じ事。これからやる事があるの」
変わらない余裕。
いつでもここを通る事が出来るという自信。
こっちはもう余裕なんて無い。
それなのに悔しさも何も感じない。
「キミと遊んでいたいけど」
時計を見る。
「もうそんな時間は無いみたい。退いて」
声から感情が消えた。最後通告、と言う事か。
「俺にもやらなきゃいけない事があるんで」
「そう」
刀を無形に構えて、
「え」
一瞬で間合いを詰められる。
ほのかに香る香水と血の匂い。
何が……。
ズッと何かが体から引き抜かれる。
同時に力が抜けていく。
おぼろげに見えた女の姿。
表情は見えない。

「ゴメンね」
悲しく呟く声。

「誰？」
人通りの無い『ルスザート通り』に現れた男。
「待ちくたびれたわ～」
やっと来た待ち人。
「待っていて貰ってなんだが」
銃声。狙いを外す。俺のいたところに着弾。
「おぉ～。いきなりやな」
「待ちくたびれた。と言ってたじゃないか」
確かに。その方が話が早いな。
右に左に。ステップを踏んで物陰に隠れる。
次々に撃ってくる。弾数とか考えてるのか？　等と心配してみる。
、まぁ。マガジンを変える時を狙うけど。
銃の事はあまりよく知らないが、ハンドガンならそれ程装填出来ないだろう。
……止んだ？
飛び出して、チャクラムを構える。
「そう来ると思ってたよ」
銃を真っ直ぐに構えている。
読まれてた。
躊躇わずに引き金を引く。
「あ。やっぱり」
一瞬の間を開けてチャクラムを投げる。
銃弾の狙いは間違いなく俺の体。
引く直前に動けば狙いはずれる。手元で一ミリでも距離が開けば開くほどそれは増大する。だから、
「うっし！」
しゃがんで避ける。

「痛ぅ」
一枚目が腕を切り裂く。
タイミングを逃さずに、もう一つのチャクラムを投げる。
「勝負あり」
二枚目がもう片方の腕を切り裂いて戻ってくる。
それを、男の首元に突きつける。

『ターネル通り』
突きを避け、前に出る。
「ふっ」
避けた戟が真横から向ってくる。
しゃがんでやり過ごして前に出るが、
「ちっ」
もう体勢が整っている。
一歩下がってこっちも体勢を立て直す。
基本に忠実な攻め方。だから、やりにくい。
「ふー」
息を吐いて攻め方を考える。
……アカンな。考えてる時点で負けやな。
「何が可笑しい？」
その笑いが気になったのか、初めて男が口を開いた。
「やりにくいなって」
最短での突き。避けても二撃目の払い。それを避けても槍が戻っているから最初に戻る。その繰り返し。
「そうか。では、こっちから攻めよう」
リーチが長いからこっちの間合いの外からの攻撃。
剣で弾いて、槍に体重をかけて抑えるが、
槍を引かれてこっちの体勢が崩れる。
「何がしたいんだ？」
「これやっ！」

崩れた体勢を右足を踏み込む事で立て直し、
私の間合いの中。剣を持ち直し、
突きから斬り下ろしてしゃがんで足を払う。
「ぐっ」
足を払われて体勢を崩す男。
一歩下がって倒れないが、私も一歩前に出て攻め続ける。
地面を蹴って反動をつけて斬り上げる。
勢いをつけた分、大振りになった。
軌道を読まれ、避けられて、
「詰めが甘い！」
突き出される槍。
「そっちやろっ！」
ワンパターンの攻め方。
軌道も早さも同じ。
いい加減に目も慣れた。
剣を振った勢いのまま回転して避ける。切っ先が顔を掠める。
私の方が速い。
払われるより速く、男を打ち付ける。
「がはっ」
見事ヒット。
お仲を抑えて倒れている男。
「ふぅ……他はどうなったかな」

「そうか。分かった」
通信士からの報告を聞く。
「今の所は順調か」
二勝一敗。あの二人で止められるか。
いや。やれると信じよう。
「そうですね。こっちも頑張りましょう」
「俺は常に最善を尽くすよ」

そう。今までそうやって来た。それはこれからも変わらない。
「さて、こっちも来たようだ」
ぶん、と一振り。
「よう、退いてくれよ」
ダンダン、と迫ってくる。
突きを出して牽制するが、手に持っている剣で弾かれる。
「今なら痛い目見ずに済むぞ」
「退いて欲しいのか？」
「いや」
口元が歪む。
「そうなら俺が楽しめ無いからな」
柄の上を剣が滑ってくる。
「退かないのなら、少しは頑張れよ」
槍を真横に持ち変えて鍔迫り合い。
「こんな長い槍を器用に使うもんだな」
「それはお互い様だろ」
男の剣も通常の剣の三倍近い剣。それを軽々と振るっている。
「力も互角か？」
挑発する声。
ぐいぐいと押してくる。
こんな安い挑発に乗るわけにはいかないが、押し込まれる訳にもいかない。
じりじりと押される圧力で後退して行く。
「俺の方が上かな？」
笑った瞬間に槍をずらして、バランスを崩させる。
前に大きくよろめく。その隙をつき、槍を振り下ろす。
打ちつける槍。それを、
「……っぐ」
体勢を崩しながらも、剣で防がれた。
形勢は逆転。しかし、攻めきれなかった。

状況は俺に有利だが、慎重に、冷静に。そう焦る心に言い聞かせる。
下から睨みつける男。
槍と剣が軋みを上げる。
剣が翻り、槍が外される。
「はっ！」
斬り上げてくる。
それを一歩下がって避け、槍を構える。
突き出す槍。相手の肩を打ち抜いた。
同時に剣が振り下ろされた。

「まったく」
厄介な相手だ。
微妙な距離を保ったままの相手。
シールドなんて珍しい武器を使ってる奴なんて久しぶりに見た。
様な気がする。多分。
まぁ、今はそんな事どうでも良い。
「さて」
くるん、とチャクラムを指で回して相手を見てどうするかを考える。
シールドを装着した左手に添えている右手。
その照準は私。その軌道もある程度はアイツの思い通りに動いている。
「まったく」
同じ事を何度呟いただろうか。
ワイヤーを器用に使い軌道を修正してくるなんて。
ワイヤー自体の長さもあるが、それ以上離れるとこっちの攻撃も防がれやすくなる。
さて、どうするか。
相手は今の所、中距離を保っている。
という事は、接近戦に自信がない。かも。

そうなれば私の方が有利。かも。
……何ていい加減な作戦。
実戦とはそういうもの。
そう納得して、ぺろっと舌を出して唇を湿らせる。
よし。
チャクラムを握り、間合いを詰める。
大きくカーブして射出されるシールドをキッと見据える。
ギリギリで避ける。
ワイヤーが私に絡みつく様にうねる。
横に進路変更してそれも避ける。
巻き戻す時にもワイヤーが自在に動いて足を払う。
「このっ」
飛んで避けるがワイヤーが巻き戻されて……最初に戻る。
シールドの一撃目、ワイヤーの二撃目、巻き戻して三撃。
連撃は三発で終わり、か。
あ。あのアホの話を思いだした。
痛みは一瞬。覚悟を決めろ。チャンスは一度。絶対にビビるな。私。
「ふぅー」
相手を見据え、心を落ち着けつかせる様に息を吐く。
……よし。行くか。
とん、と飛んで一気に走る。
シールドの射出を見極めて避ける。ワイヤーの二撃目。
あのアホと同じ戦法なのはムカつくが……。
手の届く距離の時に一気に掴む。
握る瞬間に、するっと逃げて行く。
……え……マジ？
そのまま後からの攻撃。その時にチャクラムを投げて相手の意表をつく。
体勢を崩しているのはお互い様。違うのは傷つく覚悟があるのか、それだけ。

レーザーが起動しているシールド部分レーザー部を見極め硬いシールドを思いっきり蹴り上げる。
痛む足を気合で動かして、
「どらぁっ！」
握ったチャクラムで思いっきり殴りつけた！

曲がり角から人影が見えた。
その瞬間に剣を構え、斬りかかる。
「おいおい。危ないな」
受け止めた女。
「私が一般人だったらどうするつもり？」
「市民はここには来ないでしょう？」
「間違いないな」
剣を受け止めたそれ。斧槍を振るう。
「さぁ、始めましょうか」
優雅な微笑み。
そこにあるのは絶対の自信。
離れて相手を見る。
斧槍の切っ先を地につけ構えている。
重量武器なら速さで撹乱して一撃を決める。
ジリッと足を動かして、タイミングと距離を測る。
「来ないならこっちから行くわよ？」
振り下ろされる斧槍。
その圧倒感は受けられない。
一歩下がって、振り切った瞬間に反撃に出る。
地面に突き刺さった斧槍。
無防備な女。
タイミングとしては完璧のはず。
だった。
「残念」

薙ぎ払った剣は斧槍の柄に阻まれて、私は蹴り飛ばされた。
抜いた訳じゃない。
女は柄を基点に横回転し私の剣を避け、そのままの勢いで私を蹴り飛ばした。
「よ」
斧槍を抜いて、私に向ける。
「邪魔しないなら、ここで終わりにしてあげる」
「結構だ」
口に広がる血の味に決意を込めて言い返す。
……ここは通さない。
立ち上がり、剣を構えて、今度はこっちから攻める。
突き、から払い。剣を返して斬り上げて斬り下ろす。
一歩進んでまだ攻める。
斜めに斬り上げて、払いに軌道を変え、振り払う。
後に下がり壁を背にした女。
息の続く限り突き続ける。
「ハァ……ハァ……」
息の切れた瞬間に距離を取られた。
「流石は騎士。良い攻めね」
私が責めた結果は、女の顔と服が少し切れただけ。
「じゃ、次は私が攻める方で」
リーチでは圧倒的に私が不利。
突きだけの攻め。回りこもうとしたら払いによって動きを封じられる。
正面から動けない。
突きは軌道を読めるが、このままじゃジリ貧になる。
カウンターを狙うが、その為には体の動きだけで避け続けないとこの間合いからじゃタイミングが取れない。
それは分かっているのに、剣を使わないと避けきれない突きが向ってくる。

回り込めない上に、避けきれない突き。
「ふ」
思わず零れる微笑み。
相手の顔が不思議そうになるのを見逃さなかった。
刹那の瞬間。一気に距離を詰めて、
「はぁぁっ！」
渾身の力を込め振り抜く。
柄に阻まれるが、攻め続ける。
ぎりぎりと押し、動きを止め私の間合い。長柄が仇となりさっきの速さでの対応は出来ない。
剣を引いて再び横薙ぎ。柄を直撃するが構わずにもう一度。
「妬けになったか？」
声には余裕が感じられない。今決めないとこっちがやられるな。
再び弾かれる。今度は斜めから斬り上げる。ぎりぎり届かない。
それは女も分かっている筈。
剣が女の顔を通る直前に、レーザーを起動させる。
「！」
突然目の前に強い光りがあれば目を閉じる。
すぐにレーザーを切り、腕を打ちつけ、勝負あり。

「やぁ、久しぶり」
見知った顔がやって来る。
彼女がここに来るという事は、彼が負けた事を意味している。
その事を報告で聞いてはいたけど、落ち着かないな。
「……」
気にはなるし、初めて会ってからそんなに時間は経ってはいないが心が逸る。
それを表情にも声にも出さずに、
「そんなに嫌そうな顔しないでくれよ。傷つくじゃないか」
いつも通りに話しかける。

「もう誰もいないと思ったのに」
「ふふん。こっちもこの道を通ると思ったのでね」
「予定通りに真っ直ぐ向えば良かったわ」
「寄り道も良いのもだろう」
「今回は失敗ね。キミとは二度と会いたく無かったわ」
「僕はもう一度キミに会いたかったよ。キカ」
手に持った銃を構える。
「言ったでしょ。私は会いたくなかったって」
「これが最後」
「でしょうね」
「キミが」
「貴方が」
「「ここで死ぬから」」
同時に距離を詰め、火花が飛び散る。
「く」
こっちは二丁なのに攻めきれないか。
剣を弾いても体をずらして狙いを定めさせないのは流石、と言った所か。
剣の間合いじゃないのに、このスピード。
息つく暇もないな。
隙を見せたら一気に持って行かれそうだ。
距離、スピード、タイミング。
それらを見計らいながらチャンスを逃さない。
上下左右。関係なく攻めてくるキカ。
……まったく。厄介な奴がいたもんだ。
剣を弾いてそのまま押さえつける。
キカの顔に照準を突け、躊躇い無く引き金を引く。
発射されたレーザーがキカの顔の後に着弾。
「嘘ぉ」
この距離、このタイミング、このスピードを避けるか？

「ふ～。危ない危ない」
とんとん、と三歩ほど下がり剣を構える。
「今のはヤバかった」
「と言うわりには余裕の様だけど」
「ふふ。そう？」
余裕の顔をしているのが悔しい。
「ま、レーザーなんて避け様がないけど、引き金を引くタイミングで動けば何とかなるもんよ」
何て事無い種明かし。
しかし、口で言うほど簡単ではない。
少しでもタイミングがずれればなんの意味も無い。
「さて、仕切りなおして」
という事は距離を詰めれば向こうに有利。離れればこっちが有利って事か。
よくよく考えれば銃と剣だし。
それなら接近戦に付き合う必要は無い。
真っ直ぐに突っ込んでくるキカ。
剣の間合いぎりぎりで横に動いて、
銃を撃つ。
一発は剣で、一発は外れた。
「痛った～」
至近距離で受ければそれなりの衝撃がある。
しかし、光速を避けるか？　普通？
「今のはヤバかった」
踏み込んで、
しまった。向こうの間合いだ。ここは。
斬り上げてくる。
銃を構える事は……出来ないな。
剣を避け、体勢を立て直す。
衝撃が残っているのか、一撃の力は弱い。

しかし、厄介なスピード。
足を止めるか。
狙いを足に変える。
気取られるな。チャンスはそう無いぞ。
斬り上げられた剣。
ここ！
銃口を足に向け、
「良い狙いね」
バレテタ？
柄で、胸に一撃。
「がはっ」
息が詰る。
「勝負を急ぎすぎたのかな？」
からかう声。
何も言い返せない。
「ごほ、ごほ……さて」
今度はこっちから攻める。
息がまだ苦しいがそんな事言ってられない。
やっぱり……キカは強い。
多分、僕と互角かそれ以上。
確実に勝てると言う要素が見つからない。
それなら、少しでも時間を稼いでするべき事をやろう。
守りに専念しても、このスピードを何時までも防ぎ切る自身は無い。
銃を撃っても避けられるし、反動で出来る隙をつかれたら意味が無い。
「銃を撃たないの？」
剣を構えず、体の動きだけで避け続ける。
「銃は振る物じゃなくて撃つ物でしょう」
聞くな。
当たらなくても良い。

気をつけるのはカウンター。
あの剣はレーザー無しでも斬れる。
コピーだとかビンテージだとか言っているが、あれだけ打ち合っても刃こぼれはしていない。
軽く丈夫な金属。無い事は無いが、アレは異常だ。
何よりレーザー装置が無いのが不思議だ。
軽く弧を描いたデザイン。確かにそれならレーザーは使えそうに無いが、キカなら普通の剣でも充分に扱えそうだが、
個人の趣味などと言われてしまえばそれまでだが。
「どうしたの、考え事？」
意識をキカに向ける。
この隙すらも見逃せる余裕。
「いや」
自分のペースを保つ事に集中しろ。
もうすぐ時間の稼げれば、こっちの勝ちだ。

ギリギリの戦場の中、場違いなメロディーが流れる。
「誰？　こんな時に」
……
「はい？」
キカのケータイ。
「おい。……緊張感ってモノを」
手で制される。
喋るなって事だ。
「あ。そう。了解」
パチン、とケータイを閉じ、
「今回はここまでって事で」
「はぁ？」
「どうやらこっちの事情が変わったらしいの。とりあえず今回はそっちの勝ちって事で。次は無いよ？　それじゃ」

陽気に帰るキカ。
しばらく警戒していたが、どうやら本当に帰った様だ。

終局

ラフトタイムスの小さな記事に今回の任務について載っていた。当然、王の暗殺等と書いている訳もなく、事故があり一人が死亡とだけ小さく書かれていた。
騎士団は永遠の王のメンバーを逮捕した事でそれなりの成果を上げ、入り込んでいたスパイも逮捕
。これ以上の情報漏洩は無いだろう。多分。
立野大佐達は事後処理に終われてかなり忙しいらしい。
そんな中でも、たまにチビッ子から電話がかかってきて喋ったりご飯食べに行ったりしている。
りっつん達も影から永遠の王を追いかけているそうだ。
本多のおっさんの怪我はかなり酷いらしくまだリハビリをやっているそうだ。

空は随分高くなり、気温はかなり涼しくなった。
「いらっしゃい」
いつもの喫茶店、いつもの時間にいつもの顔。
「なんにする？」
「ん～。コーヒー」
「店長ー。コーヒー」
カウンターにいる店長にオーダーを言いに行く衣里。
案内しろよ。
お。いつもの席が空いてる。
それが分かっているから案内されないのか。
どっちでもいいや。
「はぁ」
「お疲れ様です」

「体はもういいの？」
「はい。本調子には遠いですが……リハビリも兼ねて」
しのぶが今日発売の週刊誌『エルレーコン』を持ってきてくれた。
無論、漫画。
「そう。頑張って」
エルレーコンを読む事間無く、ぼんやりと店内を見つめる。
今まで何度も見たいつもの光景。

私と一緒にこの光景を見ていた『アイツ』はもう……いない。
それを聞いた時は信じられなかったし、受け入れたくは無かった。
でも、時間が経つにつれそれが現実味を帯びてきて、それを認めたくない一心であらゆる場所を探し

回った。
日付が変わり、日が昇り、また沈む。
その間、ずっと探したけど『アイツ』は見つからなかった。
疲れ果て、公園のベンチに座りこんでいると千早が来てくれた。
「行こ」
私よりずっと辛いはずの千早の声に泣きそうになった。
涙を堪えて、
「うん」
立ち上がり、千早の後についていった。

「よ。元気？」
「ま、そこそこ」
私の前に座る千早。
「あ、私もコーヒー。あと卵サンド」
「で、仕事は？」
「三時に依頼人が来るって言うてた」
「あ、そう。それなら私もお昼食べようかな」

あの日から一週間位経ってから千早が仕事を手伝ってくれてる。
『アイツ』より優秀でちょっと抜けてるパートナー。
時間は流れ、次第に悲しみを薄れさせてくれる。
でも、私は忘れる事は無いだろう。
悲しみを胸に、『アイツ』の分も頑張って楽しく歩いて行こう。

〜あとがき〜

前回から時間が経ちましたが、第二作目ようやく書き終わりました。

世界観はそのまま受け継ぎ、よくある？　設定である『代理屋』を舞台に日夜頑張っている二人を
中心にストーリーを動かしていたのですが、どうでしたでしょうか？
一話完結で、最後は長編という展開でキャラ数をそれなりに考えてましたが、それでも足りずその
場で作ったキャラもかなりあります。
結構長い付き会いになったキャラ達と分かれるのは少し寂しいですがこれも経験になれば、と思い
ます。
そうは言ってもこれからも書きたいキャラや設定、ストーリーは

ぼんやりと浮かんできていまし、

別のストーリーも書いて見たいとも思ってます。

終わってから思うのは、次へ活かしたい所と次への課題。
それらを受け止めて精進していきたいと思います。

楽しんで頂ければ幸いです。
ここまで読んでいただきありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9580c/

椎名代理店

2010年10月10日07時13分発行